

赫也姫 かくや姫俗名おふぢさまといひ

遍 昭 御落馬はいかゞ扱々よい御歌

花より外にしろ人はなし落馬

黒主 百にない鏡六歌仙にいれ

歌でさへ黒は洗つてよわいな

業平 性悪ルは阿保親王五男なり

井戸端に茶碗のいはれ比べこし

敷島の道草に折るかきつばた

やは／＼とおもみのかゝる芥川

芥川鍋とりめがと追ひかける

芥川どつちへも逃ける形なまでなし

業平は高位高官下女小あま

業平は金を遣つたどらでなし

小町 天帝へ小町大きなねだりごと

〇もないくせに面影をしむなり

〇〇もせず〇もせず二人名を残し

斷ことわりを雨乞どもに百度いひ

百夜目は何を隠さう〇はなし

少將は一夜できもをつぶす處

年よれば不性一字で返歌なり

關寺の卒堵そとほ婆たふれたまゝで置き

手いらすのばゝアそとばに腰をかけ

關寺しよけしゆの所化衆そんらかけて居る

雨乞も袖乞もして名をのこし

うね／＼は盛り落目は誘ふ水

佛がかはり卒堵婆へえつとコサ

すゝきでまねいては惚人ほれてなし

よいお手を反故にしたのは延喜帝

しやう／＼な御身を穢す時の難

延喜の金箱太宰府へおしこめる

京都では梅を盗まれたとおもひ

梅の木の化けそこなひと時平いひ

よく書クがすかぬ手風と時平いひ

天帝へ心づくしの御告文ごかうぶん

洛中へ蚊帳をつらせる御うつぶん

かみなりはおもねる公家の上へ落ち

度々の敕使餘の儀にあらず雷の事

僧正がかぶりをふればもえあがり

四度目の敕使は禮に行くのなり

貝がらが鳴くと道風にらみつけ

濱をぎを他國の名にていせはよみ

遣唐使詩も棊も喰へぬ男なり

能因

違ひない真中まんなか蜘蛛が指圖する

唐人の眼には蜘蛛なくよむと見え

詩の棊のといつて日本の智慧に負け

しやぐわん／＼と野馬臺を疊むなり

能因が貌を取込む俄あめ

敷島の道草内の窓で喰ヒ

妄語戒やぶり能因一首よみ

歌人は居ながら日にやけて謔をつき

白川の名歌能因黒くなり

細布をとほれ能因こまる

わらぢくひまでは能因氣が付かず

底豆のかはり能因居りだこ

兄弟の中へ寝るから中納言

面白く雨風にあふ中納言

行平

行平は五風十雨ときめたらう

將門

つなぎ馬口取までが百官名

こしみのの上からつめる中納言

義家

弓は涌き太刀では潮が干て仕舞ひ

松風へばかり一首の立別れ

依藤太

七まきと七變化とを藤太射る

行平のみとせは爰に磯ぜり

藤太さま御入りと海月門を明ヶ

侍従

待つよひの晝まで只の侍従なり

將門をべたを龍王へはなし

道鏡

道鏡が母馬の夢見てはらみ

これは種々御丁寧にと藤太いひ

弓削村へ救使のまへに山師來る

海坊主持にしやれと藤太いひ

左少辨殿弓削村へ救使なり

水際で藤太土産に大こまり

大佛の鼻ほどあると奏問し

珍らしい龍宮米を喰ふ藤太

權右馬の頭に道鏡任せられ

賴光

賴光の武具あらまはしは貫ひもの

西行

此のねこで俗の時なら銀ぎせる

綱

四天王渡邊ばかり紋がしれ

其の猫をくれさつせえとむら子供

ヤレそれといふ内破風を蹴破られ

兼好

いでや此の世に生まれては文も書キ

あゝも似るものかと綱はくやしがり

つれづれの外にまるらせ候も書キ

金時

足柄で賴光無宿めしかゝへ

賴政

賴政が位はほんのひろひもの

忠盛

公時は親類書きに困るなり

よむたびに賴政とかく徳をつけ

しぼりあけ忠盛糠で手を洗ひ

文武の譽れ時の鳥夜のとり

清盛

こんな笠すなと忠盛呵りつけ

いるにまかせてとは歌も矢つぎ早

清盛は佛のために迷はされ

弓箭を取っては引きぞわづらはす

重盛

清盛の醫者のはだかで脈を取り

あの時は氣がもめたよとあやめいひ

賢者のためし千代もひく小松殿

夜の鳥射た御褒美に夜の伽

小松殿已後一門は海のもの

賴政は素人好きのするむほん

唐の寺和の賢人が一だんな

源三位きうくつさうな腹を切り

義朝

小松ではもりのしけらぬ管の事

討死が奈良だと芝が團うちばなり

常磐御前

きん玉をつかめくと長田下知

むだ骨を折つた扇の芝となり

俊寛

ししが谷みんなが道をかへて來る

鶴ざりでおけばよいのに哀れなり

康頼

やすよりは御産に至極よい名なり

しひの木でさかえ茶の木で終ルなり

小督

驚き給ふナ仲國で御ざります

猪早太

猪の早太さまと尋ねて山師來る

今朝見れば四五ヶ所鶴に引つかかれ

いとまでも出たか宇治川早太居ず

高倉宮

牛を馬乗りかへ宮は落ちたまふ

蟬折を宮六度まで明けてみる

田原又太良

扱よくしやべるやらうと源三位

義仲

朝日出て二十餘年の夢はさめ

状箱が來ると呼ばるゝ大夫坊

兼平

兼平はりつばに落馬した男

巴御前

木曾どのはいい陣太鼓持ち給ひ

尻持以來と秩父和田でいひ

實盛

年よりの化けもの手塚組みとめる

義經

色を思案の内として虎の巻

牛若は大長刀に二度出合ふ

金うりが御味方とは吉次なり

とんだ身の軽い野郎ト能登守

義經は海施餓鬼でもすればいい

ふくみ状ひゝあかぎれはかき落し

義經は辨慶の下書でふくみ状

よしつねは母を〇〇たで娘を〇

山伏に度々ばける源氏がた

義經はけにみなもとの九郎人

前と背に不用ナ道具武藏坊

辨慶がせがれ堅固に出家する

よくくゝの事辨慶も數珠を出し

扇おつとり道を聞く武藏坊

へどをふみくゝ辨慶祈るなり

藁でたばねても辨慶は辨慶

辨慶は山で育つて川で果て

熊坂

いい鳥が來たぞと松の上でいひ

わんばうはやると物見の松でいひ

靜

舞の内辨慶は出て船の世話

船子ども舞を覗いて叱られる

だらすけをのんで靜は癩を下ゲ

忠度

狐川より引きかへし行き暮れる

山さくらよみ人しらぬ者はなし

俊成卿の片うでを打落し

景清

御縁日だけに景清用捨する

奈須與一

貌を見いゝ能引いてひやうと射る

熊谷

其の後は衣で通る一の谷

發心も谷法體も谷でする

平山

強さうな名で弱いのは武者所

佐々木

先陣は兄弟ながら手が悪し

曾我

時鳥聞きく二人討ちに行き

松明で工藤が夜具は三所こけ

泥足で工藤が夜具をはね退ける

鬼王へ知りやる通りとかたみなし

鬼の王でも掛取にせめられる

ぬき足で蝶々をとる五郎丸

狸寐入りは北條の假屋なり

烏帽子親曾我一件に口を閉ぢ

相模入道俳名は東魚

汐が干て東魚おさへる鍋のふた

やきめしを三ツ義貞はふみつぶし

楠はなきものにして扶持をくれ

奥がたへ遺言はなし湊川

旗持ももらひ泣きする湊川

師直

からくりのやうに師直のぞくなり
たゞも居られず師直は墨をすり

秀吉

御出陣猿のかしらへ龍を召し

加藤

日本の虎は異國で鬼とよび

今度は頼阿に書かせうと師直

小西

人參は行長殿に見てもらひ

薬師寺と兼好返事にこまり

石田

佐吉めは仕合者と和尚いひ

時頼

最明寺なんのかのとてにじりこみ

曾呂利

そろりくと笑はせる新左衛門

源左衛門

みな人にやつたは常世謹らしい

小夜姫

旅の留守かたい女は石になり

源左衛門走らぬ馬に鞭を打ち

照手姫

美しい車力熊野の湯場へ来る

源左衛門雪の中から掘り出され

清姫

悪ル堅い山伏めだと莊司いひ

イデ其の時のおはちには粟の飯

櫻姫

大黒にやいやだくと櫻姫

やせ馬の一駄に重き三ヶ莊

梅若

梅若は旅かけまにはいやといふ

信玄

信玄は七書に秀で四書にもれ

其角

小便に花を咲かせる誹諧師

道三

油うりでも仕出したは道三

加賀千代

かが紋を著て風流ナ後家を立て

信長

七ツ目もあてにはならぬ本能寺

人物雜

からくと笑ふ三人名が高し

明智

丹波の鼠京へ出て馬を喰ひ

赤染と周防の内侍いとこ同士

ありやこりやの名は實方と馬の内侍

腕づくにかつたは綱と七兵衛

武士

人は武士なぜ傾城にいやがられ

なまかべへ御使者を通す御立身

ふきといふもめうがといふも御大祿

酒池肉林の中へ出る國家老

白眼にらめツくらには勝ちさうな國家老

國家老御意の中ウにはござれども

馬のゆく方へ乗つてく俄武士

果狀はたしじやう泣くなくと墨を摺り

親にて候者討たれ拙者薄手

廻りあふまでは手の内受くるなり

どの湯へも一ト廻りいる敵討

敵もち月は見れども花に出ず

百年目やらいの中へ入れられる

忠臣は縁と橋との下に住み

鐵之介鼠で忠の名を残し

御寢所の下は忠義のねずの番

かな手本の字は京に侘住居

皆出ると千字文でも足らぬ所

本望サいろはの數に落字なし

吉良びやかなるお寢まきが炭だらけ

あさのみを一ト粒えりは四十七

孝よりも忠義は二十三多し

石にせいあつてかたまる四十七

三年でいろはをあける本望サ

知れて居る物を算へる泉岳寺

僧

手向水一荷でたらぬ泉岳寺
 緋の衣著れば浮世がをしくなり
 しつほりと和尚の悔み馴れたもの
 笑ひ止ムまでは高座で汗をふき
 いい宗旨あたま丸めるぶんの事
 痔を見てせざるは勇みなき和尚
 のるいのをするが和尚の落度なり
 どら和尚俗の談義を聞いてゐる
 愚僧化しては醫者になる面白さ
 大黒を貧乏神と納所いひ
 醫心があるので御所化不首尾なり
 和尚さま苦しい譯は二タ世帯
 大黒を和尚布袋にしてこまり
 圍はれへ来る法類は極こんい

木食

尼

薦僧

醫師

搦手を望むはみんな法師武者
 木食の大病めしをゆるされる
 新尼の我をいやがる影法師
 こも僧は貫はいでもの姿なり
 ようだいを十分聞くと膝をたて
 さじかけん素人めにはをしいやう
 如月を卯月にするで醫者はやり
 駕へは無點假名付は内でもみ
 御簾ごし脈は病の綱わたり
 扱しも勝手も藪醫まはりかね
 醫者衆は辭世を譽めて立たれたり
 代脈はなんのこいつの氣でみせる
 したがつて娘儀とよみ醫者笑ひ
 よい後家が出来ると嘯す醫者仲間

學者

藥禮は取るより早く脈をとり

職人

光秀を素人細工にころすなり

すみくで大工をそしる疊さし

片腕になつたと譽める刀鍛冶

綿つみは店へ娘の子を飾り

むだ足を一日置きに紺屋させ

無愛想なものは桶屋のぶん廻し

扇屋は要人傘屋は六郎兵衛

面白く陰火の燃ゆる硝子屋

けふ限りの屋根屋柳を解いて行き

縫箔屋五色に壁を吹きつける

西行と五重の塔を干しかため

仕合は嫁だと石屋朱をつぶす

歌嘯し石屋がするは辭世なり

唐木屋はじまつて下駄を一度賣り

通辭

舌二枚はれてつかふは通辭なり

祐筆

御祐筆人をつかふも筆のさき

盲人

六波羅の二十餘年を琵琶にのせ

檢校になりかねる筈人がよし

人竝に座頭の見るは夢ばかり

座頭の坊せくと淺葱に目を開き

檢校は手引があつてへびにおぢ

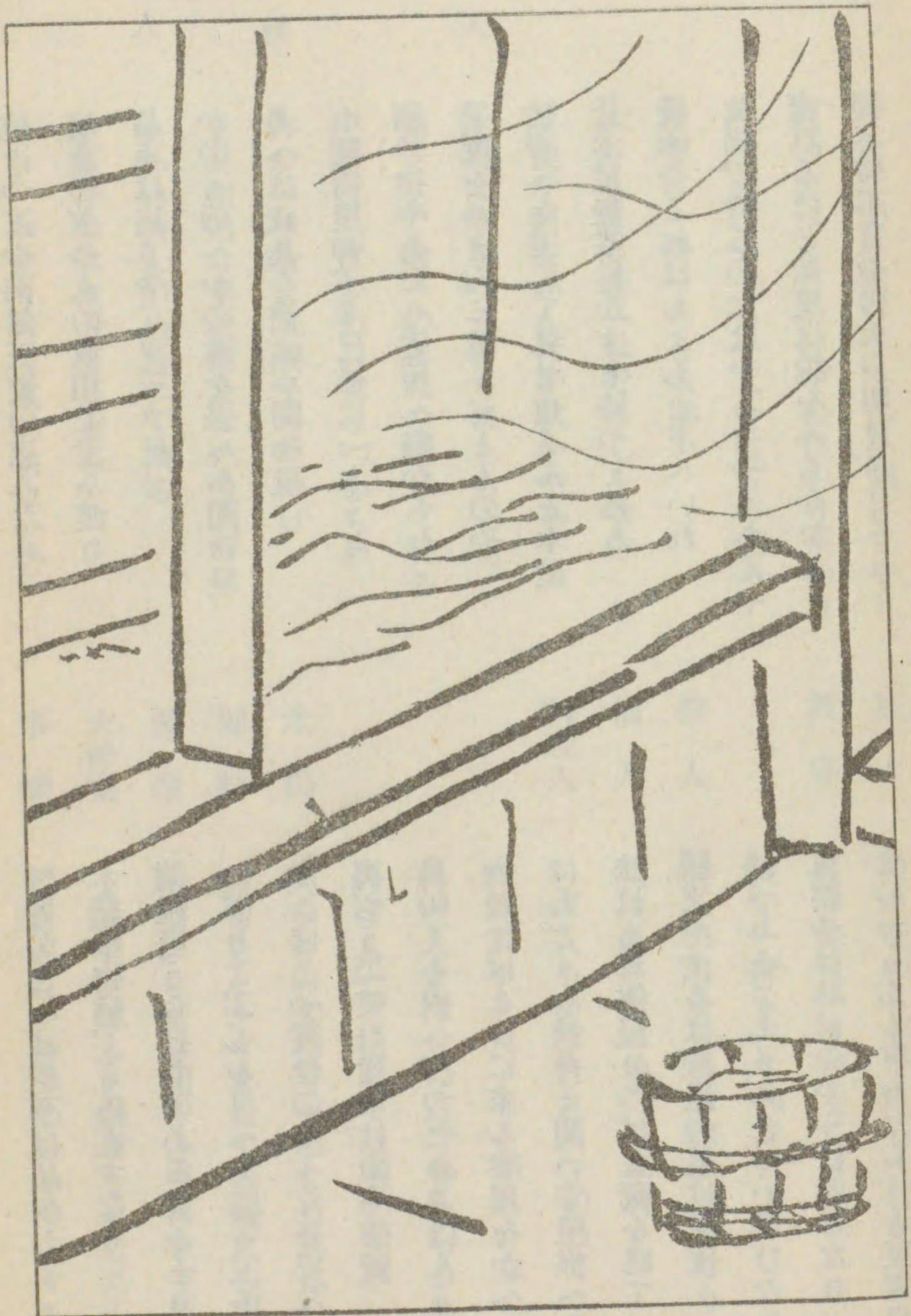
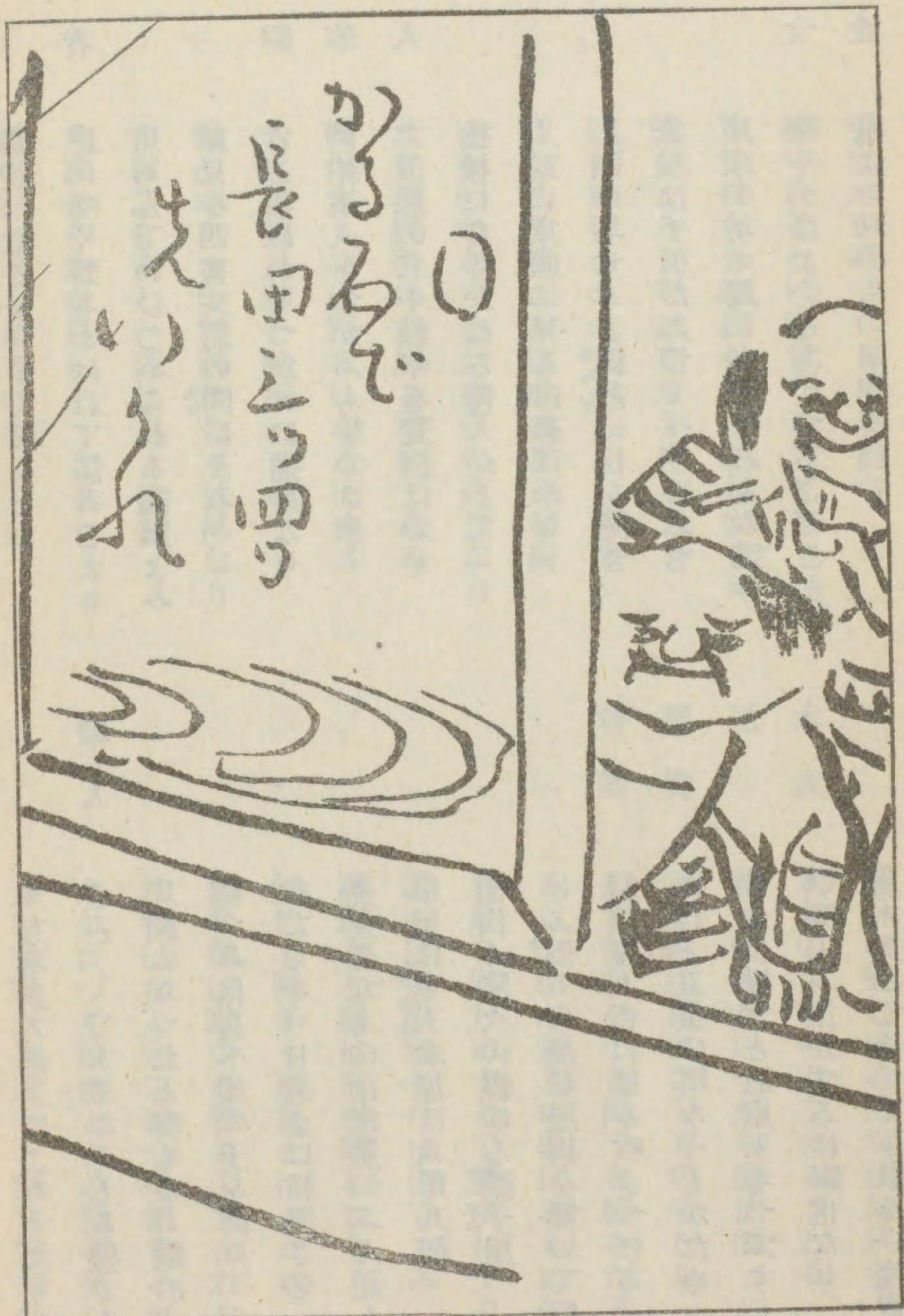
座頭の坊木馬にのせてみんな逃げ

物干へひよいとあがつてごぜこまり

藪より功のもの明智を殺し

瞽女

百姓



商人

焼きつぎや南無三寶の恵みなり
 焼きつぎや人の鹿相で世を渡り
 品々はおさずニツ三ツ見せ
 かのもへのかの本を添へ小間物屋
 男へは武具を商ふ小間物屋
 小間物屋御不幸已後に一本うり
 瀬戸物やあたり近所へ損がしれ
 采配をふきんに遣ふせともものや
 仕やうを爰にて見せ申さんと本屋
 貸本屋無筆にかすも持つてゐる
 貸本やこれはおよしと下へいれ
 生揚でやるのははやるちやうちんや
 賣れるほど館屋は貌をふくらかし
 御不勝手質やの大戸明けさせる

質置のことは多きは品少し
 木薬や作病ぐらる直すなり
 薬種屋うら打ちのある金をとり
 にぎりこぶしを目へあてる玉子うり
 かまほこや渡世のやうな音でなし
 裏ぢうの笑ひ齒ぬけの牛蒡賣
 鳥のくそ貌へべつたりさほんうり
 とひ竹はまけに來る時肩をかへ
 はしごうり拔身と聞いて屋根へ逃げ
 法にもれ餅屋りつばな藏を建て
 膳立をするは椀屋の負け支度
 錢うりとさしうりきつい違ひなり
 豆腐やは時計のやうに廻るなり
 金のわらぢも有るだらうと豆腐屋

番人

夜そば切り猪口で手水を懸けてやり
 庭の面はまだかわかぬにのりやのり
 松井屋はやつこ一人をなぶり切り
 讀賣は一冊うると咳拂ひ
 よみうりは箸一本でめしを喰ひ
 讀賣が何をふんだか歌をやめ
 辻番は棒をつゑともはしらとも
 拍子木で捨子のまたを明けて見る
 辻番は二百がわらにうづめられ
 供がへり槍に二腰くゝりつけ
 主人相知らず槍持うゝろうろ
 生酔の供もの拾ひくゝ來る
 藪醫者の供遠方より來る
 何申しやせうと後家の供はいひ

奴僕

筏士 川中をわらぢであるく筏のり
 渡守 渡守毎日一ツ所をこぎ
 狩人 渡守一棹もどす知った人
 料理人 狩人の山を見る日はあふれなり
 料理人 三枝ほど上に柚の子孝行サ
 料理人 料理人小ゆびほどたこ切つてくれ
 料理人 料理人すとんくゝとをしけなし
 料理人 料理人まはらぬ舌で譽めらるゝ
 料理人 料理人一ツ出しては覗いてみ
 米搗 米つきのなんですねたる二はい喰ひ
 髮結 髭切をとぎすましてる鬢だらひ
 按摩 按摩はり躰を聞くと手ぬきする
 太神樂 太神樂仕舞ふと獅々をべころし
 事觸 ことぶれが長屋の針を棒にする

傀儡師

くわいらい師箱を叩くがノリ地なり

猿 曳

猿廻し黄色ないとは三許り

きせたさは子ほどに思ふ猿廻し

輕業師

我落ちにきと語るなと輕業師

老人

生酔を家内中出て落手する

耳に目をぶらさけ親父鼻をかみ

鳥 指

鳥指の子はとんほからさし習ひ

乞 食

橋の菰丁稚に見せてあれだぞよ

わきよれに一貝すくふ馬ふんかき

廻 國

廻國はとんほのからだ中歩行き

盜 人

白浪に千鳥は高く音をはつし

親

來年を苦にする無筆八十七

寐むたがる子を出遣ひにつかふなり

早鐘に和尚を見れば猿ぐつわ

つよいどろばうもないもの石燈籠

狂 人

氣ちがひを繪にかくときは笹をもち

醉 人

石どろろうなま酔ひ手付損にする

藥の苦せない親父は喧嘩の苦

息 子

母親を杖の下からだますなり

女房ほど母の迎ひはこはくなし

伯父きから一寸來やれはいやな氣味

四ッ切りをやぶり初めは若だんな

徳に入る門へは息子おもむかず

歌がるた仲間へ息子まぎれこみ

此のたびは父も取敢へず母のわび

いひぬけをみんな女房に覚えられ

麥飯の後あやまつて改まり

中宿は義理で勸當二日置き

居膳をきらひ息子は買ひぐひし

いたゞいてさすは息子の買ひはじめ

馬鹿でいいなどと息子はよんでゐる

とばしりが謠の師匠までかゝり

もてても行く氣ふられても行く氣也

詫言が角田川ぢやともうしやれる

行きたがる外に惡氣のない息子

度々むかれ厚くなるつらの皮

箸置くかおかぬに息子ツイと出る

身代はなくしとくも

郎を房にしたので息子どらがやみ

母の相槌でなまくらものになり

そろ／＼と息子棊にあき鞠にあき

里遊とはおのしかと母文を出し

猪牙船へコリヤア何所へと杖が出る

どらに成るまへアノ娘此のむすめ

假名でした人別帳を息子持ち

然るに息子代を取つて二三年

むごい事息子は内で座敷持

引事に餘所の息子をやたら譽め

叱られる度に息子の年が知れ

出をるなといへば跡から出やるなよ

耳は馬つらは蛙で母こまり

四季折々の戯れに母こまり

爪の火を息子夜なくけしに行き

子を捨てる藪へ息子は金をすて

誠や子を見る事世間に如かず

女房にすると榮花の夢はさめ

息子の願なにとぞ鎌を御さづけ

親父へは手を替へ母へ品をかへ

ためたがる遣ひたがるで不斷もめ

意見する傍からあいとマアいひな

昨日青樓今日座敷牢

折檻にマアくくとふたになり

お袋は外に寐をれと戸を明ける

通言は親仁の耳に逆ふなり

もうあきて又一ト夜留守二タ夜留守

座敷牢母も手錠のものはある

勘當は蛙に水のかけ納め

得がたき金去りがたき嫁をとり

壻に行く事を茶屋からそにんする

是れではどうも是れではと壻おもひ

物もちのわるさ今度は三人目

おん身心すなほゆる持参呼び

去狀を書くと入壻おん出され

やすい事泣聲で知る兩どなり

子が出来て川の字なりに寝る夫婦

片乳房にぎるが慾の出来はじめ

母の乳をなぐさみにのむ果報もの

乳母喰への煎餅ねから味くなし

我がはらがへると子守は歸るなり

去つた晩餅や砂糖で夜を明し

子の月代にしやべる人が二三人

竹馬の駄賃針箱から拂ひ

乳母の灸傍に泣人が付いて居る

風の子といふは女護の子どもなり

小便を申し送りに子をわたし

申し子の後申さぬ子

八ツの耳ふりたて歸る手習子

天神へ素貌でまるる手習子

家督公事下女が腹からひよいと出る

仕さへせにやいのに留と名を付る

元服は意見をそへて譽めるなり

わんの中からまゝ母の貌を見る

迷子はおのが太鼓で尋ねられ

迷子の札悪筆ではんじもの

は、きぎの撫子と見えて見えかくれ

泣くよりもあはれ捨子の笑ひ顔

眞黒になつてはたらく白鼠

番頭も外ではおもしろい男

酒のちり筆で番頭ちよいとはね

晝のかほ番頭色師とは見せず

帳尻に手代は化けの尾も見せず

朝がへり番頭烏雀を内で聞き

獨身

目を覺し丁稚もぐさを拂ひ退け
 藥代に二ツひつばぐ他人宿
 時に判禮一分引く他人宿
 ひとりもの店ちん程は内に居ず
 ほころびと子を取りかへる獨り者
 かな槌で度々明けるひとりもの
 寐所をへし折つて置くひとり者
 一人ものヤレ茶をくんろ火をくんろ
 香のものへし折つて喰ふ獨り者
 たまさかに煙をたつる獨り者
 不所存な倅に困るひとりもの
 掛り人息子に拳を指南する
 向うから硯を遣ふ掛り人
 夜や寒き衣やうすき居候

居候

母

おもふ事叶へて二人居候
 口がるく尻のおもたい居候
 掛り人寐言にいふがほんの事
 居候女房のくせをよく覚え
 あの戸棚内やゆかしき居候
 腹のうち遠吼をする居候
 居候はらはりたやと御看經
 世を捨てて身はなき者の居候
 喰ふもうし喰はぬもつらし居候
 湯でもよし飯でもよしとかゝり人
 すみだ川今でも母に苦をかける
 棒ほどな事針ほどに母かばひ
 二十二三の子の尻も母ぬぐひ
 鳴子引く氣持で母は咳をする

母親は息子の謔をたしてやる

印判の帛紗で母は目を拭ひ

兄の尻妹の腹を母ぬぐひ

母の名は親仁の腕にしなびこみ

芝居へやりやしたと母矢とりなり

糠袋二番出しにて母あらひ

外面は養母内心は女房なり

かへる母壻へ一口愷氣する

知り切つて居るとお母理をきかす

衣類までまめで居るかと母の文

奥様は藥罐とあひる供につれ

おくさまは正風體の御むつごと

よつ程なきけん女房の謠なり

おてらでは福神在家山の神

妻

琴やめて薪の大きくべ引き給ふ
 女房の苦は花が咲き月がさし
 どつからか出して女房は帯を買ひ
 添乳して棚に鯛がござりやす
 こびついて居ると女房は機嫌なり
 密夫をせぬを女房は恩にかけ
 何か出すさうでお内儀ふいと立ち
 女房は風月の友をわるくいひ
 のきなさい附木ばかりくべなさる
 行かんゆきなさいと女房よわく出る
 きよろ／＼と男はすれど内儀せず
 だましてもいけんと亭主外でいひ
 毒だちに鼻の先のはいひにくし
 申し子は神と間夫するこゝろ

ある格な諺では女房もう喰はず
 アノ義理の此義理のとて出られやす
 お内儀が立つと鉄の落ちる音
 買ひにやる子へ絹絲を五六寸
 能い日和内儀戸板をばたつかせ
 彼はもと乳母のするくべつたりサ
 傾城は空言女房は小言なり
 女房は旦那を申しと付けておく
 三筋捨て只一すぢに世帯じみ
 女房のくすねは姉の片おもて
 奥さまの方にはいらぬ筆のさや
 夜や更けやせうのと口をむしるなり
 戸板をば布きせにする好い天氣
 灸を無になされますかと衿を折り

喰ひ懸けてとゝをが汁を嘔アもり
 指ぬきを醫者が歸ると捜すなり
 目づかひで内儀四相をさとするなり
 ねんねこの腰は左右へ少しふり
 里のない女房は井戸でこはがらせ
 女房が團十郎で亭主ぐにや
 夫といふはたゞ一人間夫やたら
 女房の目のいそがしい下女を置き
 風ふけば女房いつかう油断せず
 なぜ急にいるえと女房縫はぬなり
 臺所の普請奉行は女房なり
 精進をするが後づれ喰はぬなり
 くら闇のゆかた後づれぞつとする
 後ぞへは支度も里もないをいれ

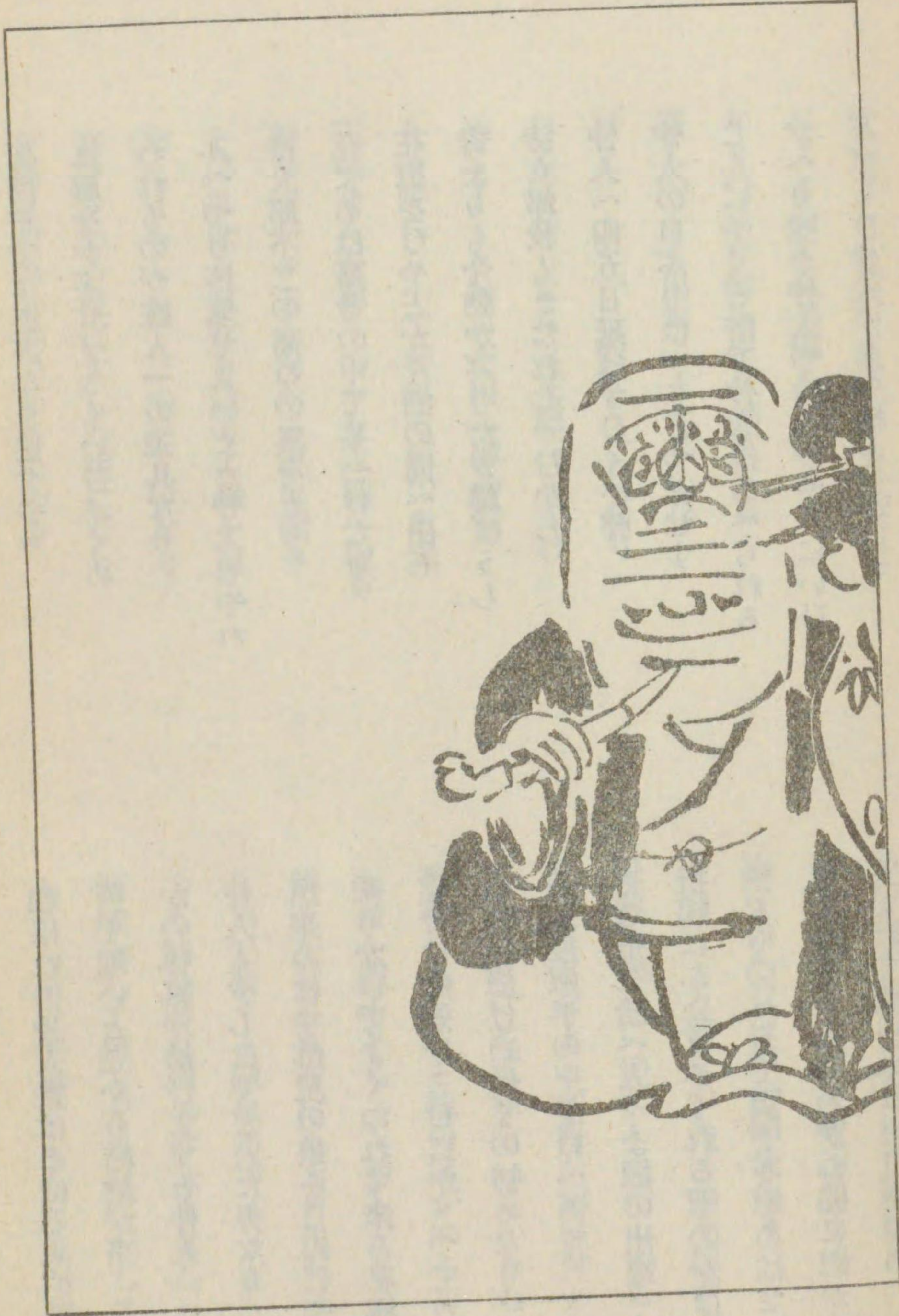
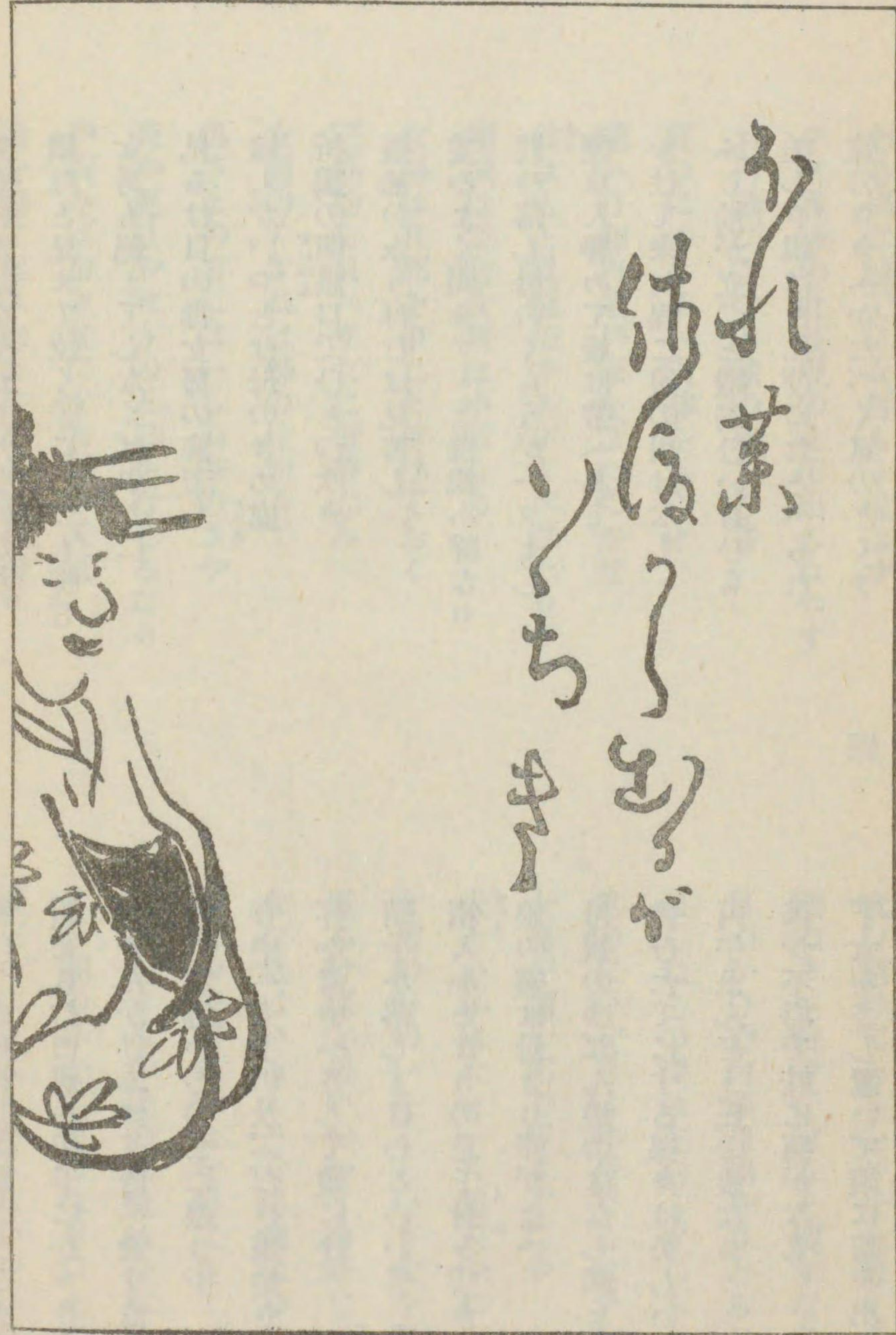
娘

先妻に世話をやかした今のなり
 繼母と見えて泣く子にいつも勝ち
 女房も絶えてしなくば中々に
 見るは目の毒女房の寐姿
 嫁入がいやとは母のきめ處
 折鶴の開眼口でひとつ吹き
 振袖の永う拜むは見苦しい
 爰をよく聞きア、と母親小聲なり
 問ひ落し母のくらうが一ツまし
 煙草入響めて娘は帯へあて
 かけて來た程に娘の用はなし
 ふり袖が立つと蠟燭ひいらひら
 美しさ親はとんびにたとへられ
 妹のさきへかたづく氣のどくサ

娘

親につめられては娘よろこばず
 婿えらむ内雜兵の手にかゝり
 姉さんがけふは芝居へ灸するゑに
 教外別傳いつのまに娘コレ
 脊中へも手の及ぶだけ娘塗り
 杯を真中へさして娘にけ
 硝子を落してはわるいい男
 箱入をとりの息子封を切り
 娘の癩は針より棒がよい
 母親のゆだん娘のはなし飼ヒ
 言ひたてにする裸身は美しい
 丙午ゑんどう氏の娘なり
 姉が不埒で妹に藝がなし
 下女をさし置いて娘に茶を出させ

ふれ菜
はなは
ちか



何所ぞではあぶなき娘夕やり
丸綿をかぶせくもいひふくめ
われものが嫁入一の道具なり
ふつつり愷氣せまいぞと仲人しやれ
待女郎不二の高ねの雪をとり
花よめは嘉香の中で茶づけなり
花姫をひよとかん酒の間へ出し
宵よりも今朝かぶりたき綿ばうし
待女郎我もまたれし一むかし
仲人へ四五日延ばすひくい聲
仲人の口ぶりはマアどつとせず
こんやくと酔で仲人はあへられる
かへり咲き仲人つほみのやうにいひ
耳だらひ仲人が来て橋をかけ

相ほれの仲人實はまはしもの
丙午遠いところから結納が來
かの後家が妨けますと仲人いひ
仲人も少しはくどいた男なり
出來ぬはず酔屋の娘をこんにやくや
乗りかけてよくぬれて來る在郷姫
當分は姫逃げこむにかゝつてる
數珠袋姫けいはくの初めなり
笑ふ度姫手の甲を口へあて
そこ退き給へ人々よ姫の出端
折鶴にふいとふくれる姫のかほ
袖なりのへらで調子を姫あはせ
見しやそれともわかぬ間に姫かくれ
望まれて姫一本はめ二本はめ

かんきんが濟むと居すまひ嫁直す
だアまつて百萬遍を姫はくり
なりつたけ姫小便を細くする
盗人の子も出來ようと姑いひ
口上にしたがひ姫はうごくなり
ひくばかりならと花姫三をかけ
やうくくと袖口を出る姫の脈
入ル時になつて尋ねる姫の數珠
三味せんを姫うつかりと膝へ取り
鼻をばかきましたかと姫は聞き
その事はそれなりけりに縁を組み
來た月を入れてはつく位なり
客分をやめねばならぬ腹になり
金屏風姫の自筆でかりにやり

子の物が親のでないは姫許り
法事客姫の素貌を初に見る
梅干の小言は姫の頭痛なり
くつくと瞽女のあばたを姫かぞへ
母姫へ物日にゆだんさつしやるな
見なさるなよと何帳か姫は付ケ
さなきだに花姫寐ごいさかりなり
腹帯をしめると親の氣がゆるみ
正月を姫もそろく悲しがり
辨天が布袋にかはるお目出たサ
片眉毛落すと姫は手でふさぎ
去る時は唇に何の沙汰もなし
傾城化して姫となるむづかしさ
ありんすで姫來なんした里が知れ

持參金封を切られて安堵する
 持參金うにこおるまでのんだつら
 持參金ならば手がらに去ッてみなり
 持參金何より貌の荷がおもし
 持參金ぞつとするほどこはい貌
 持參金右同斷の下女をつれ
 女でこそあれと婿はつつこまれ
 冥加錢出して婿女をそしるなり
 數珠さら／＼と押しもんで小言なり
 御談義も聞きたし婿もいぢりたし
 談義場で婿の仕うちを交易し
 しうとば、數珠を早めて小言なり
 口に唱名眼には婿をねめ
 齒はないが婿をばひどくかみつくる

後家

世間の婿は手利きだの柔和だの
 亭と姑と一口交ぜにひねつてる
 まつさうはせまいと姑蘇り
 いい姑ほんのいびきをかいて居ル
 家督公事じんきよさせたが相手なり
 後家の質男物から置きはじめ
 かたい後家男を立ててやらぬなり
 いいのさと後家親類に不和になり
 憎い事けつく便りの多い後家
 若後家は佛の兄をうるさがり
 若後家は不承々に子に迷ひ
 殿の火と共に高ぶる妾のつら
 御隠居の提灯入れは十八九
 お妾の睦言くれろ／＼なり

姑

妾

圍ひ者どか喰ひしたりかつゑたり
 泣き妾かゝへて計り事にあひ
 お妾は晝ふね漕いで夜乗せる
 お妾の歌書は枝折に撥を入れ
 圍ひ女は普天の下にそつとすみ
 仕合な蓼い蟲がやたらつき
 圍ひ女は返す／＼に米の事
 妾の尻馬に扱上手なり
 功成り名遂げ身しりぞき圍はれる
 煙管にてとゞかぬと妾人を呼び
 汝元來枯木のごとし妾が咎
 内ぞゆかしき駕わきのうつくしき
 山出しの下女は眞綿とつかみ合ひ
 花齧下女鼻息で吹きちらし

乳母

喰ひかけて下女は返事をして貰ひ
 叱られて下女膳だての賑やかさ
 鯁ふところに入ると見て下女孕み
 婿を見に茶だい争ふ下女はした
 連れて來た下女許り婿叱るなり
 下女がつらく／＼見れば鼻もあり
 吉日が爰にも居るところぐられ
 せきこんで下女口上を咽へつめ
 圍はれの下女運づくぢやいけぬなり
 聲自慢下女引白の引きがたり
 目をこすり／＼眞木屋に下女小言
 乳母が宿きけば下谷の廣小路
 おんばのはよつ程幅のひろい音
 目見え乳母大肌ぬいで兩手つき

婢女

下女

乳母の名は請狀の時よむ許り

女護の鳥總開帳は南風

天草を喰ひちらしたは女馬なり

變生男子女だに土左衛門

針妙

針妙のながしへかゝる人少な

遊女

吉原のはりは江戸往來にもれ

物さしで針妙肩をニツ三ツ

神子

ねれかけん神のごとしと神樂堂

いな所へ當つて笑ふ神樂堂

神子を見てふとしく立つる宮柱

目に張つた鈴で賑ふ神樂堂

どつとせぬ神子で神さび渡るなり

雑女

一子女出世して九族浮むなり

近くの他人湯を沸かし腰を抱き

サア退きなさいと鑛漿あたゝめる

やゝしばし有りておはぐろ返事する

結ふ内はたらひのふちに糠ぶくろ

奥州は赤はらたれぬ女郎なり

丸山の傾城舟をかたむける

いそがしい女郎起きてる隙はなし

傾城のきつと坐るは下卑たなり

糸を切る鋏は女郎いらぬなり

傾城は一ト綱打つてすわるなり

千金の紅葉を伊達なすんど切り

惚れた真似上手にするで流行るなり

客帳はけだし女郎の祕書にして

いたづらを重しにかけて身を沉メ

賣れのこりけに十目の見る所

お朝寐のおつぎ高尾が噂なり

紅葉の方といふべきにをしい事

私がほんのとゝさんは粘をうる

夫ゆるに金となりたるをんな

のたくつた蚯蚓を餌サに客を釣り

立膝で文を書くのも姿なり

ゆびを切るは實苦肉の計り事

きぬぐの跡は身になる一ト寐入り

むごい事娘をよしの原へ捨て

傾城の涙は客のよだれなり

城でさへいはんや藏においてをや

送るはずそこが狼女郎なり

四五回目ときに女房の再吟味

あどけないやうで無心に抜目なし

三會目もつとこつちへよりナなり

契情も慾氣を去れば我が心

たゞくさなやうでもたゞは轉ばない

町風がなどとお針に見てもらひ

釣針のやうなもので客を釣ル

其の客が来て三尋ほど反故になり

起請とは裸にせうといふ事か

晝店の持ちあそびになるお針の子

大願成就晩ほど御目もじ

丸山の口舌こはげがおつばづれ

婚禮を女郎賀したりきよくつたり

新造

新造の船は屏風が浦で漕ぎ

新造の癩とはこいつふといやつ

新造はおへねえお客許りとり

新造のなじみ實盛仕立なり

喰べんせんなどと新造夜ふかしな

新造は知ツたが一ツ寐て一ツ

よし原はふり袖に目のつかぬ所

新造はふる氣ではなし寐る氣なり

名代は禿に少し毛がはえる

庖瘡する禿やり手を寄せ付けず

縮緬はとらまへいと禿いひ

心中が化けると禿おどされる

裏町で藝子重荷をおろすなり

取ることは第一遣手とはいかゞ

辻君

船が下直で帆柱に疵がつき

たかの名にお花おちよはきつい事

幽霊も手持不沙汰な枯柳

幽霊は皆俗名で顯はれる

幽霊の生酔千鳥あたまなり

幽霊になれば平家も白いなり

幽霊

禿

藝子

遣手

生類部

鳳凰

桐のない鳳凰天々舞つてゐる

鶴

放生會つるより鳩にすればいい

鶏

鶴が岡叔大鳥な放生會

蜻蛉

驚かぬ鶏は羣集の中を行く

雀

長話とんほのとまる槍の先

天狗

蒙求を鳥さし笛で吹いて呼び

雷

はなし鳥腰のぬけたははふりあけ

天狗

髪置にときんを著せる天狗の子

雷

男より引きさきよいと天狗いひ

雷

天狗の卑下は愚貧事などといひ

雷

念力と法力を見る紫宸殿

雷

玉體危したゞ今と敕使

雷

菅原々々と時平うろたへる

雷

時平がたこくうむてんにびくくし

鬼

綱が伯母いもじは例のとらの皮

破風の外黒雲ちつと待つて居る

作り聲などで茨木頼みまじよ

茨木も足だとア、は逃けられず

啼く聲の似たとは鶴でないと見え

夜といふ扁に鳥だと笏で書き

翌の朝もう鶴の繪圖く

妖怪の中でも鶴は細工すき

小金から大金になる馬が出る

土佐駒に坂東聲はのらぬなり

名乗るうち馬はしばらく息をつぎ

宿なしの火燧おこるとくらひ付き

眞白な犬合羽屋でゑどられる

吠えるぞと檢校藏を見せにやり

犬

馬

鶴

狼

狼は財布許りを喰ひのこし

猪

ののし、は起きると歌に讀めぬなり

猪の牙にどらや太鼓を引つかかれ

一疋の猪に二反の四郎乗る

し、がりの洒落はしめこの兔なり

狐

狐つき落ちるともとの無筆なり

化されて徳をしたのは保名なり

葛の葉は折々に焚く小豆めし

叔味もかはらぬものと保名いひ

泰成は見だし保名は化される

幽王のした跡をする鳥羽ノ院

人間の官女がみんなそねむなり

女能は石泰成は尻をわる

狐の嫁入ちう王の牀へ来る

狸

二間四方のきん玉を狸もち

狸と猫は化物の藝者なり

御隠居に化けても時に目が替り

危やな主どりをする黒イ猫

猫の目を時計につかふ村師匠

鼠一疋伏勢が五六人

榊わなをいひ付けて出る狐つり

頼豪の外は供物をかじるなり

遣唐使すでに笏にて拂ふ所

吉備よくもすらくくくと讀み終り

猫

鼠

蜘蛛

鯨

逃げながら高慢をいふ一のもり

蟹をのめ鯨はないか鯨ヤイ

龍宮のいかりゆで鮪など用る

酔ひざめにかつばは皿の水をのみ

手紙には狸臺には鯉をのせ

松前の家根板を著る源五郎

錐よ金槌よと素人のうなき

持遊びに四五疋残すどちやう汁

赤旗の怨靈海を横に這ひ

旗色を湯出てあらはす平家蟹

平家のをんりやう漆かぶれに妙

蝨
化物

橋をかけ舟にも蜘蛛は乗つて見る

頼光へ出たはさゝがに所でなし

ふんどしをくりかへしよむ南窓

百嘶するうち化物は待つてゐる

口近い化物は先づ一ッ消し

こはい嘶はかすかに灯が見える

九十筋跡から變化身ごしらへ

正丑の時參會とばけ仲間

寝ころんで立聞きをするろくろ首

ぶんぶくは人を茶にした變化なり

なぐさみの蠶は違ひ棚に這ひ

善人の来るまで宙を龜およぎ

放し龜もとは鶴から思ひ付き

鮫でさへ親がなければ安くされ

蠶
龜

鮫

滑稽發句類題集下卷

天地部

天象

富士つくば虹天秤に引つかける

雪や氷とへだつれどおなじ孝

嵐

寢所をはしごの通る大あらし

御不勝手あらしのあした幕が出る

風

風に笠とられぬやうに口を明キ

雨

はれまを待つは古歌を知る雨舎り

松はぬらさず山吹はずぬらし

吹降りにチャルメロになるけちな傘

雨やどり他生の縁へこしをかけ

にはか雨つらおし拭ひく

山

富士山の文字は御代にも能く叶ひ

齒ぎしりをしいく歩行く安足駄

傘どこか貴さまはのくく

飛石の白の目を切るひどい雨

ちかづきの方へかけ出す俄雨

雨やどりごおんとついて叱られる

評判の俵としやれる俄雨

雨もりの穴を女房につつ突かせ

傘を明けてすほめてかしてやり

二人めは女房の傘をかしてやる

イヤ是れからも御無沙汰と傘をかし

きついふり傘さして雨やどり

傘を半分かしてまはりみち

からかさばさし懸つての無心なり

不二

高い事五十四五里と通辭いひ

近江から駿河へ嫁入る綿ばうし

不二の歌角力で風になびきかね

摺鉢をふせたやうなに琵琶が出来

ふじを見ぬ奴が作りし實語教

ヤレおきろ山が出来たと騒ぐなり

孝靈の夜なべ大きな仕事なり

あつばれな山九合にはいいはかり

夢の番付孝靈の後に出来

三島女郎三國一の化粧水

孝靈の御代から夢に當てが出来

あの山に不老不死あり穴賢

山ほどな諺をついたは徐福なり

田と谷の間へ流れる不二の雪

芳野山

切株の上へよし野の紫宸殿

高野山

犬骨を折つて高野の靈地なり

毒水を飲む氣遣ひは女なし

女人堂佛のやまへ入りながら

重氏は菩提の爲に味噌を摺り

此の水を飲むなといふが玉に疵

洗濯で留守かと思ふ四天王

頼光は一トきれやつと鵜呑みにし

手や足でしひられて居る四天王

大騒ぎ一山猫よ榊わなよ

瀧のうらまで隠れない御山なり

會者定離きぬくは山の鐘

通用のよい御寺號を御建立

顔へあなあけて楊枝を十本買ひ

叡山

日光山

上野

浅草

手前マア内は何所だと楊枝店

武藏野

ひろい野を爰までござれ水は逃げ

業平を追ふのに水も逃けるなり

名の高い原を瓦でおつぶせる

逃水を追ひつまくつて家を建て

逃水も白水となる繁昌サ

天然自然武の藏へ武を納め

鶴岡

鶴は千葉短冊金子奉行なり

嵯峨野

さがしましたと仲國馬を下り

琴をしらべぬとなか／＼知れぬ所

六波羅の佛で嵯峨に尼が出来

佛在世妓王と妓女は尼になり

宇治

我が宿はかりほの庵の八軒目

茶と鹿で喜撰度々寐そびれる

三保浦

橋板は平等院へかつぎ込み

高砂浦

伯良は既に女房にする處

住吉浦

高砂は今もついでに行く所

志渡浦

神と儒者のゑ問答に通辭なし

鎌をふり立てヤレたぐれ／＼

玉取は波を霞ににけるなり

湖

よい隠し所に海士は氣が付かず

ぬけがらも三國一の水溜り

夜の雨琴の雫が琵琶へ落ち

唐崎でぬれた傘勢田で干し

石山と志賀は一ト夜の裏表

禪をするが湯治のいとま乞ひ

釣鐘も蘇鐵も故郷戀しがり

紫宸殿よく化物の出る所

奈良

墨にくれ晒さらしに明けるならの町

うるたへた旅人耳塚奈良で聞く

むや／＼の關守髭をはやして

法華經へ鮎の子をひるいさは川

なめり川一文一家やとはれる

あれなるは鴛うづで候と渡守

呑口があるに義興氣が付かず

身を捨てる藪へ光秀うかと行き

けつ若衆めがと辨慶身拵へ

鐵砲のせんくづ貫ふ妙國寺

疊屋紙屋寢て居て物語り

近江から伏せりませうと美濃へいひ

美濃屋と近江屋縁組は相應じ

前後十二年風景所ざとでなし

江戸

京の町たひらな所で上り下り

出家侍かみなりと鶴に召し

金銀の寺王さまの近所なり

日本橋何里々々の名付親

面白い筈二ヶの津が寄つて居る

駒下駄で越すはお庭の箱根山

謠よりは八町多い江戸の町

徒然なるまゝに日暮ひぐらしへぶらり

有りさうで江戸には見えぬ紫野

繁昌サ諸國と寢物がたりなり

名の高イ傘一ヶ寺に坊主持ち

軒に傘あれどもひらく寺でなし

蘭丸をいつちをしがる本能寺

河敷に五ツよけいの橋をかけ

知恩院

本能寺

三河

前九年年賦のやうに首を取り

前九年引張り合つて一首よみ

衣川敵と味方で一首出来

一の谷六の方から坂おとし

新都では海ばつかりを諸卿譽め

景清はしり餅四郎つんのめり

義經の弓はあらめへ引つかゝり

檀の浦その尾に付いてどんぶりこ

鐵漿は付けて居られぬ檀の浦

鍋釜のふた南北で叩き合ひ

楠は鼻をつまんで下知をなし

勝頼は茶椀今川桶で死に

蒸籠ははたき小鍋は大當り

降参が濟むと一度にひだるがり

異國

ねぢ首の實檢臺をころけ落ち

小人島初著に鶴のもやうなし

小人島我が子をおもふ晝の鶴

小人島いつも盆唄諷ふなり

お互に用心をする手長島

靈鷲山どう行きますと徳兵衛

龍宮は釣師をとめて壻に取り

かく鼻は眉をひそめて言上し

不案内旅であふぎを一本かひ

豆腐よしもうこゝらからすゝどかる

追剥にあうたも記す旅日記

もう一里行くのだ放せとまらんせ

夫婦旅晝は道つれ夜は情

持つ程のものに字を書く抜け参り

旅馴れたふりで雪隠さきに聞き

草臥れたやつが見つける一里塚

名物を喰ふが無筆の道中記

膳立を笠でかぞへる御師の宿

野雪隠地藏しばらく刀番

知る人の顎を見付ける三度笠

馬駕の駄賃であふぐ旅扇

とこやみの夜だとしやれてる木賃宿

はたご代直切つた貌を汁で見せ

旅日記よる乗つたのも晝へ付け

霜よけに人をのせてく問屋駕

投入の干からびて居る間の宿

抜けまるり笠をばかぶる物にせず

鶴翼にそなへ宿繼ぎ待つて居る

ぬらされた雲を峠で踏みめし

瓜喰うた所に忘れるつか袋

どつからか吐りての出る田舎道

こまいぬにかぶせて拜む三度笠

櫓のうへで音頭は伊勢路なり

三宿ほど旅人は寐せぬ御大祿

お妾は石のながるゝ川にこり

乗物を戸棚につかふ川づかへ

川留にむけんのかねへ誘はれる

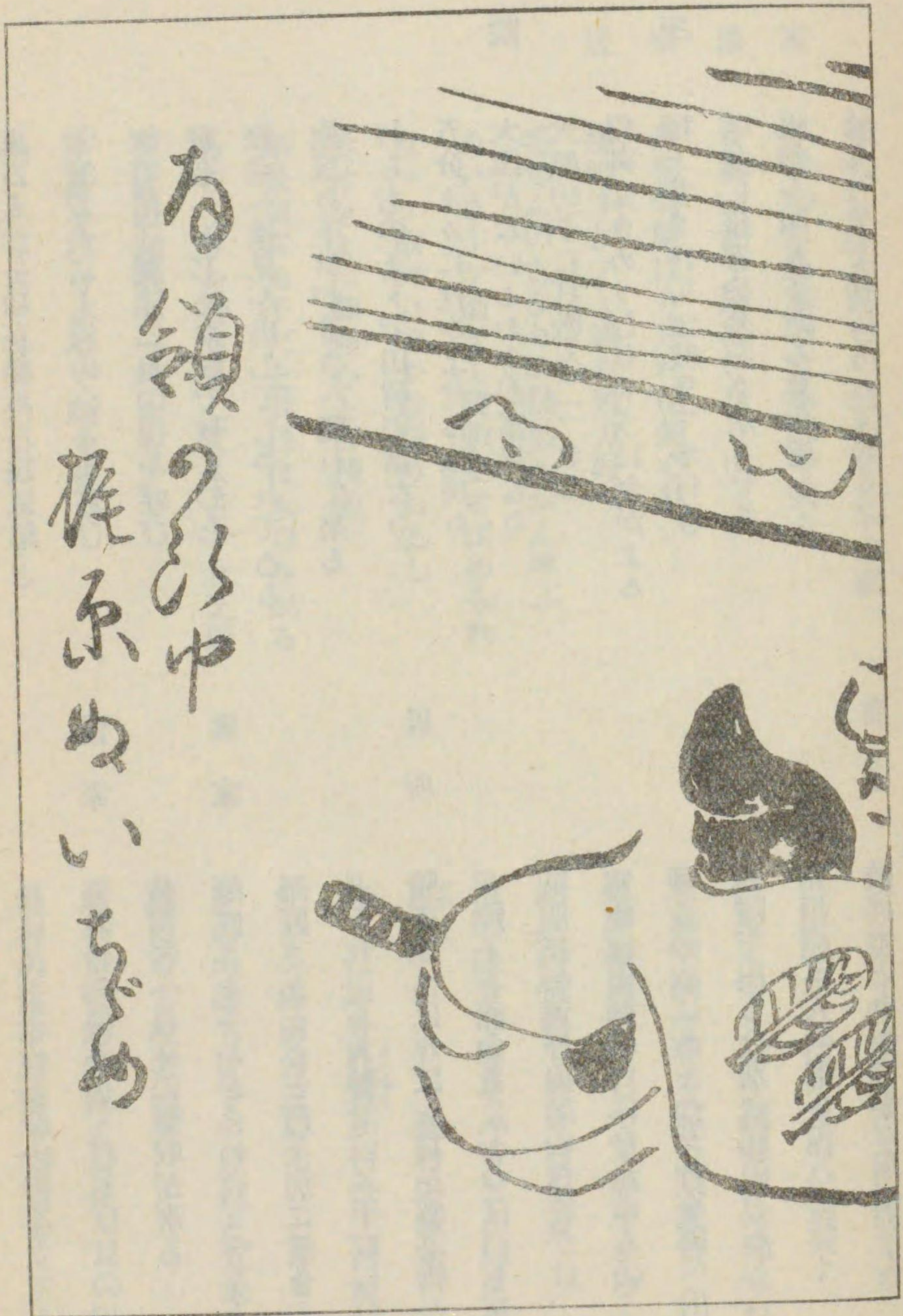
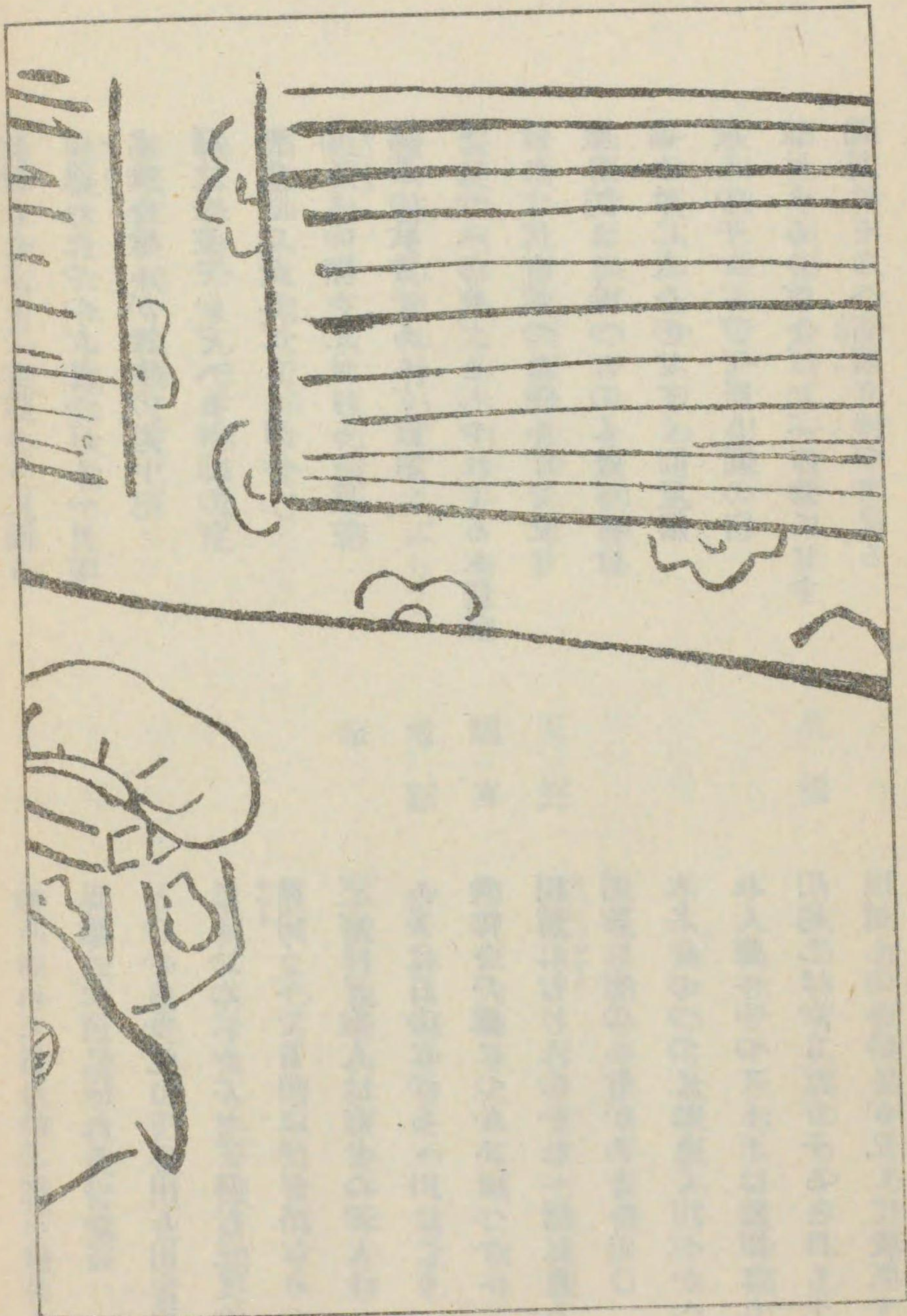
川留に宿の小僧があとを追ひ

大名をおつつくねとく川づかへ

れん臺へのつても下は地獄なり

川越しはからだか干ると口も干る

川越しのへのこが見えて安氣する



為領の
 中
 振原ぬい
 ちどめ

來る人が日和を譽める旅見舞

菅笠で犬にも旅のいとま乞ひ

旅の留守魔除に里の母を呼び

旅迎へまじめな貌で扱まつた

旅迎へ遠見を出してしやれてゐる

旅戻り子供がさきへ觸れて來る

わらぢのまゝで川留の話なり

五分々に枕をよせる旅戻り

大黒がないとお寺が富貴なり

大黒の子に打敷をニツキせ

假御堂きめうむりやうに金がよる

桶と花さけて定紋見て歩行き

若黨に役者の墓をさがさせる

近道を四五丁送る草の庵

捨てた氣で捨てられて居る草の庵

醫家

月に又ござれと柴の戸を立てる

醫者の門ほと／＼打ちは只の用

藪醫者へ自身に藥取が來る

師匠さま子をかきわけて客を上ゲ

師匠さまもひと已上別に置き

どうれいを大勢でいふ手ならひ子

障子さへはれば女房を呼ぶ物か

戸障子を酒の肴におつばづし

吳服屋の通ひ山師の内につけ

穴藏は山師の内につかぬもの

御ものみにあまつた首を擱へ出し

雪隠で出る分別は屁のごとし

井戸端へ人の噂を汲みに行く

駿河町とりあけ婆ア用はなし

書家

居所

商家

古家

手代にも正札付の吳服店

錢湯

年寄つた長家四五本杖を突き

舟宿

女湯は潮干鄰はいなり山

芝居

舟宿の腰ばり見れば無心狀

堺町すか／＼通る角力好キ

毛せんのとりの棧敷みかん呼ぶ

あいさうが過ぎて棧敷をせばめられ

首一ツ取次いでやる切りおとし

番付をまた御無心と百棧敷

不景氣なお子だと乳母は木戸を出る

おざうりを持ちましてもと下女芝居

芝居の迎ひもう行かう／＼

土産をば身ぶりで嘸す長局

母ひとり古イ役者のひいきする

三の切りの趣向仲光がはじめ

近松ばかりは作者の一本木

へんてつもなく幕引は見知られる

荒海や闇を著て寐る樂屋番

樂屋番岩をむしつて鼻をかみ

助六の飛色で濟ム村芝居

木のほりて雪をふらせる村芝居

座頭へおこし一盆村の後家

知ツたふり杜若が内は三河町

江戸の馬田舎芝居で人となり

芝居の馬ちひさいけれど二本あり

馬になる役者は男二正なり

馬の足當時師匠に居候

役者の法事石橋や道成寺

入りのある内は敵を討ちもらし
 大當り一ト坪程で所作をする
 やつばらを片付けに出る國家老
 ばつとした物聞夫と芝居なり
 能きにはからへで頼朝役は濟み
 道成寺うろこが肌のぬぎ仕舞
 公家悪は一段高く無理をいふ
 生きかはり死にかはり出る下手役者
 雨降りに許り助六出たと見え
 幽靈も消えかねて居る譽め詞
 芝居の雪は犬よりもひつじ好き
 しばらくの聲なかりせば非業の死
 赤鯛はくはせ鮫は知ツてくひ
 芝居ではしのんで行くにかつた〜

色里

らふそくを二挺にとめるいい役者
 樂屋には敵も味方も入りみだれ
 火鉢から出る幽靈はおもしろい
 手の平を握つてにらむ荒事師
 やみ仕合ひ冬も蛙が啼いて居る
 井戸の中から面白いどろほ出る
 八兩の外はよまらずに拾ひこみ
 あんどどうも戸ざさぬ國は面白い
 ありし昔にかはらぬは里の諺
 どなるはず雷門をぬけて行キ
 再會を期して大門から別れ
 首尾の松あれば不首尾の柳あり
 桶伏のありて家内は洗足し
 棒のない提灯で行く面白サ

土手で逢ひ何所へ〜と手を廣げ
 四ツ手駕草臥れて乗る物でなし
 四本さしたのは四ツ手の直をきめる
 功能は鬱症を治す三ツぶとん
 外にない進物夜具へのしを付ヶ
 けちな晩翠帳紅閨に一人
 金銀を取られた跡の歩あしらひ
 寢て花をやるといふ故事三會目
 義理に禪をはづすは三會目
 月明らかにして客星稀なり
 まよかはよは居續けの合言葉
 裏がへして中ぬりは逃けるなり
 傾城といふ字がすぐに意見なり
 大一座お針も返事すけてやり

大一座どれが俺のやら人のやら
 面白サたいこを集メはやし立て
 薄柿や空色で来て初會切り
 然るに紀文内では糠味噌汁
 坊主客あだやおろかの銀でなし
 出家にてまうけ醫者にて遣ひ捨て
 總仕舞やがて内へも札をはり
 しさつて考ふればふられたがまし
 ふられるも且は其の身のお爲なり
 あすありと思ふはけちな女郎買
 銀煙管ふられて疵を付けはじめ
 番頭は子に行き寅にかへるなり
 朝ねのぐるり紙屑や切れた三
 鼻紙でやればそれ程をしくない

どらを打ちぬいて今はた太鼓持
化された方から先へ尾をみせる

おれが女郎はおめへかと大生酔
門口といひくしやべる太鼓持

文使引きさくまでを見て歸り
文使息子をはすに招き出し

忍ずりめして傾城にみだれそめ
守をば衣桁へかける二才客

中宿で先づ初手のから封を切り
中宿で男封じに書き直し

品川に居るにかけせん三日する
品川の衣桁股引などもかけ

いふ事がなさに初會は海を譽め
つれの文明けて見たくてならぬ物

五尺ほどある書出しへ一分やり

遊藝部

遊藝 たらちねはかかれとてしも仕こむ藝

歌道 歌の大關難波津淺香山

續松 百人一首二ツに割つておなぐさみ

歌がるた人づてならで下女とれず
ふり袖でたびく上の句を崩し

歌がるたちよきく切つて吐られる
鞠場から立派ななりでひだるがり

亂拍子きこえぬ程のつよいふり
釣鐘は無銘面ンには名があり

ワキの僧たばこ盆でも欲しく見え

袖口と扇をもつて急ぎ候

諺

をかしくもないは諺の下モがり
うたひ本うなつて見てはるどるなり

高砂をやんやと譽めて吐られる

不器用に持つまな箸は馳走なり

かれ切つた手で生花はいきてゐる

雙六 二ぞろをさゝ浪といふ人のよさ

氣の毒サ某筈から骰子が一ツ出る

圍碁 お呼びだしまでは碁盤で境論

宗桂にまけた噺も手がらなり

物申にどうれくと二目打ち

將碁 飛車角行が蟄居してゐる下手將碁

詰んでるに肺肝くだく下手將碁

王よりも飛車の逃げたい下手將碁

明日でも剃つてくれろと飛車がなり

手を聞くと金銀山の如くなり

見物の下知に従ふ下手將碁

ふきからを飛車で押へる立關番

吹けば飛ぶやうな將碁に附木の歩

將碁をば二番まけては金を借り

中將碁御後の出ぬばかりなり

大名の手せんじ利休させはじめ

夜講へ張飛びいきはほかむり

拳の聲鄰やしきでべら棒め

琵琶の曲下手か上手か知れぬなり

びはの弟子ひとりふえると二人へり

瞽女に手を引かれ八橋わたるなり

八橋のやうに竝べる琴の會

大人遊

溜息を互にかくす廻りぐら

八橋で世を渡ッてる品のよさ
ついて行く母も一段聞きおほえ

雑部

三絃

奥様のしらべを譏るばち當り
縫ひながら口三味線で姉はつけ

書

鄰の三味にたばこ盆叩いてる
アノ舟を寄せて見せうと三を下ゲ

岡崎を子の引くほどは母もひき

岡崎をひくは昨日の調子なり

鼻唄はうぬが勝手にふしを付ケ

そり唄とかく跡へトサを付ケ

有つてくれ南無三の絲たらぬなり

淨瑠璃

杯をさせばうなづくひきかた彈語り
湯で語る太夫は升で水を呑み

聲色

聲色は舌三寸の樂屋なり

ねから讀みませぬと鋺でほじり出し
大學にたらひの印までも書き
唐詩選讀むと孔雀の尾が欲しい
うたゝねの貌へ一冊家根にふき
三鳥の傳御座敷とかんこ鳥
茶と螢宇治拾遺には書き残し
草雙紙買つてみちくけつまづき
孔明をもう二三冊生かしたい
お妾の歌書は二上り三下り
姉さまの助太刀で讀む敵うち

留守番へめしのあり處と水滸傳

よせ本を三の絲にて綴るなり

歌本へとつさまの手で假名を付ケ

御免駕中に細見よんでる

細見を見てこいつだと女房いひ

見臺へ細見よめのわるさなり

源氏物語

いしくをたえて明石へ書きかゝり

石山で出來た書物のやはらかさ

寺だけに式部青もの二把ならべ

がさつなはあふひの上のとねりなり

肝心のうまみは式部かかぬなり

祭の喧嘩まで書いた物がたり

晴嵐をながめ野分を書きかゝり

一帖は螢に光るものがたり

百人一首

一二首は紅葉のてりで選むなり

喰ふ事は先づ第一と定家えり

雷と天狗も交る百人首

百人一首金毘羅様に氣が付かず

眞白な名歌を赤人がよみ

百人に有明たつた四ツなり

味噲をなめく時頼も數獻なり

鼎ませぬ目くらに杯と初手はしやれ

徒然草

曆

かなへの事はつれづれ茶利場なり
 仁和寺へ鑄物師も来る外科もくる
 鼎はぬけてヤレ食よヤレ外科よ
 盗人を大根からい目にあはせ
 大根武者コレ屈強のかうのもの
 二タ股は逃けてはたらく大根武者
 つひに見ぬもの元年のこよみ
 曆見て後生を年に二度願ひ
 書く事もする事もまた鳥で出来
 重寶なものは鳥の目鳥の足
 手の平へ書いて諺字は口でいひ
 讀めぬ字を何といふ字で讀んで置き
 大根たねありは村でのよい手なり
 おとがひで額の筆法はねて譽め

文字

串といふ字を蒲焼と無筆よみ
 同じ字を雨雨雨と雨ともよみ
 つくばつた噺は土へ何か書キ
 よめにくい字を姑と息子よみ
 去狀に無筆は鎌と椀と書き
 惡筆へ待つてくれろはよい書手
 女房の聞くやうによむ似せ手紙
 廻狀を心得たりと棒をかけ
 封じ目を柱で付ける急な用
 清書にちいとちひさい下女が文
 下女が文内儀の下書で國へやり
 師の陰を七尺去ると人形書き
 大不出来清書も顔も赤くなり
 正札を是れはいくらと恥かしい

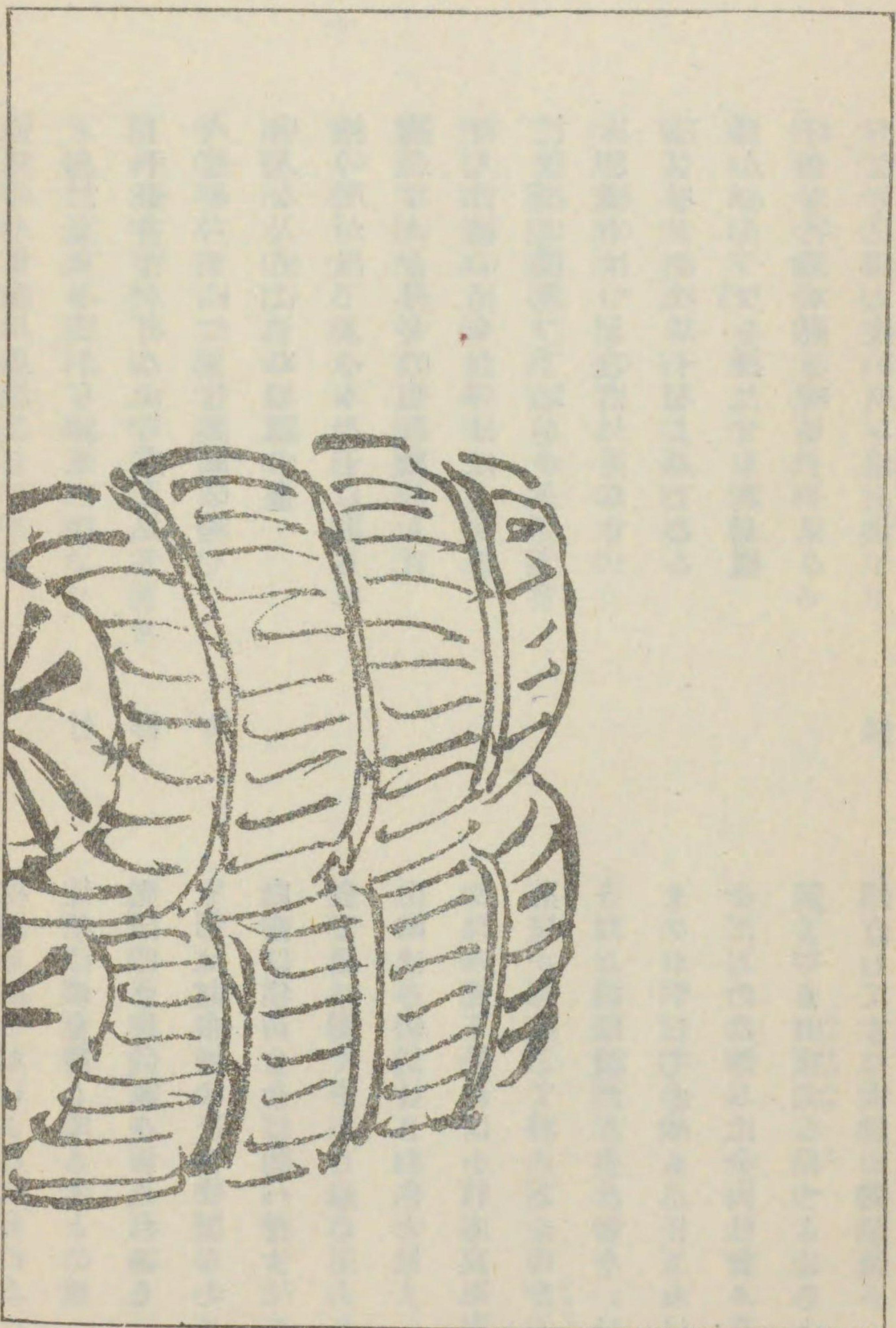
畫

通俗の小便無用鳥居なり
 とんだ案文を傍から無筆いひ
 下手畫書竹が有るから虎と見え
 八景を六ツにたむ屏風の繪
 唐人を入込にせぬ地獄の畫
 繪の所が出てよみ本を子に取られ
 繪がないと男女の知れぬ百人首
 百人首繪の出来たのははるか後
 枕雙紙の間違ひで恥をかき
 具足櫃のはつとの出た男なり
 ひぢをまけ枕草子をよんでるる
 だんびらへ反を打たせる具足櫃
 好きな乳母本屋を呵りく見る
 あたり見廻し畫の所を娘あけ

金 杉 竹

錢

枕繪を高らかによみ叱られる
 竹槍は切り落してももとの槍
 立白に天狗の家を切りたふし
 大判は財布へはひる物でなし
 白銀は猫黄金をば鶴へ付ケ
 金でさへ働くもあり寐るもあり
 山吹はどの道貸さぬ色と見え
 かたみとて見れば小判も哀れなり
 莊屋から煎じて呑めと一歩かし
 うなるのは諺だが金は物をいひ
 サア小判ほしかやらうに下女は逃ゲ
 まだもあるやうに金入仕舞ふなり
 蓑よりも山吹のないつらいこと
 鑄直してまた大佛の御散錢



大黒の籠

二俵

し

劍

四文つゝついでには女房おして見る
古錢買またせて鍵は何所にある
とんだ産かんしやうばくや取揚ける

瓦

挽臼の獨身庭へすゑられる

夜は泣き晝は旅人の邪魔になり

今戸では人間鬼を釜へいれ

國々のみよしは江戸の方へ向キ

屋形から何もかゝらぬ釣をたれ

吸ひ付ける中にながるゝ渡舟

元船で大の男の針仕事

こしもとで濟ますはしはい屋形船

口と手と許り屋根舟さわぐなり

おつと來たなどと三味線舟へ取り

ひらり乗る猪牙は元手の入つたやつ

振舞で行くのは猪牙にかしこまり

君は船臣はかへれと柳ばし

泥のつく物とは見えぬ御所車

目貫
武器

生きたより後藤の馬は直が高し
頼朝の兜拜領してこまり
長刀を受けつながらしつ御不勝手

鐘
石

草摺は五郎鋳は四郎なり
三井寺のかね疵物の天下一
いふ事の早速に出ぬあうむ石

車

御所車義仲いつそあぶながり

錢車相場きかれて汗をふき

駕の衆やこつから聲を掛けずによ

吳國から鳥二ツ來て織りはじめ

待針で手をやたらつく絆けならひ

手に持つて行く許りだと羽織かり

爰をよく見やと母親三はり縫ひ

絲まきの繪の出るころに袖を絆け

味さうに煮えるを見れば木綿なり

かくあらんとぞんじ羽織持參なり

黒小袖世を早うする著物なり

夜著の綿所せきまでひろけたて

取次の出る内ひだの皺延ばし

來年は螢かごだと親仁切り

六尺にきれば氣のあり紅縮緬

縞がらを見て反のまゝ肩へ當て

なぜ急にいるえと女房ぬはぬなり

こはさうな後づれ一ツ縫ひ直し

紅縮緬少しは風も吹かせたし

紅縮緬ひらりくゝと風に和し

下ゲ髪で二步落ちますと質屋いひ

辨當が出来て簞笥をまぜかへし

かたみこそ今ははでなる上著なり

風呂敷のもやうはつひぞ見ない花

八丈のしまがくれ行く御ひつぱく

八月目にながれて女房悔むなり

泣くくもよい方を取るかたみわけ

瀬戸物もわれるまへには聲變り

駕
衣類

茶
椀

屏風

掘出しといふ^{ことわり}理は井戸茶碗
金屏風たゝむと常の店となり
かり物と見たは僻目か金屏風

傘

かりた傘何と聞いたか下女笑ひ
傘といふ字を推量に無筆よみ
半分づゝさすと傘戀になり

毬

まうせんは何所へ敷いても面白い

摺鉢

一朝のいかりすり鉢まつ二ツ
摺鉢がじだんだをふむ厥のり

棒

三尺は火ぶせ六尺は火の廻り
かんざしはかゆい所へすぐにさし
笄をはかりで掛けるしぎとなり

錠

女房の留守に出てるる火打箱
不老不死始皇持參に香氣なり

釣瓶

はねつるべ目のない白をからけ付け
目薬の看板まゆはいかぬ事

薬箱

本腹のくすり鄰の店で呑み
鬼も蛇も酒でとらるゝ尻頭

看板

窓で賣る草鞋天命次第なり

酒

松過ぎにさやなりのするこもかぶり
歌の賃は餅だから詩は酒だらう

履

和漢の出世履をうち履を買ひ

孝行

孝行を水にはなさぬ養老酒
年號は名酒にのこる孝の道

重箱

重箱をむすんで一ツ提けて見る
笠のじぎ互にふちをなでて行く
菅笠の紐があくびをちつとさせ

一樽で二百五十詩を作り

呑む事はのまうが出来ぬ詩一篇

米飯

船の酒體をかためて丁と受け

てうしをば旦那でかへて叱られる

杯を三味線ひつたくつてさし

大あくび棚のおみきを見付けだし

杯は出たがサア跡がない

姑の杯よめの紙でふき

あくる朝女房はくだを巻き戻し

姫の酌ちつとといへばちつとつぎ

酒は絶えやせんがわつちや上戸口

酒やの戸錢で叩くは馴れたやつ

えうてうとたをやかにして茶碗酒

よひ覺めに土瓶の蓋が鼻へ落ち

堂じまは日本ごくの脈所

ひやめしの吟味が濟んで米を出し

新世帯強飯に出来粥に出来

忙しなさほとんど困る子の給仕

知る人に許り子供がする膳

門ド口を足にて叩ク送り膳

待ちかねて子は寐て仕舞ふ送り膳

目を廻しさうな所へおくり膳

麥めしにさいはいらぬと皆くらひ

何をして居たと強飯またつめる

やみあがりしばし信濃の上を行く

親碗へ盛る牡丹餅の鹽からさ

餅をやく勻ひに上戸いとまごひ

小豆は公卿大角豆は勇者なり

豆腐 まゝごとのやうなで賣れる南禪寺
食類 目と鼻はたゞだが口は錢が入り

ぬけ参り人の情をくんで行く
抜け参りあかぎれ癒えて思ひたち

祝蓋下へわたすと建長寺

三神

三神はなぶるとよみし御姿

鶴翼も魚鱗もいまは臺にのせ

衣通姫

すき通るから召したまふ緋の袴

八百屋から賣るとは俗のしらぬ事

住吉

浦で漁父山で木樵と化し玉ふ

そこら中を見合はせひらの蓋を取り

孟宗と叔齊ひらの相手なり

三輪

舟と舟寄せて和漢の詰めひらき

極こんい摺鉢で出すとろゝ汁

手打ちそば下女前垂をかりられる

何もないうで干物を焼く勻ひ

伊勢

金毘羅

神慮にも霜の降る夜は寒くこそ

割符しなさいと一重つぎへ出す

止む事を得ずこのわたをみんなのみ

女房の留守鹽からで飲んで居る

鹿島よりよもやぬけしは伊勢の留守

辨天

むだ事で還俗させる石地藏

神事

土地藏山師仲間へ抱きこまれ

六人の望みで琵琶を御弾じ

まくの紋あてにまごつく祭客

外科を祭の形で呼びに行き

手付にてもう神木とうやまはれ

羅漢

錢箱のあるは羅漢の組がしら

そりたてのかうべにやどる風の神

鈴鹿山外の観音ではいけす

観音は遣ひでのある佛なり

大悲の矢五百本ほどかけ直し

千の矢に五百てつばう鈴鹿山

普賢

地藏

江口の太夫内心はほさつなり

普賢さま一度はひぢりめんを

遊女とはあんまり派手な化身なり

地藏堂涙のたねがあけてある

地蔵堂涙のたねがあけてある

地蔵堂涙のたねがあけてある

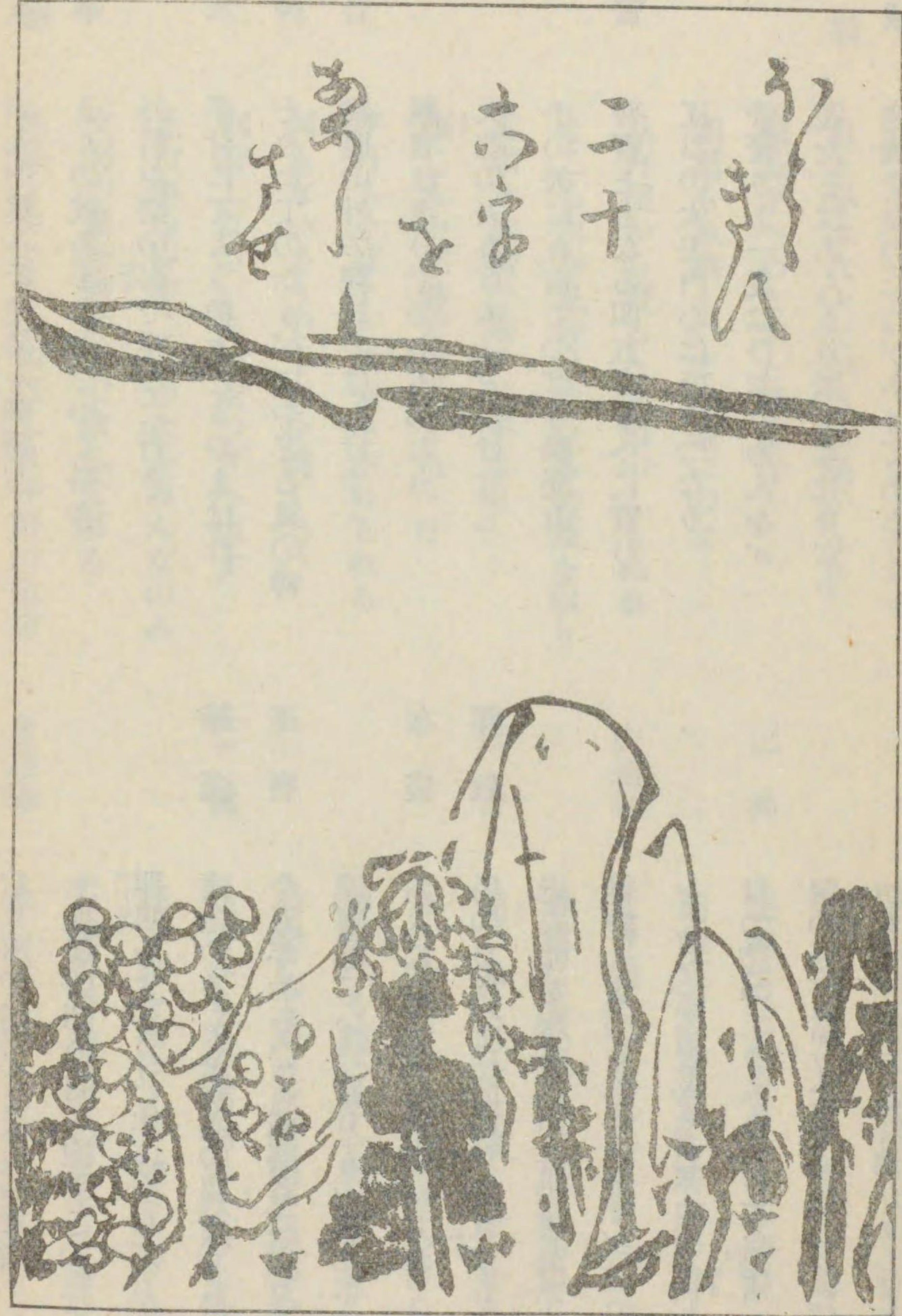
地蔵堂涙のたねがあけてある

地蔵堂涙のたねがあけてある

地蔵堂涙のたねがあけてある

地蔵堂涙のたねがあけてある

地蔵堂涙のたねがあけてある



無常

煙 夢 祝

これはさと佛の飯のちうがへり
 常念佛さもいやさうな後生なり
 酒中花を見て重氏は世を捨てる
 焼香の初筆上下あたらしい
 上下で持つはあはれな螢かご
 打敷は花にあらしの總もやう
 水向けをするもへらした女房なり
 帷子をわけるは薄い縁者なり
 境論中に六部は蟲の息
 菅笠にある名で頓死呼びかへし
 低き家のけぶりは高き御製なり
 聖人ばかりだと獲はかつる死に
 或夜ふしぎの夢を見て富を買ひ
 繁昌サ武藏野は今松の園

抜けぬ太刀はねぬお馬を御献上
 納まつて弓矢は鳩のふんだらけ
 おだやかさ猪牙と四ツ手が飛道具
 金屏で見れば軍も面白し
 有り難さひくい枕は棚へあけ
 軍はないと見切つたで貸さぬなり
 繪で見ても内裏守護する源氏雲
 甲冑に樟腦匂ふ太平サ

滑稽發句類題集 二編上卷

春 部

歳旦

御代の春海老から胴もかざり物

喰ひつみは唐崎餅はかゞみ山

喰ひつみの髭は野で老い海で老い

光陰の回りはじめに車井戸

若水の桶へ汲み込む明けがらす

年禮

印籠の富士へのしめの横霞

くだかけも御慶と告ぐる今朝の春

餅の裏しゝら鬩斗目に藁の跡

年禮のあられへかゝる春の雪

四五丁は六ツ子の禮で閒に合はせ

寶船

年禮に通辭をつれる芥子坊主
 さつくと松くゞりゆく下戸の禮
 餅あみに引掛つてる下戸の禮
 鳥追と禮者の千鳥すれちがひ
 人を茶にした年玉は利休箸
 てひくくをするとお鬩斗を引込ませ
 二日の夜かうべは神の御本陣
 君が代の枕言葉は長き代の
 楫の音するは乗地のたから船
 長枕では連環のたからぶね
 乗りぞめも馬で七種過ぎにする
 あれさもうよい君が代の姫はじめ
 お局のするは牛角のひめはじめ
 とほの眠りをゆり起す初夜這ひ

姫始

謠初

大喜悅不首尾は家内みなめさめ
矢車を召す夜は月も弓はじめ

祖父婆々のむかし話も御吉例

大名の質はながさぬ觀世水

落葉かく表は松をたかせられ

萬歲

君臣和して笑はせる松の内

大紋を脱ぐと千助萬右衛門

萬歲の方から笑ふ暮の嫁

門付に來るは萬歲すがれなり

萬歲びつくり一休に出ツくはせ

才藏は御油赤坂のたいこもち

羽根つく

姉の智慧廂の羽根に毬つづて

形振にかまけ追羽根娘まけ

かりた子を又かしにして嫁は羽根

毬つく

追ひかけて羽子の子もらふ挾箱
羽子板の梅玉むくでいもが出來
まり唄のほこりに霞む牀の不二
毬にうかれて玉子ほど嫁の膝

松の内

商人のよき衣著たり松の内
松の内我が女房にちつとほれ

七種

摘草も鈴菜が春の三番叟
春の音にしては七種せはしなし

摺子木で何の鳥だか二羽たゝき

猿と虎わたらぬ先と唐で言ひ

白馬の節會人まで草を喰ひ

黒馬の節會行へと相馬御所

子日

千代の例たぬしに植ゑべきを引つこぬき
身を逆さまに小松引く初子の日

鶯

鶯の歌は春の序古今の序

鳥かけも鶯ならば歌の友

鶯にたゆむ院主の經だらに

うぐひすを逃して家根の谷渡り

梅

梅の大關難波津と筑紫瀨

難波津の梅は一重を八重に詠み

梅が香は坐禪の鼻の邪魔になり

まだ干葉をかけたまゝ咲く村の梅

風の來るたびに鄰の梅をほめ

ゆうべの飛物何だんべい□□□梅

梅が枝の股に發句のはさみ紙

五日目に柳のうごくおだやかさ

あはれなる柳猿澤隅田川

立春

立春大吉かた／＼は讀めねえ

若草

光陰の矢にも福内鬼外なり
一寸の草にも五分の春の色

連歌

御一順月に照りそふ日輪寺
嫁の禮御春みじかになつてから

霞

門の松も首たけになる嫁の禮
帶付けて出るははしよつた嫁の禮

船も帆も色紙は霞む和歌の浦

雪解

御簾ほどに霞のかゝる花の玉
雪解して鼓が瀧は亂拍子

消え残る雪に月毛の駒が嶽

乳を餘すやうに雙子の雪は消え

兔ほど遠野に雪の消え残り

山笑

笑ふ山残りの雪も白齒ほど
春雨にうたれてゐるは鼓草

はうろくに霰たばしる春の雨

春雨の奥海となり山となり

鶯 菜 うぐひす菜ほうほつときく辛子あへ

嫁 菜 雪のわたとれて嫁菜の貌も見え

鶯かへ ひつつめるやうに嫁菜を姑つみ

太宰府はもつとはやると鶯はなし

鶯かへは郭にありたき神事なり

白 魚 白魚の目は楊貴妃の手の黒痣ほくろ

篝火の本へ源氏の魚がより

揚雲雀人で申さばおちやつびい

野出合ひの上でいちやつく舞雲雀

薪 能 薪の御能飛火野の近處なり

初 午 翁神ゆゑにとふを好きたまふ

狐の子出来て二月が初蟻

不拍子が神慮に叶ふ午祭

蛇穴を出 鶴の尾が扇の芝へ這つて出る

雉 子 八ッ目蛇さがして歩行く近目雉子

蛙 飛ぶ蛙鏡が池を曇らせる

目ツかちの蛙桂馬にとんで行き

鼻筋が脊中へとほるひきがへる

臺薩摩土瓶の肌もあり

蟲けらと一座に二王泣いてゐる

涅槃會もかまはず猫は妻を乞ひ

西行忌此の身を捨てて猫の戀

西行忌比には見えぬふじの山

にぎり尻のやうに早蕨草を分け

春寒し山のわらびもふところ手

槍うめに引ツかゝつてる奴風

もう水も汲まぬ奴の下り風

歸 鴈 琴柱ほど霞の中をかへる鴈

雛 祭 雛棚の志賀をかくすも山ざくら

小笠原流で供へる雛の餅

雛抱いてなめてゐるのが雛の主

初節句そのきさらぎに餅をつき

ひなの膳客は左やにぎり箸

紙雛も母のは腰がまがるなり

ぜんまいもきれて煮しめたやうな雛

桃の御所鼠に姐妃ほどさわぎ

雛だんの猫鶴ほどに嫁さわぎ

ひな棚に艾は姉のイイ頓智

薪ほど乳母が里から桃の花

をしさうに隅からはさむ雛の重ぢり

胡葱の鱈進せてさるぐつわ

雛さまの出合春三夏六なり

潮干には内の苦勞もわすれ貝

落ちたるはけして拾はぬ潮干狩

鷹の餌をのがれて潮干に拾はれる

蛤の出るまでまくる潮干狩

日の長さ鶯ほつと息をつき

虚空をつかみ反りかへり長い日だ

摘草を捨てて逃げ出すくされ繩

知らぬ火をかりて筑紫の野かけ道

煙草の火糺穂して行く野かけ道

摘草の入物にする下女が袖

草をわけ根を掘つてゐるのびるとり

春の旅伊勢路の馬を廻り付け

茶摘 御上りの茶摘娘も極そろひ

茶摘唄出ばなは聲もにえこほれ

唐番も茶摘もよほど聞き覚え

山吹 問へど答へず口なしの花を出し

月令 光陰は鷹居るた手も鳩と化し

化したての鶉鷹より猫に怖ぢ

蝶 花どろばう蝶は無言で追ひかける

野がけ道生醉蝶になぶられる

櫻鯛 味噌潮八重に吸はせるさくら鯛

下戸が箸取ると嵐のさくら鯛

花の散るやうに鱗ひくさくら鯛

櫻草 入相の相手にたらぬさくら草

大峯のはなし山伏ほらをふき

花 とほれとはつれなき關の花ざかり

釋尊の生死の間が花ざかり

花の辨當ちらしとは禁句なり

小町さくらを穴のあくほど眺め

短冊も風に尾をふる犬さくら

賣り歩行く花の浪間のみさごすし

さくらがり供は目見えの男なり

辨當持を花生はなせいにして戻り

散るほどは鐘のとゝかぬ裏吉野

海棠は眞字さくらは假名で譽め

清盛の扇のほしき花の山

生酔と下戸とさくらをねぢり合ひ

時津風ばかりは花の敵でなし

詩もよめぬ李白の多い花の山

花のしら浪打つほどの科でなし

なまぬるい花見に茶瓶たぎつてる

杯を手のひらでさす花の山

牡丹 牡丹花に二度降る雨の物靜か

氣の毒さどもりのほめる牡丹畑

初鯉

にはとりと讀みさうな字を時鳥

引つこむ時は沙汰のない時鳥

初蚤にいぢられて聞くほとゝぎす

海からは烏帽子山からは沓が出る

桐が谷や出る鎌倉のえほし魚

初物で直も高砂の松の魚

月令に見えず拾が魚と化し

鎌倉の魚で拾は土の牢

松魚よぶ聲も一ふし江戸なまり

とめるなといふ身でかける初松魚

伊勢守では切りかねるえほし首

眞中の扇座頭のわすれたの

をしまれて海月にされたイイ團扇

涼臺似顔の邪魔に灑うちは

夏部

卯花 卯花の雪見はなりも白がさね

卯花の雪に干鯢の直が上り

時鳥 天の時鳥にも君はまたせられ

や、しばし御冠かたむく沓手鳥

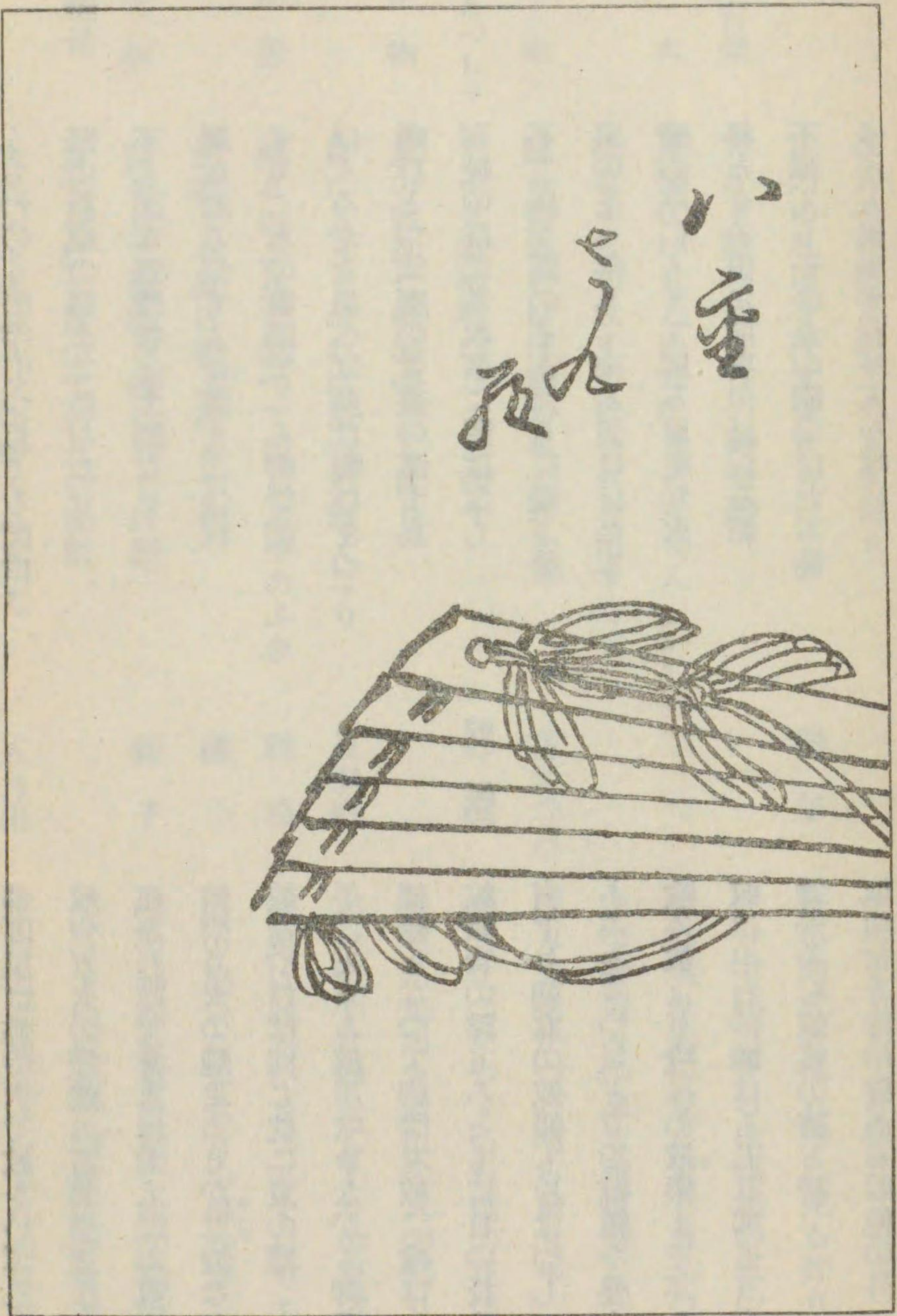
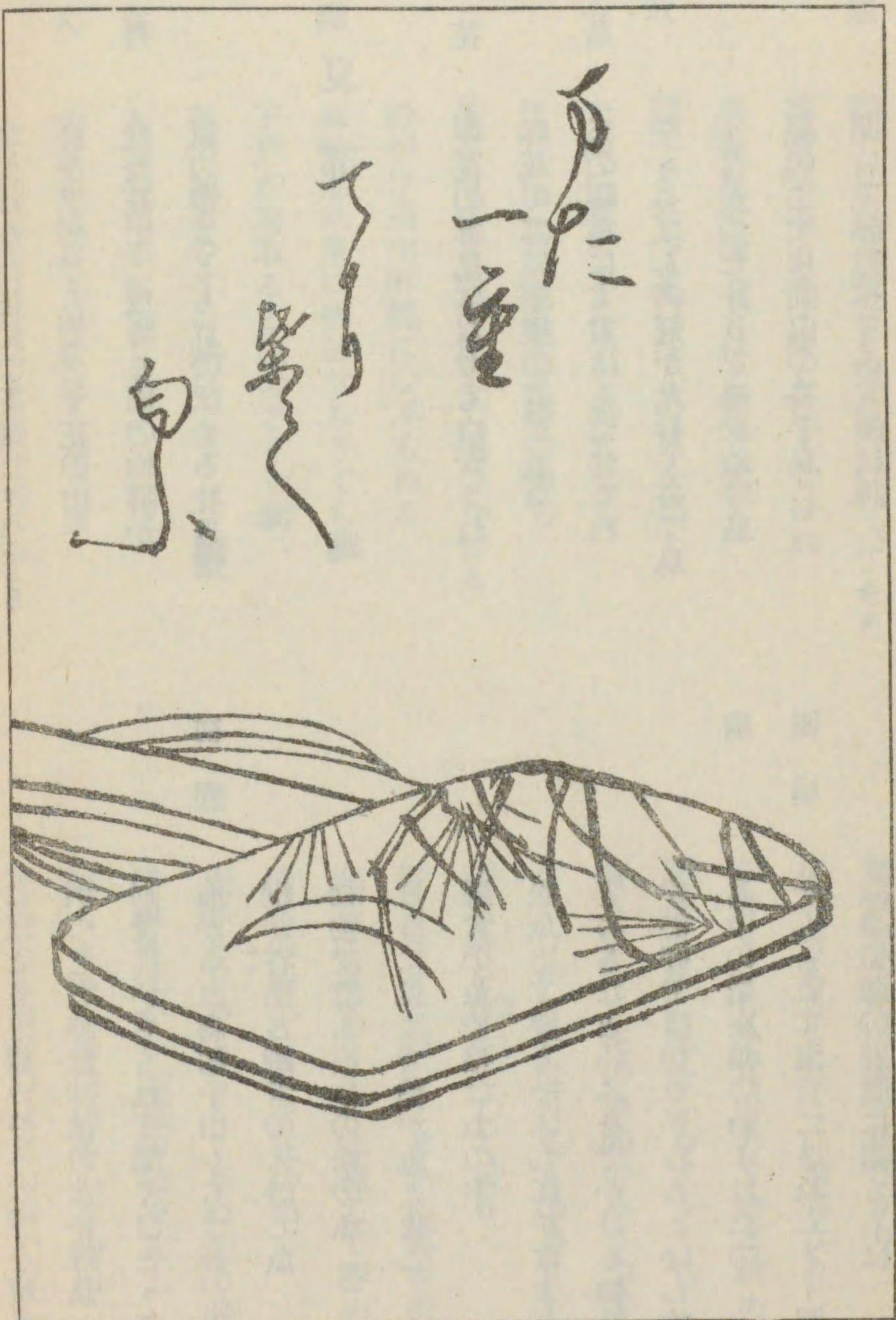
うたがつた許りで鳴かぬ時鳥

聲のこす片岡山の沓手鳥

聞いて詠むべきを式部は詠んできき

扇

團扇



筑摩祭

うちわのうの字引つたくる面白さ

鍋の數親の顔まで墨をぬり

不工面な筑摩祭は土鍋なり

鍋かむる祭も人が煮えこほれ

すりこ木の數鍋でしる御祭禮

ほくろかと思へば顔に蠅ひとつ

蠅ひとつ須磨の盆晝の濱千鳥

刑鞭のほたる政事に闇はなし

不二川を鹿の子まだらに飛ぶ螢

扇の芝へ落ちて來る負けほたる

燈心草にもえて居る車胤が火

稗まきの田に稻妻のほたる影

不細工も子ゆゑの闇のほたる籠

子子も天上すれば人を喰ひ

蠅

螢

蚊

蚊帳

佛師屋は佛の肉で蚊をいぶし

蚊やり火の煙競へる美濃近江

血をわけて身とはおもはぬ蚊の憎さ

蚊やり火の馳走ありがた涙なり

蚊をやけば同じ枕に夏の蝶

手にとまる蚊を吹きながら御看經

輕羅となつて細腰を蚊に喰はれ

蚊帳賣の聲もろともに日の長さ

宿下り朝寐の蚊帳も片はづし

あみをうつ氣どりで蚊帳を疊んでる

喰ふ蚊より喰へぬ蚊帳までぶち殺し

蚊は出たが幟はもし旦那どうなさる

雷が羨む蚊帳の臍と臍

取組むと時の聲ある蚊帳の外

蚤

蚤狩の裾野で不二の穴が見え

章門に爪印を押す蚤ざらひ

日吉祭

天が下晴れて日吉の御祭禮

心太

夏來にけらし白妙のところてん

ぬるりと入れてぐにやりと出す心太

風車

歸り道いそげば回る風ぐるま

かたつむり

イイ天氣他行のならぬ蝸牛

單物

夏の旅汗に鳴海の一しほり

目がさとくなれば浴衣地眠くなり

菖蒲

鶴といふ身で這つて居るあやめふき

葉裏々々風に戦ふ花あやめ

柏餅

旗を立て加勢を頼むかしは餅

さするはず貫つていたい柏餅

葉裏々々葉表々々味噌とあん

端午

おつとり刀で柏餅をくんな

泰平の武者は五月に見る許り

立てて恥ぢざるは鐘馗の紙のほり

初節句魚木に登る氣しきあり

はつ幟追々に來る諸軍勢

花かつみ

長刀で花かつみ刈る前九年

石榴

燃え立つたやうに石榴の花は咲き

ざくろ無用と叡山の火の回り

やれ引くな絲からくりの夏羽織

競馬

勝馬は屁もいさましくひりちらし

棟

馬の尿さらふ六日の棟かけ

帷子

茶の師匠數寄屋縮に紹の羽織

洗ひさめせぬが薩摩のかすりなり

五月雨

井戸繩に縫上げをする五月雨

五月雨に狸も腹の音わるし

手紙には水器に水ばかり

五月雨のしめしに困る鬼子母神

涼しさは墨畫の松を敷いて寐る

五月雨に下女あつくなる火打箱

すゞみ臺又はじまつた星の論

晝寐

竹縁に晝寐の貌はつと豆腐

西瓜

たゝかれる西瓜も本は色出入り

田植

早乙女は子を寐かすにも田植唄

行燈にたのむ西瓜の薄化粧

田植笠かぞへて下る峠みち

西瓜盗人ねぢ首にして逃ける

早乙女は二の腕で拭く玉の汗

花火

小便の跡で屁をひる安花火

早乙女は琵琶を引出す近江の田

不二詣

駄鳥の屁ともいひさうな安花火

住吉御田

筒男の神事早乙女も玉ぞろひ

雲の峯

くりから龍が不二を越す江戸道者

乳守から植ゑるで米もよくそだち

夜や寒き衣や薄き不二の室

神事まへ田植をしふる姉女郎

雲の峯これぞ暑さの峠なり

夏月

諏訪の湖夏わたるのは月ばかり

暑い事金覆輪の雲が出る

腰かけへ櫛のふのすく夏の月

牛の背を分ける小原の夏の雨

氷室

六一加賀さん八一は郭の雪

夕立や草履で行ける處まで

其角みえ小桶こちらへ銅だらひ

夕立にいざり拔手を切つてかけ

夕立は急がぬ人の先を降り

雷

三度目に出て天晴な緋の衣

雨も田へ落す自在の御神號

樂屋を知つて師の坊は御いのり

線香までも賣り切れる延喜八

延喜八おそれる出臍さくろ鼻

雷に耳と臍とへ手がたらず

雷の奢り出臍のむかうづけ

有りさうでない雷の土左衛門

揃つて尻餅井戸替の綱がきれ

暑

あつい事たらひの中で鱒を呼ぶ

枇杷と桃葉はかりながら暑氣拂ひ

生首が水に浮いてる暑い事

船鉾は人の浪間をわたるなり

神木の蟬は恨みの釘かくし

うろたへた蟬熊坂のすねで啼き

祇園會の火ともし比に油蟬

さぎ草をからすだらうと水を打ち

瓶の中立遊ぎする眞桑瓜

金魚鉢二人禿の筒井筒

金魚の尾かひどりを著た取り廻し

皿にもる冷ざうめんの觀世水

丑の日はのろくされぬ蒲焼屋

武者一騎蟲干の座へ叱られる

著脊長へ枝もならさぬ風を入れ

蟲干も書物は道を明けておき

寒さうに見える氷の土用干

雛の風入れ檜扇のひらくころ

寐冷

子の寐冷翌日夫婦喧嘩なり

朝顔

朝がほは茶を一杯の詠めなり

蚊帳釣草

かやつり草に廣く寝る蟲の後家

蟲

翌年は千代井戸端を去つて植ゑ

風鈴

風鈴もだんまりで居る暑い事

來る人を蟲が知らせる草の庵

御被

御被川七路行くと天の川

きりくす背中

きりくす背中に膝をしよつてゐる

秋部

七夕

天に川あるは川地にも雲の上

稻妻

いなづまが首にからまる不破の關

翌日は機に居眠る女たなばた

霧

霧晴れて袖を産み出す雙子山

七夕は川を渡りてぬれ給ひ

秋風

墨つきも霧ににじめる鴈の文字

秋一の出合ひ牽牛織女なり

唐なす

唐なすをかほよ氣どりて下女目利き

盆

七月は佛も魂の御出でなり

徳は元生りと唐なす儒者目利き

鬼灯

鬼灯のかん處を吹く絲切り齒

薄

歌に詠むす、きも果ては炭だはら

葡萄

ぶどう籠鹽をおろした戻り馬

女郎花

腰折れ歌を詠ませたは女郎花

芋

芋蟲のあしあと藤の花

白浪が海から忍ぶ芋ばだけ

月一ツもたぬ葉はなし芋蟲

芋を惜しんで屁のやうな古跡なり

長芋を惜しむと棒にされる所

芋は痰の毒屁まで咳をせき

かび臭い布團引き合ふ鹿の聲

八朔に内で荒れてる山の神

八朔の鷺毛質屋へ散亂し

月

たくはへは草庵に只月ひとつ
むさし野へ澄み切つて出る月と玉

月と中能いから雨と不破の關

月の歌許り歸朝と奏聞し

桂男の瘦せこけて出る病上り

田毎ほど月影のもる不破の關

更科は月山科は星の影

快くとんで行くはと養老四

諸鳥にうさを晴らさせる放生會

急な供奉木々の紅葉を手向山

紅葉狩和尚が出した般若湯

夕もみぢ道きく美女の物凄し

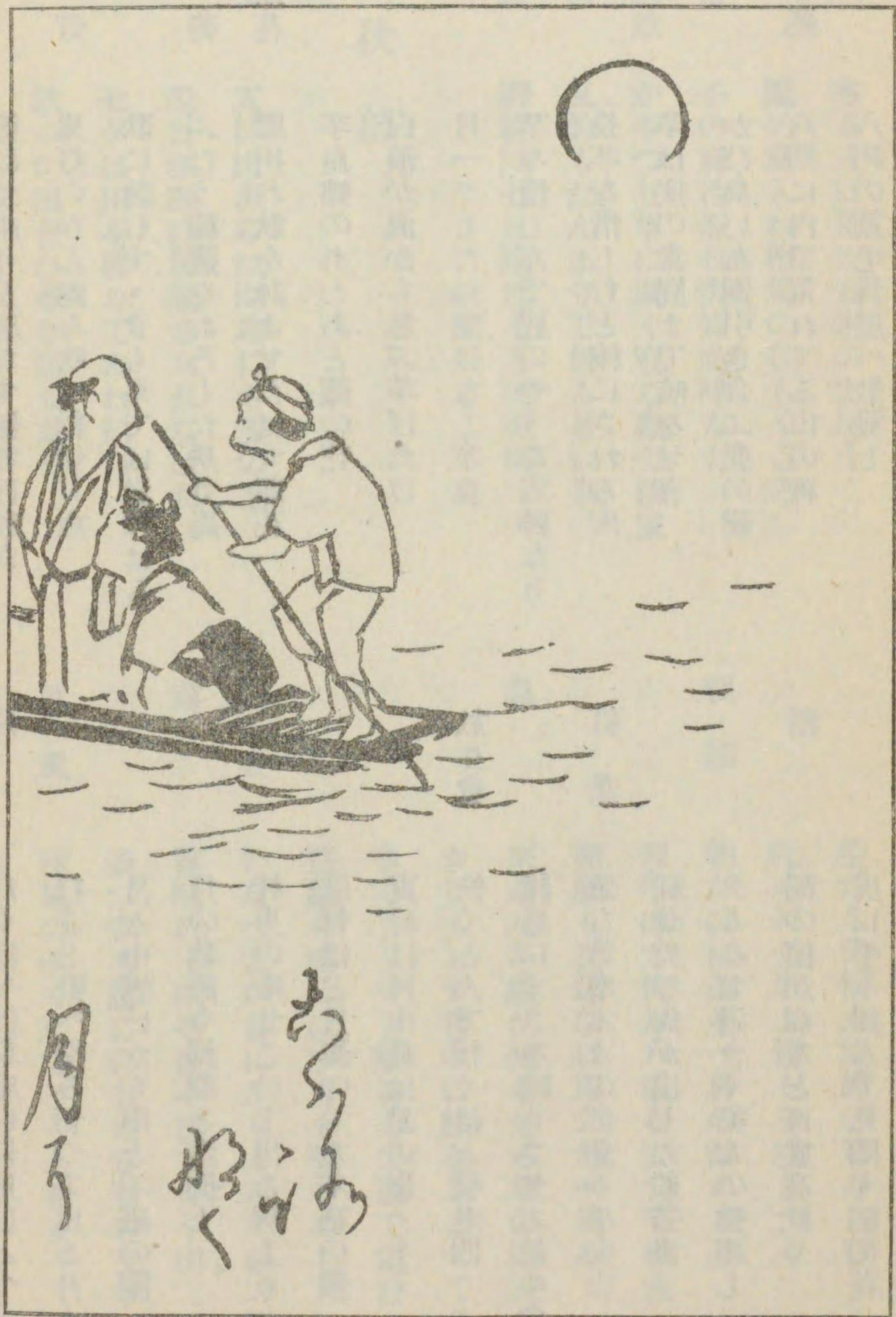
稻の穂が寐ると百姓高枕

尻に手を組んで見回す稻の花

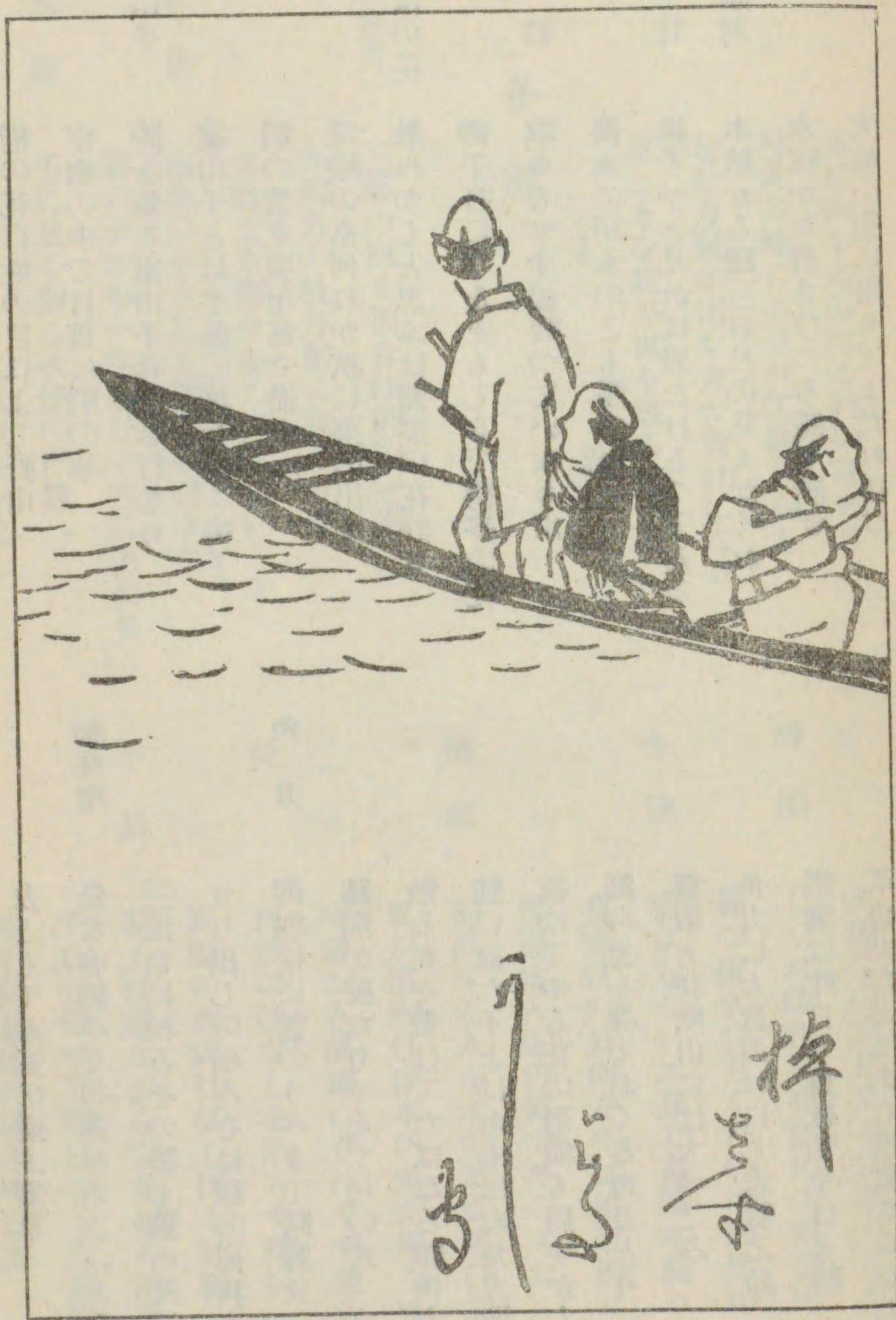
稻

紅葉

放生會



月
舟
好
遊



舟
好
遊
棹

稻の花百姓の目によし野山

作物の中で目貫は稻の華

案山子

陣を張る案山子兵糧奉行なり

案山子とは手筋の縁を引く鳴子

稻の波立賓僧都立遊ぎ

栗

嵯峨の畠何れか秋に栗の出来

そばの花

散れかしと思ふは蕎麥の花許り

御手打になるともしらで蕎麥の花

茸

取りもせず娘笑つていなり山

萬木の司木つかさどのこも陽の形

岩

捨子かと思れば岩たけとつてゐる

木賊刈

木賊かる鎌三日月の見えがくれ

木賊かり翁さびたる鎌を研ぎ

菊

大輪の菊に限りてよだれ掛け

柚味噌

友として慈童の遊ぶ翁草

急な客柚みその蓋をちよいとそぎ

三度目は柚みその釜も勤め死に

せり出しの柚みそは嫁の道具方

角力

御即位に雲のうへまで晴勝負

勝鬨の聲なりやんで弓の式

散る花を帯びてたばねる勝角力

膝に寐た子とはおもはぬ角力取

投けてやる花の羽織も肩すかし

師の恩を裸でおくる角力とり

關取も伊吹山には大へこみ

角力にも昔あれにし志賀之助

稻妻は昨日も負けず今日も勝

草角力などはあら馬蹴ちらかし

木に人をならせる村の花角力

村角力峰にさされて勝負なし

合ひ力屁の出た方が負けになり

足もとを見て世を渡る庄之介

時雨

火燧での意見爪をば取りなせえ

しぐれ晴れ夫婦顔出す筑波山

著つ脱ぎつしぐれの亭の筆の鞘

宿なしといふ身で蘇鐵冬籠り

夏逃けた日向を冬は追ひ廻り

雪國は入定の氣で冬ごもり

掃除する人を木の葉が呼び返し

風が笛吹けば木の葉が舞をまひ

時雨かと落葉にさわぐ不破の關

内談のはなしを散らす櫻炭

炭團の火碎けばしばし紅絞べにしほり

歌人は居ながら潮を知る濱千鳥

千鳥の似せて明けさうな須磨の關

冬部

落葉

神無月

三郎の曰く拙者は御留守番

大社あの牡丹餅に獅子ツ鼻

大社立ち聞きをして見たいこと

玄猪

白魚のやうに玄猪ゑのこの供はまち

猪の子から一字違ひも火にあたり

火燧

手に足を握る火燧の門違へ

穴熊をねらひ火燧の山を越し

水鳥

一羽でも三羽でも鴛鴦哀れなり

鰻賣は一生後家に恨みられ

池のをし月を寄せたり廣けたり

河豚といふ晩でござると常世いふ

雪

咲く時を散ると見まがふ六ツの花

雪の鐵砲直をきいてびつくりし

その早足末世に薰る香爐峯

冬月

冬の月灰汁で洗ったやうに冴え

静かさは琴に蓋する松の雪

袴著

はかま著は五ツの道の踏みはじめ

松島の雪はまことに六ツの花

戎講

袴著の女にもある雲の上

雪を見る物とは知らず越の冬

御講參

魚も周く賣り切れる戎講

乳もらひの涙とともにつもる雪

來る年もお講に目だつ縁遠さ

雪の門じだんだ踏んでお宿かえ

田舎間の肩衣並ぶ御取越し

人參の白あへ雪の赤合羽

勸亭流の書始めは周の春

此の雪に黄色な文字は何奴ぞ

顔見世

顔見世の留守居は下女の役不足

小便の槍を突込む雪だるま

しばらくの價千金周の春

王公貴人も羨まん雪のふぐ

顔見世に御供の下女も藏衣裳

鳥は物かは雪の夜の鰻と汁

河豚

蜜柑

紀州から籠で乗込む寒見舞

色々な形に蜜柑の旅づかれ

寒

寒見舞鴨先々を飛び歩行き

水に刃が出来て寒サが切れるやう

己が首眞綿でべるさむい事

寒聲

寒聲の千秋樂は福は内

寒聲にさびがついたで用心し

寒念佛

入りもせぬ聲のよくなる寒念佛

寒念佛病氣へひやく大木魚

藥喰

冷症で二十日ほど喰ふ冬牡丹

毒になるやつが煮て居る藥喰ひ

鷹

雪の狩くらうは居る鷹ばかり

水

諏訪の湖狐は馬の猿田彦

納豆

納豆の鴨と聞ゆるイイくらし

鮭

鹽引の腹に三ツ四ツ年の豆

鱈

献上の鱈は江戸までうつゝ責

煤拂

胴上げで坊主にされる奥家老

すゝはきに拍子の揃ふ蒲ほこや

出したのをふいて入れるは煤拂ひ

黒い鼻たらし古椀買を呼び

幸ひに義理を照らし合ふ鏡餅

年わすれたうとう一人水をあび

豆を熬るに豆がらを焚く忙がしさ

厄拂頼朝治世のせりふなり

頼政といふ身で御所の鬼やらひ

むしろとうしんまでも賣る年の市

箱入の毬ははずんだ市みやけ

仁和寺をまねた手桶に市の雨

かつぐやつ天福棒としやれて買ひ
すつぱりとはけたと市の帚賣

歳暮

年の關手形の返るイイ仕舞

朝起きの家に寐て居る暮の金

家内安全息災で屠蘇を買ひ

千歳が立つと萬歳江戸へ來る

門は松内は竹田の大仕かけ

掛取

掛取の笑顔は右之通りなり

掛取の年ごもりする六ツかしさ

きたなし返せと弓張つて矢のつかひ

返答はどうだといへば春の事

掛乞へ新年親類忌中札

掛取の百疇りが上ゲ句なり

大晦日

大晦日よく回るのは口ばかり

除夜

こゝでこそ日も招きたき大晦日
大三十日金とり王手々々なり

留守と答へて消えなまし大三十日

大三十日知らずに年のつもれかし

今年寐て來年起きるイイ仕舞

乳母ばかり小唄で越ゆる年の關

二年ごしたれてる除夜の長雪隠

來る春をまたいで除夜の紐時計

地名名所部

江戸

薄の名所招かねど人が寄り

繁昌さ國守をどなた様と聞き

江戸を見よとつと場末に都鳥

京

八百の上端へ落つる日千兩

江戸にない物はと問へばかんこ鳥

西陣の籠も雲居へのほるなり

經を踏む土地の名にイイ數珠や町

著倒れの地名に叶ふ綾錦

蘇生せしまでは名もなき戻り橋

嵯峨の奥姦しくない女づれ

大坂

難波津の梅からひらく文の道

美酒佳肴實に列國の臺處

難波津の名所は塵の知れぬ池

日本の米の集まる喰ひ倒れ

金洗ふ水染色の地に合はず

東海道

紫へ來る道の記も五十三

御條目道の分つた札の辻

大津繪が一ツ餘つて内に張り

東海の道にも蜘蛛の下り上り

廣い事馬も乗込む乳母が餅

風景も不思議と許り筆を捨て

開眼をたれろと關で其の當座

蛤も桑名此のごろ生で賣り

金むくの目貫は鞘の真正面

鯨の金高積る宮のふね

日坂でたらぬ噂は首陽山

うつの谷の娘團子で縫ひならひ

大井川るざりが歩行くやうに見え

有りつたけ御駕へたかる九十川

川あきは宇治の合戦ほどに見え

富士川がとまり蝨の牧狩し

夜のうちに出来たで夢の司なり
實に不二はへこまぬ國の印なり

山の圖に扇をひらき奏聞し

孝靈五仁者の好む物が出来

箱根越え横根木の根に休んでる

近江八景

鏡山うらは湖水の天下一

琴の音は景色の外のかくし藝

唐崎もまたすてられぬ夜の雪

杖突いて琵琶さし覗く一ツ松

無雅ナ奴堅田へ疵の鳥おとし

鴈行に並び堅田の田植笠

七景を跡に預けてかへる鴈

撞きばえのせぬ三井寺の明の鐘

言の葉に調べきられぬ琵琶の景

寝物語

鄰國の夜這ひ美濃紙持つて来る

國界美濃の方では油断せず

鄰國へきこえる美濃のすゝり泣き

橋立のきれどをつなぐ雨後の虹

十かへり見ても目に飽かぬ千松島

宮島は榮花の夢の覺めのこり

名残をしげに鶴の立つ和歌の浦

蜜柑磔つぎ鶴のたつ和歌の浦

和歌のうらやもめの浪に女夫づる

面白し舞子が濱に浪つゞみ

濱々と舞子を譽める江戸道者

我が夫のふとまねぐ内しやつきばり

其の當座毛のはえて居る松浦瀉

さで彦の歸朝女房に苔が生え

三景

和歌の浦

舞子濱

松浦瀉

生類部

鳳凰

鳳凰の曰く出ようかナア麒麟

鶴

名聞な鳥は文武へ五百年

丹頂は天窗あたまがちなる放生會

明日御沙汰餌蒔きの身にも夜の鶴

鸚鵡

異國から來ても鸚蒔は江戸言葉

耳こみ擦り鸚蒔きよろ／＼／＼／＼し

鶏

さいはひのやうに鶏腹をたて

駄鳥

火の側もいやと駄鳥の食もたれ

慈悲心鳥

住む鳥も神慮に叶ふ慈悲の聲

柚の斧おもはずたゆむ慈悲の聲

鳩

四五枝ほど下ツて泊る養子鳩

滑稽發句類題集二編上卷

家鴨

鵪鶉

鶺鴒

馬

猿

狐

口を吸ふ事をば鳩かをしへ鳥

繼母に育てて貰ふ家鴨の子

鵪病氣三度三色の食好み

尻おたま尾では蛙天窗で桃を喰み

鶺鴒は一度をしへてあきれはて

十日目の雨はきりんの背を分ける

聖人の裾へじやれつくきりんの子

現銀にかけを追はせる借馬引

鹿でなし駱駝でもなし佐野の馬

大根をおろせば馬もからみなり

後足を團扇に遣ふなつの馬

馬の老い込み泥田にて棒を引き

おぶさつたやつが養ふ猿まはし

殷紂の淫傾國の獸なり

狸

啞にとり付きこまつてる馬鹿狐
 添乳をぬけて一首かく化の皮
 毛深いと許り保名は思つて居
 狸の遺言茶釜には化けるなよ
 たぬきの日待ち金玉をひろけくら
 音楽が腹鼓だで射て落し
 かた／＼がナアと女狸おもつてる
 霧を吹くやうに逃げ行く負けた猫
 猫のむつ言大音で大よがり
 手勢すぐつて三四人鼠狩り
 飯櫃へ鼠まんまとしのび込み
 犬さらいひ身投のやうに袖に石
 稻麻竹葦と圍ませて犬つるみ
 犬の尿口三味線の絲が切れ

猪

羊 張り交ぜの屏風羊の五もく飯
 塵紙は羊引割飯のやう

猪

兼て無き身と思つてる外科の豚
 芝居の夢がたべたいと猪の嫁
 猪の子のたゞはうつゝを喰ひたがり
 大病の猪いびきさへ通りかね

猫

霧を吹くやうに逃げ行く負けた猫
 猫のむつ言大音で大よがり

龜

妄想はさかりの付いた猪が喰ひ
 龜と鶴桃を盗んだほど違ひ

鼠

飯櫃へ鼠まんまとしのび込み
 犬さらいひ身投のやうに袖に石

藁

鼻筋の背中へ通るひきがへる
 藁薩摩土瓶の肌もあり

犬

犬さらいひ身投のやうに袖に石
 稻麻竹葦と圍ませて犬つるみ
 犬の尿口三味線の絲が切れ

蟻

七曲の玉には蟻もにくからず
 咄すのか口を吸ふのか蟻の道

毛蟲

さゞ浪を背中へうたせ毛蟲かけ
 御花見に出られてこまる古布子

鰻の油提灯ちやうちんがよくとほり
 鰻好き初手一皿はすし夢中
 うなぎやの女房天窗で櫛を買ひ

蝨

蝨をとるは常體の眼なり

鯉

乳の藥里から魚を見舞なり

鯛

鯛の味噌漬へ尾紙のかぶせぶた

鮎

昆布の魂一寸の鮎にあり

鯉

花鯉葉ざくらほどに下女はかき

蛸

鯉ぶし茶臼に遣ふ安かな

蛸

清盛のやうにつツ立つ鍋の章魚

蛸

つるむ蛸蜘蛛かく繩十文字

龍宮

龍宮の弔ひ蛸が導師なり

烏賊

龍宮の板屏烏賊の墨で塗り

スワ

スワといふ時烏賊の吹く最期墨

鰻

蒲焼もれつきとしたは二本さし

滑稽發句類題集二編上卷

衣食器財部

衣類

鯨世に出ると肩衣蟄居なり
 琴の身がまへで袴を嫁たゝみ
 風なりに羽織をたゝむ船の中
 へんてつな物を著たなど不風流
 丈なしもめん物さしでたゝかれる
 五六人びつこのならぶイイ米や
 竹槍で脾腹をるぐる米だはら
 上がったの高根に見ゆる不二見酒

米

酒

すき腹へ劍菱るぐるやうにきき
甘口な意見でいかぬ酒のどら

餅

元は同家で不和となる餅と酒
のし餅の裏はむしろのしのぶ摺り

百毒の長だとおもふ二日酔

牡丹餅は小豆の方がおんらしい

ふらすこは呑むと段々青くなり

貰ったかして牡丹餅に角がある

急度せぬ座しきへちろり袴で出

他人のますさ扱むまい牡丹餅だ

五分々々と言ふは喧嘩のわかれ酒

摺子木を鍋へ突込む安法事

居酒屋の軒くだけかけのからごろも

下戸

おおさへを二番叟から下戸は言ひ

けちな酒も無い處がつもりなり

下戸の客膳は急けとおつばじめ

面赤くなつて來るほど面白し

山川へ通ふちろりは下戸の客

すぶ三のころが酒も面白し

右側の小間物店は病氣なり

連をばこまらせ犬をば悦ばせ

菓子

葛まんぢうは五臟まで透きとほり

猪の口をやつたら上戸吸ひ

薄皮饅頭はづかりと割つて喰ひ

土蜘蛛の身ぶりてなめるこほれ酒

長崎の塵運んだり砂糖船

どぶ六とおでん立ッててやつ付ける

麵類

のりさらくと押しもんで和尚そば

けんどんな箱へやさしいそばの銘

五六人手打で濟ます安喧嘩

親切に一膳残すそばのはし

砂のもるやうなのれんへ蕎麥と書き

焼海苔に生醤油ばかり爪はじき

新しい物は數寄屋に水ばかり

命なりけり小夜更けて水の味

水瓶へ夜這ひにかゝるのん太郎

大判は悪所がよひをせぬたから

金銀の重さ力で持てぬなり

兩替屋せめ念佛のやうに打ち

世の中に持つべき物は小判なり

よく回る人が押させる錢車

錢でさへ丸くいかねばはね出され

海苔

水

金錢

玉

武器

諸道具

目の覺めた細工枕で時をうち
 大店の火鉢藥罐はイイ道具
 密談の火鉢二人でいぢり消し
 狀箱の蓋を嚙み付くやうにふき
 高島の硯も勻ふ古梅園
 あぶられて五臟をしほる安煙管
 永ッ尻きせるが出たりはひつたり
 燭臺は腮へ毛拔をぶら下ける
 指切丸の土たん場は箱まくら
 竿のぬきさして船底ギツチギチ
 なけられて心がはりのする鉢
 吹き降りに首を呑んでる蛇の目傘
 勝手道具の大將はかぶと鉢
 壁燈へ新田足利陣を張り

蹴られてはだまつて居ない銅盥
 徳利の指に鼎の物がたり
 徳利の笑窪まぐさに布袋笑ッてる
 大笑ひ客も帯もころけ出し
 片小鬢から年の寄る撥欄帚
 縁側を一ツどやして掃き仕舞
 短慮功をなさすり鉢みぢん
 中がイイさうで摺鉢目がつぶれ
 引臼は菩薩の罪で目が潰れ
 吹竹の風に浪たつ帆立貝
 腹にすゑかね吹竹が竹ばしり
 たまさかにみんなふさがる七ツ鉢
 生海苔に又めぐりあふ貝杓子
 吹竹の利勘後門へ□□銅

質物

左迂になりますといふ公家の質
 槍までも曲けて遣ふは御不勝手
 長船も流れ次第の御不勝手
 波の平浮きつ沈みつ御不勝手
 利をもつて解くも質屋の繩目なり
 兼房をどの質屋へか置きわすれ
 かさぬといふに質くどい〜

滑稽發句類題集二編中卷

公家部

御所 紫宸殿左は忠義右は孝

國に飢ゑなくて正しき御冠

鳳輦の内には御衣と麒麟錦

日本武尊 ふしくれた夷賊へ直な日本武

吾妻に縁も碓氷と御なげき

草を薙ぎし如く夷賊を切りなびけ

大和屋たけと申したき御仕打

神功皇后 胎教のために三韓攻めたまふ

勝ちたまふ管腹中に弓矢神

女の業にもろこしを粉に碎き

將門

三韓が皆したがつた美しさ

人の真似する猿島のえせ公卿

十膳の喰らひだふれは相馬御所

相馬御所攝家せつげになるは鳶司

裾をふまれ將某倒しの相馬公卿

道鏡

道ならぬ鏡〇〇の氣をうつし

道鏡にあるぞくと□□大社

真中の足で〇〇へよぢのほり

萬婦不當の道具にて〇〇し

あればあるものと〇〇の御満悦

君がためながくもがなと弓削たもち

夫れまでは十人〇で弓削すまし

戀の重荷を背負つてゆく芥川

在五にはちとみやびたるから衣

業平

あれさつめらせ給ひそと芥川

有常もあぶなく思ふ遊び處

荅朝顔おつ付ける筒井筒

行平

月の名所で雨風を御寵愛

行平は潮仕立の口も吸ひ

松風がふくと村雨一トしづく

あいにくと兩方へ出る須磨の月

よく腰骨がつゞくぞと須磨の蟹

深草少將

よし百夜通ったとこが始まらず

少將は榻のあてかきなどもやり

のつべらほうに少將は氣がつかず

小町

玉座間近きせんたくは和歌の論

いざ立寄つて見給へと洗ひあけ

萍に十二一重の腕まくり

玉藻

小町が仕事萬葉のあらひ張り

これ見な水に浮草と小町イヒ

秀詠の妒みにも出る角だらひ

歌の白浪萍の根なしごと

それでも小町深草にはえははえ

コハ珍事小町に臍が二ツある

三國の王をはめたも一ツ〇

最期屁をひらせたが和の譽れなり

檜扇に胸の火をする官女達

官女達頭痛の灸をすゑたやう

官女

武家部

義家

名將の名こそ世に散る關の花

宗任

緋臈も柿色になる前九年
國がらで宗任梅を鼻にかけ

清盛

眞菰でもイイとすねてる猪の隼太
月を招くと清盛は腫れ病

秀郷

御所のどよめき何事ぞ梅の歌
秀郷も二度目は睡で根まで入れ

重盛

水船で蛸ののたくる御難病
日本の小松の茂る醫王山

綱

すぶくくくと秀郷は客に行き
羅生門馬はまごくくくし

實盛

後悔を先に立ッたは小松殿
髪のを塗つて軍が若がへり

頼政

扱は手事と渡邊くやしがり
一段は風雅で昇る源三位

平族

老武者の平家八しまで海老になる
奢ッたが徳になつたと海の底

隼太

頼政は歌で美景を申し請け
詠んだのも射たのも同じ夜の鳥

義仲

盧生が夢の半ばにて平家さめ
おごり仕舞が西海の潮なり

兼平

思ふ矢つほへ射込んだは源三位
拙者が落ちると中氣だと頼政

巴

木曾の朝日に北國の雪も消え
巴にも粟津が原の御殘念

兼平

骨は折れ地紙は残る宇治の芝
猪隼太サアキヤツとでも言つて見ろ

兼平

奥中が相模で秩父もてあまし
くりからのやうに兼平落馬する

巴

兼平が塚を取巻く早苗とり
殘念だのんしと巴生捕られ

景時

飛車のきくやうに梶原工夫する
景時が下知は上意のあたまから

頼朝

和田合戦に名の見えぬ婆々ア武者
頼朝は海より深い池の恩

景季

する墨へ水をさされて二番筆
我が陣へ入れば籠に枝ばかり

義經

源家再建山木から切りはじめ
石橋の鳩は神慮の御手品

繼信

胸板をすゑて忠義の的にたち
橋ぶしんするかと思ふ衣川

義盛

放生會扇が谷も天地金
あらばちの軍佐殿穴這入り

辨慶

なぜだえと武藏靜になぶられる
不用物ともに辨慶八ツ道具

義盛

兄様は苦なし御舎弟九郎性
牛若丸の御供には足駄とり

靜

千羽の後の二の舞は靜なり
兄弟のほまれ三國一の場所

義盛

和田一家百がぬけても馬鹿にせず
鼻息をしづかくと御曹子

曾我兄弟

虎の卷さと祐成は封をきり
ふり袖にうかと蝶々押へられ

重忠

義盛はだきしめられてほつと息
菟と茗荷で責めたのは畠山

五郎丸

變生女子で蝶々をとつかまへ

北條家 其の後はねから沙汰なき五郎丸
三角な法で時政世をふまへ

義興 生きながら新田弘誓の船にのり
無念さは義興そこに氣が付かず
樟の木は藥にしても内裏守護
石になる木は南朝の柱なり

常世 安い時まうけて高い時つぶれ
名木の焚火はまれな雪やどり
源左衛門山吹色は飯ばかり

道灌 江戸紫の下染めは桔梗なり
山吹の後は二道の勇士なり
道灌も金をかせかと初手おもひ
實にならぬ花が歌道の種となり

義貞 扶桑木焚くと天下を護る處
佐野の粟これも榮花の焚き初め
召し召だされ常世焼火の間へ詰める
やどなき旅僧をいぶす雪の宿
勾當に目をなくなした左中將
海へ太刀とは鐺際の智謀なり

信玄 山吹がないと古鞘出すつもり
ききがひのないは哀れな野田の笛
信玄も鐵砲疵は祕しかくし

道鬼 五體不具なれど武道の鬼神なり

加藤 異國ぜめ日本で撫でる髭の簀

勘助が鹿相車で足を引き

小西 分厘も引くなくと小西下知

勘助が片身信玄氣にいらす

後藤 大坂で後藤目貫の男なり

謙信 謙信は鹽で信義を磨くなり

片桐 片腕の武士茨木へ退去する

信長 おためにはけつしてならぬ本能寺

眞田 大坂であつたら錢をむだづかひ

からめての大將は蘭丸と御意

二六勝負は兄弟の敵味方

光秀 臯月かなやうく天氣三日持ち

大坂の名残眞田の七變化

せめて藪から棒ならと明智言ひ

刑部が敗軍駕籠煙立てて逃げ

秀吉 鷹になる氣ざし草履をぬくめどり

ぬるい茶で段々あつい御取立て

凡人に智慧もましろの御相貌

寺小性淀の夜船へ棹をさし

草履からかた道ついた天が下

縞がらがよすぎ石田に似合ひかね

和の譽れ鋤鋤でほる耳の穴

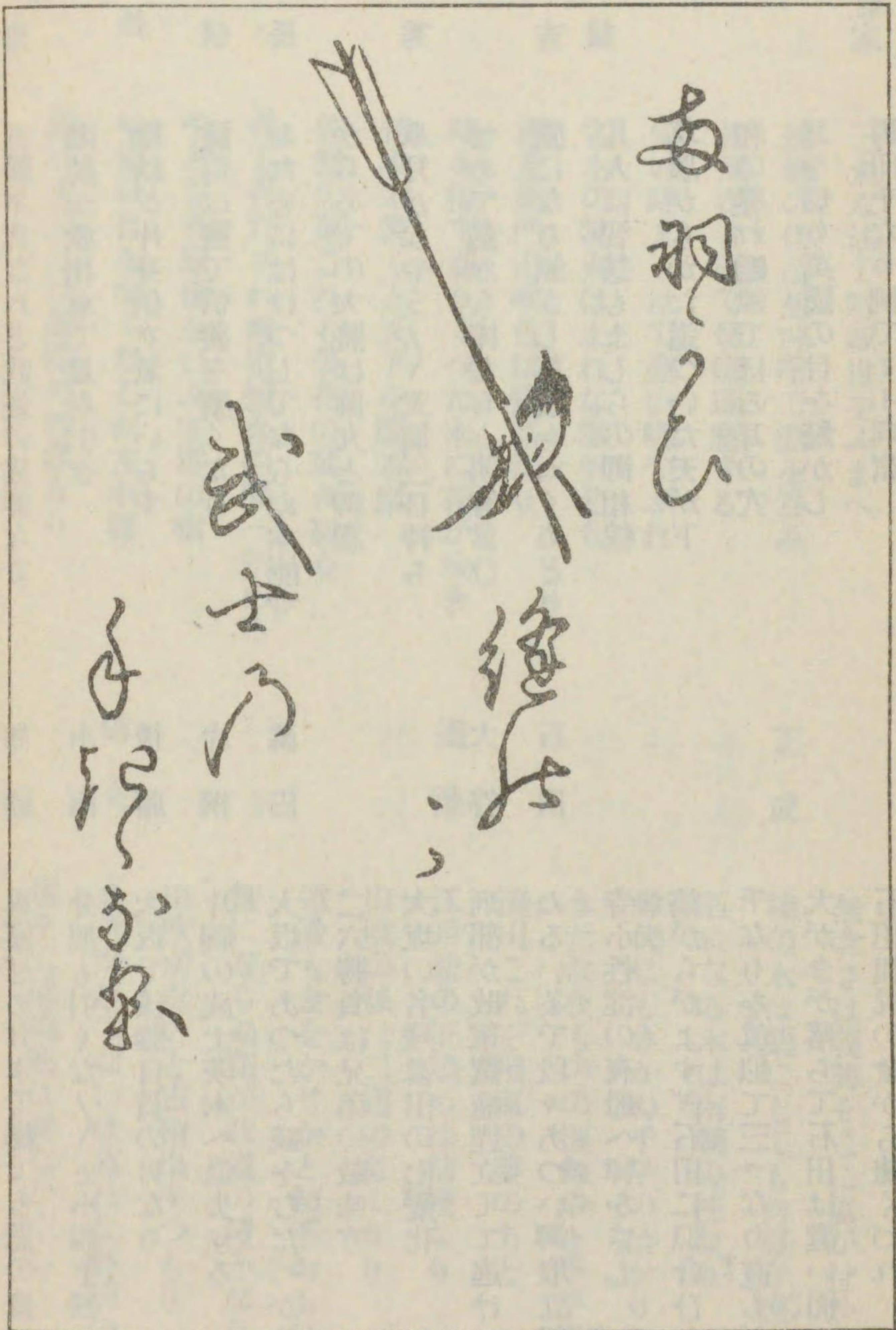
千なりを眞似て三ツなり直もがれ

耳を切り萬國の目を驚かし

大がきが落ちて石田は澀い面

馬印千なり桃でイイ理窟

石田組尻の金から總くづれ



曾呂利

キヤツ／＼と召すのに曾呂利々々々來る

不男サ若い時から奥家老

戰場

彌生端午を取りちらす檀の浦

槍持のくさめは鞘が身ぶるひし

白黒の馬で宇治川先手後手

それ首が早く玉よと船いくさ

巻物を見てもおへねえ負軍まけいくさ

農家部

奇妙な形で尻をふく鎧武者

高枕今寝返りの武士はなし

召物の裏も若やく御勤功

差料の竹へら武士のごくつぶし

御不勝手酔にも酒にも味噌一人

落馬笑ふな若さまの伯父様だ

妾が兄宇治へ落ちてくやうに乗り

名は姉のかげゆと申すにはか武士

娘ゆる生まれもつかぬ武士となり

武家雜

稻の花百姓の目によしの山
蚊遣火は村にけむたき長が門
稻刈つて天地にこはい物はなし
農民の手に豆が出来米が出来
稻刈つた夜は近くきく遠きぬた
村分限雑煮へかける花まぐろ
稻子飛ぶ田を刈る娘の裾模様
此の處小便たのむ田舎道
とぐろでもまきやれと村の初巳待

百工部

鎧師

鎧師の上手のしれぬ御代の徳

御靜謐工面のわるい御具足師

槍師

物置につかふ槍屋の縁の下

槍屋の丁稚親方にこかれてる

刀鍛冶

火花をちらしたゝき合ふ刀鍛冶

相槌に拍子の狂ふ犬の聲

研師

イイ研屋劔の山にことならず

コイツ大變研屋が氣がちがひ

大工

墨を打つ手は楊弓のはなれなり

流れ矢の來るは大工の家根ばかり

錐で氣をもみ鋸で息をきり

疊

疊屋の氣どり簞笥を重く持ち

柚

心ある柚まさかりの花を除け

柚が子の名を猿松と呼子鳥

から腹をかゝへて柚は猿を追ひ

石工

仕合な嫁だと石屋朱をつぶし

七輪も五りんも石屋彫つてゐる

木挽

日盛りにいびきの揃ふ木挽小屋

かはいといふ身で木挽精を出し

直な木を曲けて遣ふは船大工

墨壺の口も干上る下手大工

仕舞ふにも出すにも飽たゝかれる

夜なべには大工世繼のほそをいれ

間柱を大工手斧でおつぱつり

此の穴へへの五入れろと大工イヒ

じだんだをふんで疊屋絲をしめ

疊屋はおやしたやうに腕を出し

家根膏

口中醫者へ家根ふきの弟子が来る

家根ふきは舌でかぞへる釘の數

咳の出る度に家根やは損をする

料理人

庖丁もかれて大根も白髪なり

庖丁いたらず指を切る料理人

料理人ががした鳥を綱杓子

經師

經師屋は千代が蚊帳まで洗ひ張り

表具屋の數珠は諸宗に拘らず

陶工

大佛の衣紋のやうな瓦竈

面彫

我が目や口をひんまけて面を彫り

琴師

氣が付いて見ればをかしい御琴師

三味線師

たらぬ乳を灸で仕立てる三味線師

鏡研

三味せんやどこか調子のイイ男
貌を見ぬ日は腹のたつかみ研ぎ

煙草切

組伏せたやうにおさへる鏡研ぎ

染物師

駒とめて膝打ち拂ふちんこきり
ねた刃合はせてニツ胴ちんこきり

縫物師

諷をつく壻をと紺屋吟味する

鋏研

青い手を下げ明後日までと言ひ

髮結

摘草を針でほつてる縫箔屋

髪研

鋏研鴉のはしに巻いて居る

髪結

人の氣を結うて髮結流行るなり

髪結

髮結牀寄合ふともうたほばなし

髪結

髮結へちひさな救使三度たち

髪結

髮結の頭痛此のごろ風ばやり

髪結

下手話われ落ちにきと語るなり

髪結

下手話われ落ちにきと語るなり

講釋師

はなし家は世間のあらで飯を喰ひ

講釋師

下手講師内も兵糧せめに逢ひ

講釋師

八島ぜめ船を漕がせる下手講師

講釋師

なれぬ内手負ひのやうな紅とほし

講釋師

船橋も渡つて來たと菓子とほし

講釋師

足見せをして雇はれる麩やとほし

商家部

堂島の利運順慶町の人

貫穴へ庖丁いれる木藥屋

賣る度に數珠や改宗して拜み

香具賣先づ己が鼻ひこつかせ

つく芋で八百屋ニタ見の物がたり

似た山の鮫に呑まれる道具市

下り坂はうろく賣りの目がかすり

一合の油ぬき絲ほどはまけ

檜扇を見せて直をする干物賣

香の圖に寺中を歩行く豆腐賣

古椀を買つても喰つて通るなり

丁稚まで物知り貌の唐物屋

荒つほい下女で焼糺ぎ世をわたり

引札もされず棺屋の店びらき

爪先をかじつて足袋屋飯をくひ

齒磨が賣りこじれるとすらり抜き

聲色は囊砂を賣らんはかり事

女房へ日ばひにかゝる夜そば賣り

夜そばうり日なべ細工に子をこさへ

伎能部

儒

直な道字突きすの杖てでをしへられ
 明徳すての道捨な假名なのひろひ讀み
 道五ツ草臥れものに知れかねる
 掘出しもの最上は論語なり
 儒の道をたどりかねたる秦の闇
 貧學者紹の昌平の紋どころ
 生きながら土葬にされる秦の儒者
 うたゝねて儒者は君子の徳をひき
 何をきいても煮えきらぬ生學者なま
 論語よみねつかから賢を賢とせず
 へほ儒者の弟子二尺ほど去つてふみ

聖人

きかれては儒者も嘯うそぶく虎の聲
 急度した學者必ず女すずき
 少ないかな仁多いかなしはんぼう
 韻字より儒者借金を暮くにふみ
 聖人のへこむは天窗ばかりなり
 犬をよぶやうに孔子は召し給ふ
 鍵わらび腮をつるした首陽山
 兄弟が伸のびをする手も山わらび
 干たる君子あり蕨わほり見付け出し
 青臭い屁を掛合かひに首陽山
 聖人の釣つ汐しよりも時を待ち
 魚も魚針も針だが人も人
 機はたの意見で賢人のをさとなり
 地主だと孟子賢者になれぬ處

夷齊

太公望

孟子

孟母

機を切り孟母は短慮功をなし

醫者

貧民を御おじですくふ醫學館

銅盥くわんまたかと孟母引つたくり

南無キヤラタンノウコリヤアト孟母越し

今の醫者和漢蘭で盛るし加減
藪の中押し分けて出る御殿醫者

切つたのがいづれ孟子のとくび禪

嫁の脈老醫志賀上人のやう

柳下惠

振新を買つた氣でゐる柳下惠

橘柚黄ばんで藪醫者は青くなり

柳下惠但しは圖ぬけかも知らず

古方家の下し後世おそるべし

車胤

貧學の行燈蚊帳の切きで張り

人の命のをしけなく藪醫もり

螢籠えいろうやたらゆすぶる磨滅本

乗物やれといふ見えで醫者はのり

李白

五言絶句に酒の錢李白つき

藪醫者の運はてんほの皮をもち

詩百篇賦した翌日きらす汁

高運は藪から棒も長くなり

温公

しばく思へば幼子で瓶の智慧

村の癩藪から坊主よんで來る

司馬温公を野屎だと下女思ひ

釣好きの醫者絲脈が上手なり

神農

神農の腹下くだつたりけつしたり

上手にも下手にも村の一人醫者

腎藥をのんで神農またおやし

時に半禮醫者さまは苦い顔

書家

屁のやうな醫者藪いもへ度々見舞
 雨の日は醫者も小尻を出してさし
 焼付けの投げたをすくふ銀のヒ
 仲人をさせては至極名醫なり
 藪醫者に芽を吹かせたは風の神
 間に合はぬ醫者人魂に道で逢ひ
 原伊仙さまにはこまる木薬屋
 死生命ありと藪醫ぬかしたり
 手裏々々手表々々醫者あぶり
 小兒醫者脈を追驅けおんまはし
 大道で脈を見てゐる小兒醫者
 小兒いしや狎の脈から先へ見る
 二人前毒だちをいふ小兒醫者
 上足をとつて蒼頡字を造り

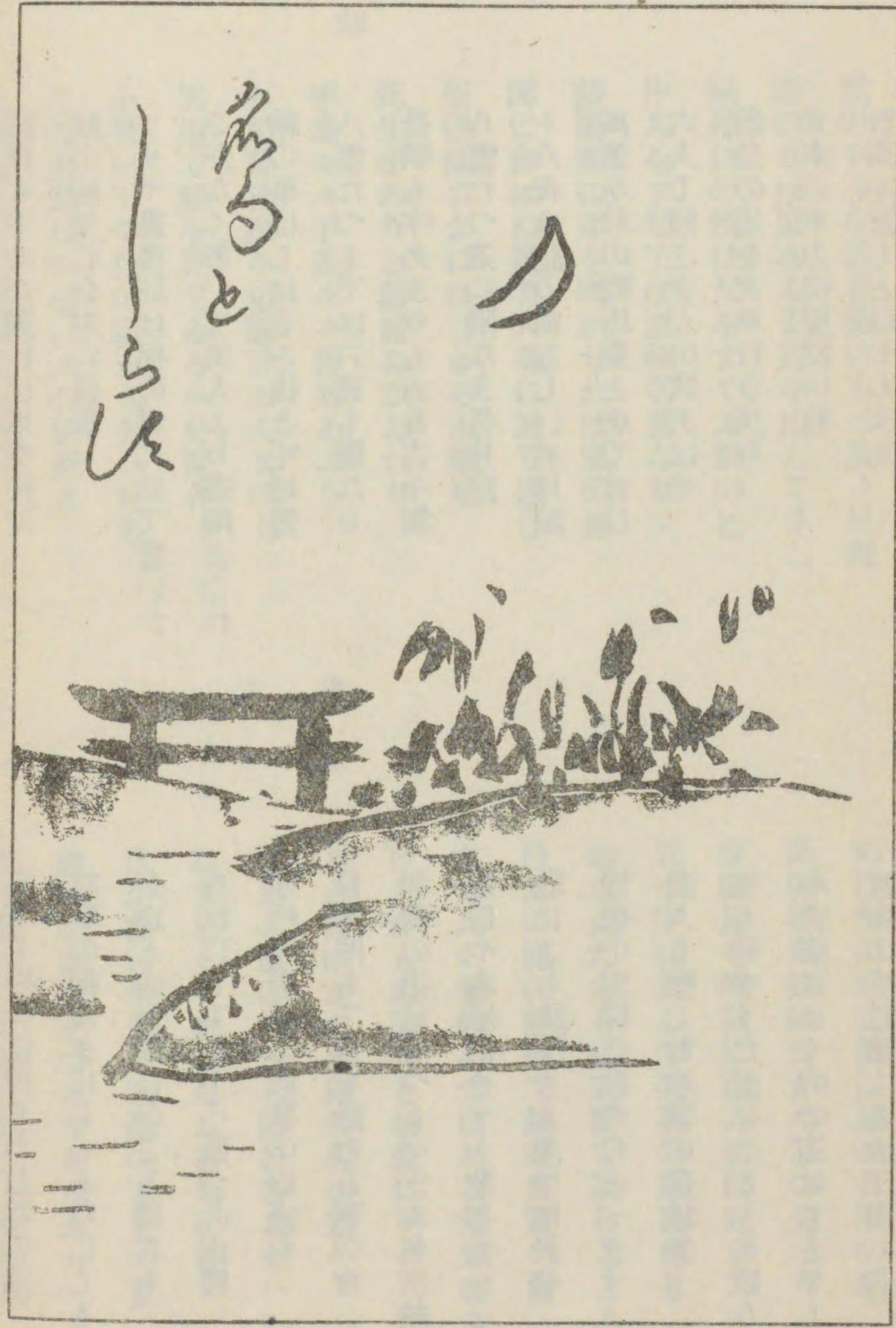
畫家

ぬけたのが立派に見える筆の垢
 師の御恩頭はかかぬ筆の先
 豆腐屋を時計に遣ふ村師匠
 五十字にたらず萬事の用に足り
 おらんだならば豆蟹で讀むところ
 ひんの能い懸捨かひすて無盡書畫の會
 たどんの看板あつばれな無筆書き
 けしからぬ師匠と娘急に下ゲ
 足と猪ばかり墨繪の雪の鷺
 禁足も鼠の繪から解けるなり
 ぬき足も一癖になる畫師の妻
 我が書いた鬼に大津のとしの豆
 應擧が幽靈ぞつとする價なり
 下手畫かき五徳に似たる龍の爪

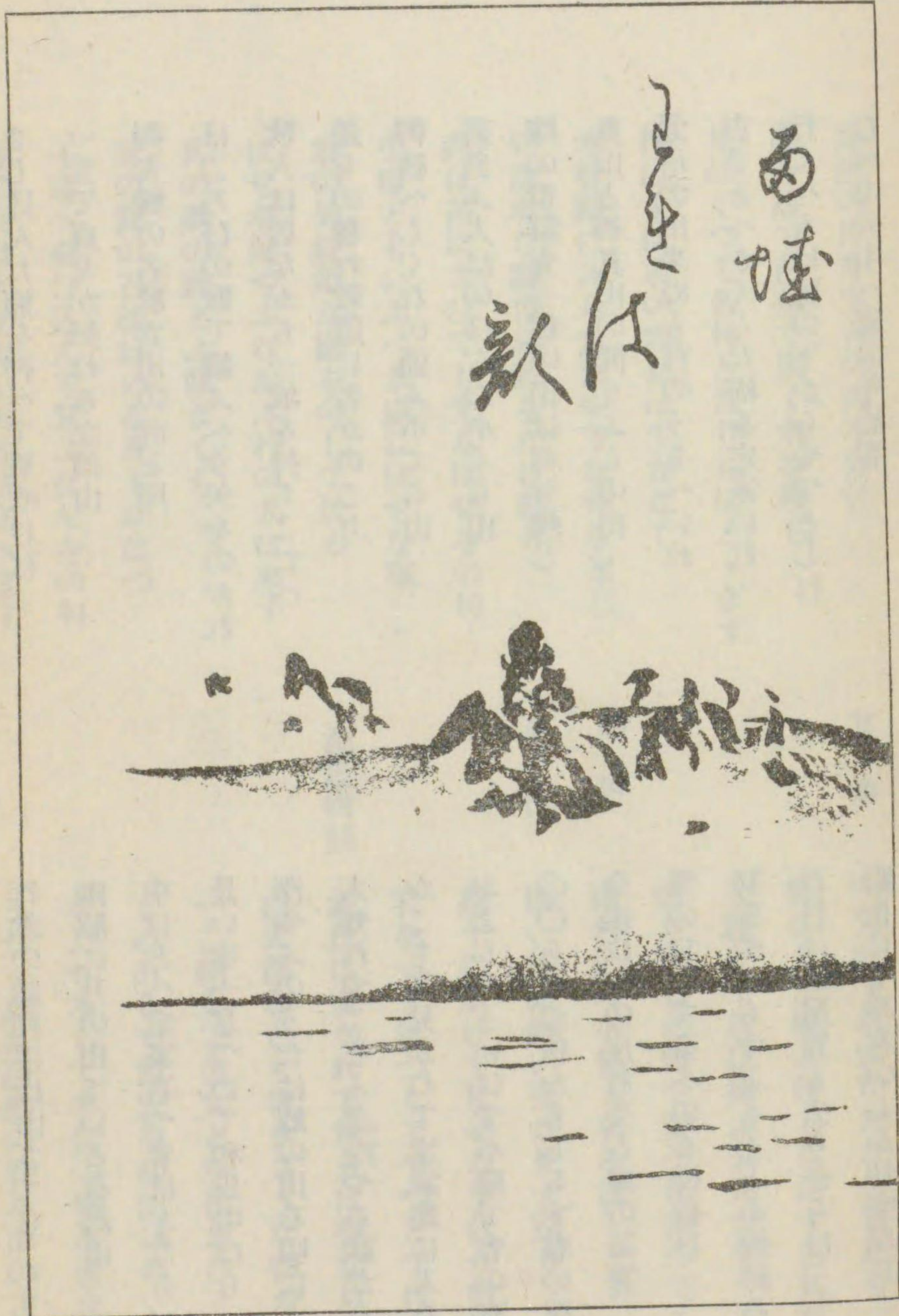
和歌

國貞も下女が顔には筆を捨て
 鰯の繪笠に合羽に後影
 コリヤ畫書屁は何の世に見て置いた
 さがなく書いて美人より畫師よごれ
 繪の事はしはきを後と毛延壽
 八雲たつまでは六義も臙なり
 長歌も字あまりもある古今集
 八雲たつ道に限なき名月記
 十六夜日記の前らしい名月記
 萬葉を和の野馬臺と唐で言ひ
 六人で頭こきんの歌あはせ
 敷島の道を文車行き戻り
 文車の車力提髮さげひら緋の袴
 百萬を重しとはせぬ文車

文車も横には押せぬ和歌の道
 詩歌の櫻なきにしもあれにしも
 奈良と志賀都にのこる櫻なり
 あれにして世上へ散つた山櫻
 頬杖で居眠る和歌の旅疲れ
 目を閉ぢて月を詠むる歌の會
 和歌の道にもつまづかぬ名所繪圖
 短冊や色紙はきく歌乞食
 歌によむすゝきも果ては炭俵
 短冊の雲間に歌のほとゝぎす
 農人も樂しむ和歌の落穂集
 文も見ずうたがひはるゝ名歌なり
 小式部にいくのの道はちと早し
 實頼の貌紅葉する大江山



舟
 也
 一
 与
 此



西
 垣
 款
 江

さし込んだ癩を押へて風吹けば

一言で貞女が知れる立田山

御夫婦の名歌立田の山と川

ほころびの歌で縫ふべき矢をのがれ

歌人は居ながら一城を持ちこたへ

遊女の譽れ敕選に名がのこり

御硯へしぐれの通ふ小ぐら山

薪負ふ人はのほらぬ小ぐら山

嫁の世辭先づ秋の田は刈り残し

奥山と香具山の間かヒふしの山

通用の出来ぬも百のうちへいれ

古さとへかくした梅を定家いれ

行くへもは膝の下からやつとしれ

むべ山の中へ嵐の年始客

行尊の話相手は山ざくら

兩脇に月の出ている有馬山

中ほどへ定家店つきほどならべ

長い事一息ついて和田のはら

深やぶのうたは蚊の出る頃による

人知れずこそと手をやる歌がるた

かこち顔見かねて定家集に入れ

およしよといはず小聲で春の夜の

〇〇られた後かもしらず春の夜の

合紙に句の反故交る庵の茶箸

雪の日に文臺へのる樽拾ひ

初雪やふらすとイイと小僧詠み

百員は紙屑買も去りぎらひ

辭世にも現在のしか切字なり

發句

翁

宗匠の片身朱青の肉を分け

藤を捨て芭蕉で廣く名を残し

見はぐつて名句となりしほとゝぎす

轉ばずば翁の雪見はてがなし

木曾殿にふられたやうな句を案じ

句達者な辭世枯野をかけ廻り

碑は苔にさびても光るばせをの句

手塚ともいふべき處にばせを塚

翁の句經師が黻をのして居る

ばせを庵やぶれかぶれの人は來ず

兵の夢の跡とふ歌まくら

牀の間の古池ほめる身もかはづ

干店へ飛び込んで買ふばせをの句

闇の夜は何が鳴いたかほとゝぎす

其角

一句吟すればゆたかの雲起り

疵にした蚊も押しながす名句なり

大騒ぎ干店仕舞ふ其角が句

張り出した紺や晋子に困つてる

兩乞の外小便も名を流し

廣い蚊帳廣い操が見え透り

蟲干に廣けて見せる千代が蚊帳

乳を一ツはづしてやつと千代寐入り

源氏にすぐれて尊たふときは葵なり

白式部等とも書きさうな物がたり

一二帖まで色文と所化思ひ

下心ありて源氏を和尙ほめ

寺入りをして手習の巻を書き

うたゝ寐に胡蝶の巻を夢の占

千代

源氏物語

枕草紙

一帖は月で書いても雲がくれ
くゝり目のイイは枕の草紙なり

遊藝部

徒然草

枕の草紙目の覺めた筆意なり
夜泣きを枕草紙に響めて書き
大事は障子より起る御教訓
榎の仇名三度目は蛙すみ
いたづらに泣きこま犬のあちら向き
武具は皆あらがねの土大根
外科へ行く鼎は犬にとりまかれ
鼎のをどり角大師などと響め
一曲かなで仁和寺の大騒ぎ
仁和寺の張札かむり物無用
馬のりの吉田が事も吉田書き
見る度にあかぬ雙びの岡の草

棊

聾に棊は勝たれたりほとゝぎす
棊仲間の禮儀もくろを譲り合ひ
見物も追立てられる下手の持棊
一目の負けそこら中撫でまはし
棊將棊がありて死に目につひ合はず
棊の留守へ間男打つてがへに来る
生死のあまたたびある下手棊うち
大こぶが出来たとへほ棊猿眼
下手棊うち南無三寶が癖になり
矢疵より關羽切られた手に困り
蚊は逃けて月代たゝく棊友達

相棊の争ひ初手ツからつかみ合ひ
灸點がふえてへほ棊はあつくなり
せき込んでへほ棊火入の火をつかみ
棊盤のそつばうくらはせてハテナ
わたりが付いて手を打つた棊の喧嘩
切られても檢校のいらぬ棊の喧嘩
作る時はまゝといふ棊見物
腰掛の角すゑに目を持つ棊の御供
棊の客の馳走に女房先へ寐る
棊盤まで女房は足を上へ上げ
飯處か飛車手王手を喰つて居る
將棊すき内儀の二歩に氣が付かず
月代にかゆみが來ると負け將棊
時過ぎて二歩を見付ける下手將棊

將棊

先はしの附木からつく下手將棊
指圖してけつくまごつく下手將棊
入王になつて肴や助言する
寺へ知らせてやりやれさと飛車をなる
御手にナゝ何と古手や將棊さし
下手將棊湯どのあたりで駒をなけ
將棊でもふんどしし至極きたない手
ふんどしをはづしはだかで王は逃げ
獅子が參るでこまらせる中將棊
雙六のいふ目を出して御寵愛
若様がまた雙六の關破り

投扇 投扇は薄手の猪口の持つこゝろ
蹴鞠 高足も無禮にならぬまりの弟子

拳

鼓にて四海の浪を打ち納め
瓦以後手練世上へ名もひゞき

尻引つからけ立向ふ下手のまり
有りッたけ股を廣げる下手の鞠

琵琶

へほけんはなぐらうといふ姿なり
琵琶法師聞き人は灰をかきならし

香の會總身の智慧を鼻へ出し
道樂の理に落ちたのが茶の湯なり

琴

べろんくは一門の物がたり
イヨ四絲と琵琶をほめてる大たはけ

石臼の後家は茶人の圍ひもの
鼻息で近目盆畫の山をぬき

盆畫 盆畫師の下女壁燈で盛つて見る

下手な琴仲達ほどに座中逃げ
白魚に烏帽子かぶせて嫁しらべ

南無大事大祕觀世が道成寺
小鼓は耳の蚊を追ふやうに打ち

鼓弓

品によさ桐の背板で爪をとぎ
峯の松脂は鼓弓の音にかよひ

手を笛に吹いて鼓の寒けいこ
御調べの上紫を御免なり

三味線

古近江にある八景は乳の跡
柳の風は三味線に通ひさう

七草は三味せんの手もこまるなり

三味せんのは秋を寄せつけず

おほえのわるさ杵屋でも餅につき

絲道も骨のをれるに山盡し

貌へ筋出してふつりりんきなり

絲のくる内三味せんで間に合はせ

三味線は馬皮でかけ出すやうにひき

猫は魔のもの沈んでる氣をうかし

息子の病六味より三味がきく

三味せんがツイ禍を引き出し

三味せんの間の手にとるちりれんけ

猿引の唄を恩地は急稽古

花車絲で座敷へ引き出し

浄瑠璃 義太夫の序は引導にことならず

尻目にて流れへ渡すしんかたり

泣いてほめるは義太夫とからし味噌

ハルト取る氣は太棹の弟子師匠

美人珠簾をまき上げて三のきり

かくし藝鶉の眞似をする明鳥

新内で親を反哺の明鳥

天神記身もしやうくにしてつとめ

蝶々や千鳥に化ける蛙の子

富士の狩場へ大磯の狐も出

二ヶの津も野郎帽子は江戸仕入れ

瀧のほる鯉で飛龍の威をふるひ

立者の疝氣金主の頭痛なり

三國一の大和屋は樂屋ひめ

闇仕合そこひが何かさがすやう

尾張屋の内證客の佐や回り

おそれかんしん股ぬきの傘のたて

見物も通を失ふ久米が所作

女形夫婦別なき帯をしめ

馬のしくじりさいおうの詫びですみ

花道の間ぬけは馬になられけり

馬の足やうく菖蒲草となり

馬の足出世をすると首が飛び

イイ役者すかして馬に刎ねられる

申し上げます花道へたれるやう

剃立てのどろばうは出ぬ藪だゝみ

見物も腹をかゝへる狸じま

出る月は下り入る月上るなり

龍頭に手をかけかるくくと樂屋番

幕支へ光次公の役不足

口上は何處がイイのかどつとほめ

突張つて舞臺で留める大道具

待つ芝居杜若ほど指を折り

奢つた客が清盛を茶屋へ呼び

酔ゑるが如く狂はせる焼酎火

小便はかすりちんこのさじき番

はんじやうサ芝居の土間を首で埋め

猫の皮なると靜まる鼠木戸

さてはあの月を張つたる道具方

大當り小町が來ても〇はなし

水仕合ひやうおもふ一の土間

大入で口上首を振つて居る

留場から泣く子をさらふわしの段

父

米の辨當よしかなと村芝居

村芝居尿かき爪もたたぬ入り

大根が馬で乗り込みの村芝居

村芝居おかるがきせるハタと落ち

村芝居芋屁山だとせなアいひ

村芝居こがしよしかな七年母

弓となる親は矢たけに子を思ひ

老いぬれば子のしんばうが杖となり

子を見る親の未來記はよく當り

勘當はゆるす親からなみだぐみ

はね炭に親仁の小言中たるみ

親仁の癩癩蠟石の絲が切れ

かね太鼓捨子の親の胸に釘

勘畧と大氣の間に母こまり

母

七生を母は後生と詫言し

勘當を財布でたゝく母の慈悲

おとつさんへは密々とあまい母

得こそはかさじ出直せときつい母

足音に戸を明けたまふ慈悲母神

母も子もきけん伺ふ朝がへり

母はたゞ無分別でも出ようかと

叱られて今朝出たまゝと母苦勞

硝子でなくても母はあぶなかり

仕盡した意見位牌を母は出し

身が重くなれば軽くと母ねがひ

ちんまりと寐やれと母の返書

乗初めに馬の手綱を母傳授

してあとはどうだくと里の母

繼母

もめるのも紙子のゑさと里の母
 化けて出てたまる物かと里の母
 本の母朝寐の息子掃きのこし
 出ぬ乳も泣く子の口へ箸やすめ
 剃刀で寐た子の小判母盗み
 井戸端へ子の行く夢に母の汗
 繼母でいたしにくいと娘言ヒ
 袖の蜂さすが繼母のはかりごと
 まゝ母のにくさ戸棚に毛をはやし
 嫁安堵司馬徽がやうな姑なり
 姑のきけん幟で立て直し
 言葉肉とりくゝ嫁をやせらかし
 魚と水とをにらみ付け御看經
 姑婆々ヤレ堂參る講參る

子供

小姑 小姑が嫁の浮名のゑほし親
 産 御里まで馬もはやめの御注進
 御目出たき武藝が二ツ用に立ち
 御安産蘆邊をさして田鶴の聲
 御目出たさ婆アさま跡のまつりなり
 歛をかしながらちんこかめめツこか
 似せ首をしやぶるが乳の呑みはじめ
 たゝかれず赤子の顔の蚊のにくさ
 酒ならば肴の心かた乳ぶさ
 ねんころで寐せちんころでしいをやり
 不行儀なまんまオヤ／＼ちんこまで
 背中でも虚空に拜む愛らしさ
 あつためる内に火燵へひよぐらかし
 屋根の羽根餌さしに頼む頑ごんま是なさ

姑

大だらひ中に子供の一ト世帯
 眠る子の手から這ひ出て螢逃げ
 愛らしさ春待つ指をやつと折り
 あの御子の御子がもうはや此の御子
 おつかアヤ尻のはうから風が来る
 やるそばに飴しやぶつてる愛らしさ
 辨慶の道具も七ツまでかざり
 帯ときの祝儀の酒も七ツ梅
 子は親の爲にかくさん尻のあざ
 縫上げの鶴も羽をのす御成人
 手習子疊の墨のさかひ論
 水入の布袋も腹がすくと晝
 いたづらも自在に遊ぶ御縁日
 京までは手を引いてゆく手ならひ子

乳貫

盲人

筆のさやはづして首をかきならひ
 小僧の私慾食傷で露顯する
 乳貫ひの度に勝手をよく覚え
 ちもらひの覗いて歸る若夫婦
 金を貸す一ト間隔てて琴の音
 檢校の御耳通りを座頭する
 引越しに座頭はさぐり草臥れる
 目鼻を明けぬと催促に座頭来る
 座頭が鼻アびんづるの氣でくらし
 かんのイイ座頭夜這ひも仕かねぬ氣
 座頭の幽靈うろたへて晝間出る
 角兵衛獅子ほどに小座頭反ツてたれ
 立田山夜半にやこまるひとり者
 そこはかとなくかきくらす獨り者

獨り者

居候

我が物で自由にならぬ朝の〇〇
 ぶりちうふくりもてあます獨り者
 ぐにや／＼と内證で濟ます〇人組
 御預ケと號し立派な居候
 居候薪のそけで低楊枝
 組打に太鼓をたゝく居候
 居候うぬが倅で手をあぶり
 居候此の鼻アめと思へども
 居候七十五日壽をちゝめ
 佐太郎を年中喰つて居候
 居候つらあてらしく雪を喰ひ
 や、餓鬼道に遠からぬ居候
 鷺と烏が泊ッてる馬喰町
 名所より我が家をほむる旅歸り

旅體

盜人

旅歸り草鞋で覗く枕蚊帳
 出しぬけにかぶるは店の三度笠
 木枕は石部淺草石まくら
 名物は附け飯盛は喰ひかくし
 座禪豆飛脚の膳を飛び歩行き
 折節は空論もきく木賃宿
 ごまのはひ金に勻ひはなけれども
 豆の樂を持つて來る旅の留守
 女房にちと恙ある旅の留守
 日に焼けた顔へ女房泥をぬり
 束帶の中へ袴でまぎれ込み
 大罪の賊天麩羅に行はれ
 五右衛門は門口などへたれぬ奴
 賊の油あけ晝とんびなどでなし

乞食

病人

無筆のどろばう明店をこじはなし
 どろばうは左ねぢりに錠をあけ
 晝のどろばう入口で屁をたれる
 無念骨髓盜人の屎ざらひ
 菅笠へ看板をかくかなつんほ
 劍菱を引つかけようと乞食しやれ
 五體の重り片荷する疝氣持ち
 痛い事移つた疾の根をおされ
 玉に疵より六かしい〇にきず
 瘦せがちの灸はときんの處へする
 痰瘤は皮肉の間の土龍
 過ぎたるは虚し及ばぬは咳が出る
 飯櫃へ夜這ひにかゝる病上り
 あつい恩一生ぬけぬ灸の跡

灸

幽霊

人魂

切艾ほぐした殻は獅子の襟
 もつとりきみなと三升をすゑてやり
 灸の背中を野馬臺のやうにふき
 穴うらめしやと少將迷つて出
 土左衛門の幽霊みんなふくれ面
 韓信が人魂土をすつて飛び
 頓死だと見えて人魂矢の如し
 羽生村人魂ひよくり／＼飛び
 上戸の人魂やつたらに跡を引き
 絲を引く人魂納豆賣だらう
 人魂の尻からぬける首縊り
 越後の國はふと魂はひは／＼し
 一天四海無異とひるきりんの屁
 燕の天窗へひゞく二階の屁

屁

湯の中の屁玉顎の下へ浮き

尿管

鼎より珍事尿管がぬけかぬる

七曲の屁玉ひり出すとぐるへび

尿管御持參京の人長ばなし

下女と屁の對決をする居候

二便所

雪隠の家根は大概への字なり
ちやうど屁が出て咳拂ひ止めにする

すかし屁で百萬遍の中たるみ

かぐ鼻もこたへかねたり閻魔の屁

羊の屁たしかにきなつくさからう

神農の屁は道修町通るやう

只の風にはましならめ畠の屁

其の時は五臟にまとふかけまの屁

汝等は何を笑ふと隠居の屁

互に顔を見合はせてすかしたな

屁花をちらしひり結ぶ不禮講

ふとんの内のわるじやれは又すかし

屁をひつてすわり角力は割になり

滑稽發句類題集 二編下卷

戀部

娘

下紐の關守迷ふ戀の道

水鶏とはおもへど明ける戀の闇

紙捻かひよの犬も煩惱の文の端

胸の火を一筆しめす硯水

目の毒と知りつゝ見たき雪の肌

むねの火は耳から吹くと顔へもえ

ほころびて絲脈を引くふてい奴

線香も戀には尻をつねられる

いはすかたらず我が心目で知らせ

物思ひよつほど聾じみて來る

ほれたとは少しの事で言ひにくい

先づ目と目夫れから手と手口と口

額から汗を流して口説いてる

仕しつひ付よく娘辻褃よくそろひ

伊勢屋の娘から木地で美しい

なぶられて娘茶臺をなでまはし

ほんのりと娘返事を顔へ出し

孝行な娘わが身をせんじさせ

飾りやは娘のひいき知つてゐる

借金かひの淵へ娘の人柱

鳶の子さらはれさうな器量なり

口とりの山葵もきいた娘ぶん

蚊帳へ蚊を入れる娘の髪かみの出來

虚空に高くとまつてる鳶の子

顔に火は燃ゆれど娘にえきらす
 足がまがらうと娘の下駄を借り
 大きにおせわ十六がどうしたえ
 娘のかむり糸を引く奴があり
 じだらくな帯はゞてのある娘
 もう娘いつか覺ゆる生田流
 娘の木ざう拜んでも口説いても
 豆に花咲くと小豆の飯を焚き
 茶がへしのこひで娘は圍ひもの
 縁遠さ桐のするまで廣くなり
 内曇りほとは○○○はえかゝり
 縫上げをおろすと前がほころびる
 親たちも引きすり娘餅に搗き
 火の車娘地獄の責めに逢ひ

子息

はえかゝる豆のもやしに蟲がつき
 樟腦のない箱入にむしが付き
 硝子びんごうを小僧が割つて疵になり
 おちやつびいつけひも付紐とれば帯をしめ
 其の氣更になし伯父さんあれおよし
 諸肌おしぬぎ咽笛へばつちり
 數寄屋から前土器のすく娘
 戀口のゆるい娘はさやばしり
 して見れば娘もいたしかゆしなり
 不仕合箱の娘を駕籠に入れ
 娘の病氣黒猫の椀にわけ
 娘野暮兄の友達一人へり
 饅頭を他人にやるは惜しいもの
 塞翁の意見も息子馬の耳

は、きぎをだまし花散る里へ行き
 日が入ると子息かうもり著て出かけ
 駕籠で行くむすこ親仁のかつき物
 鰻承知あつたまる氣で息子よひ
 きんを取る手は番頭の助言なり
 御宿はとふたち、くくと息子しやれ
 首ッたけはまつて息子およぎ出し
 麥飯のところ息子喰らひ込み
 硝子をもらつて息子だゝが止み
 親の目を盗んだ子息鼻が落ち
 錢の無い息子近處がさしだらけ
 帯代は追付おつけしめる印なり
 ぼゞ曆學に達してゐる結納や
 仲人 仲人は四海の浪をぐつと呑み

結納

滑稽發句類題集二編下卷

婚姻

硝子は謹の見えすく仲人に
 橋かけの夫婦渡すを見てひらき
 高盛は家の根つぎのニタ柱
 白鷺が鴛鴦になる夜の恥かしさ
 御祝儀のあとが種蒔三番叟
 婚姻にア、イイオ、イイと諺ひ
 嫁雪をとればあられを壻がとり
 われたのがお里へひゞく御目出たさ
 新枕覺悟のまへをやつと明け
 孝に身のやつれた嫁の美しさ
 根びきした松高砂の氣に入らず
 折鶴の五臟へたらぬ嫁の息
 鬼の留守嫁さごろもの洗濯し
 左から涼しい風も嫁の孝

嫁

朝顔を見てる顔へ嫁茶孝
 風をれに小柳で嫁なまめかし
 月の帯花嫁雪の肌へしめ
 親風を柳にうける嫁の孝
 四角張り岩永できく嫁の琴
 移り香を胸にたゝんで嫁仕舞ひ
 かにんの胸親になで子にさすり
 まだ見ぬ奥の花嫁を客覗き
 酒の肴に嫁の出すふき茗荷
 來た當座もしの出かねる花嫁子
 娘の冷汗姑の生きた夢
 姑死に嫁片腕を繼いだやう
 姑がやいて生物を嫁喰はず
 嫁手柄月雪花を内で見せ

玉子を紅絹にくるんどく嫁の肱
 三度わが身をかへり見て嫁支度
 振袖を又著ようではなけれども
 あぢな嫁息子も産むは孫もうむ
 むかひ風嫁合はせてもく
 嫁は氣で喰つてる箸の上けおろし
 本店に引きつりのある嫁をとり
 いぶされて嫁蚊のすねのやうに瘦せ
 穴かしこ笑つて嫁は叱られる
 價千金の花嫁しやれたもの
 其の當座朝寢の前となぶられる
 蛾眉をひそめて産月を嫁案じ
 行燈の無疵でるるは嫁の疵
 まんまるう數へるやうに嫁は喰ひ

唐の嫁楊貴妃紅に蛾眉額

きれぬ鉢に容顔を嫁くづし
 嫁病氣そだらうといふ病なり
 後面ほど姿見に嫁身ぶり
 みんな留守犬のつるむを嫁ながめ
 もめる筈紙子ざはりのあらい嫁
 洗濯のたらひは嫁の力もち
 かりて來ててうちくを嫁指南
 眞裸かほの道具はよくそろひ
 蛸壺といへば漁師の嫁わらひ
 泣く嫁の側でたんすのもらひ泣き
 望まれて嫁あら撥を出してひき
 庚申を嫁の聞くのは耳にたち
 嫁の年捨鐘ほどは謠をつき

花嫁は口を苔にしてわらひ
 山がなめ川がかみ付き嫁なんぎ
 とんだ嫁貞女を捨てて孝を立て
 ア、イイくも嫁は口の内
 みどり子が出來ると嫁は夏柳
 松茸の食傷をして嫁は吐き
 八瀬の嫁首の骨から先づ見立て
 金がなければなんのいなう暮の嫁
 耳揃ふ金で聾の嫁をとり
 暮の嫁鳴聲鶴に似たりけり
 お祭に鼻で笛ふく持參嫁
 暮によぶ素槍の鞘は白たき
 身上の吸口に袖さらひ込み
 支度金笑くほの外は無疵なり

婿

大丈夫婿親船の楫をとり
 徳むきと店ツさらしを婿に入れ
 ふは付いた娘に婿の押しがきき
 朝歸り婿しばられぬ許りなり
 あらすりこ木といふ婿はめつたなし
 婿のべらほうわたくしがふきませう
 美しさ叱られぶりのイイ女房
 政子形さした女房は大あたま
 置物にする女房は獅子ツ鼻
 むつまじい夫婦は膳でむしり合ひ
 下齒がすばつてくひちらかしが止み
 水かけん亭主産處へ聞きに来る
 鍋の尻許り焼いてる仲のよさ
 附木ほどもえて靜まる夫婦仲

夫婦

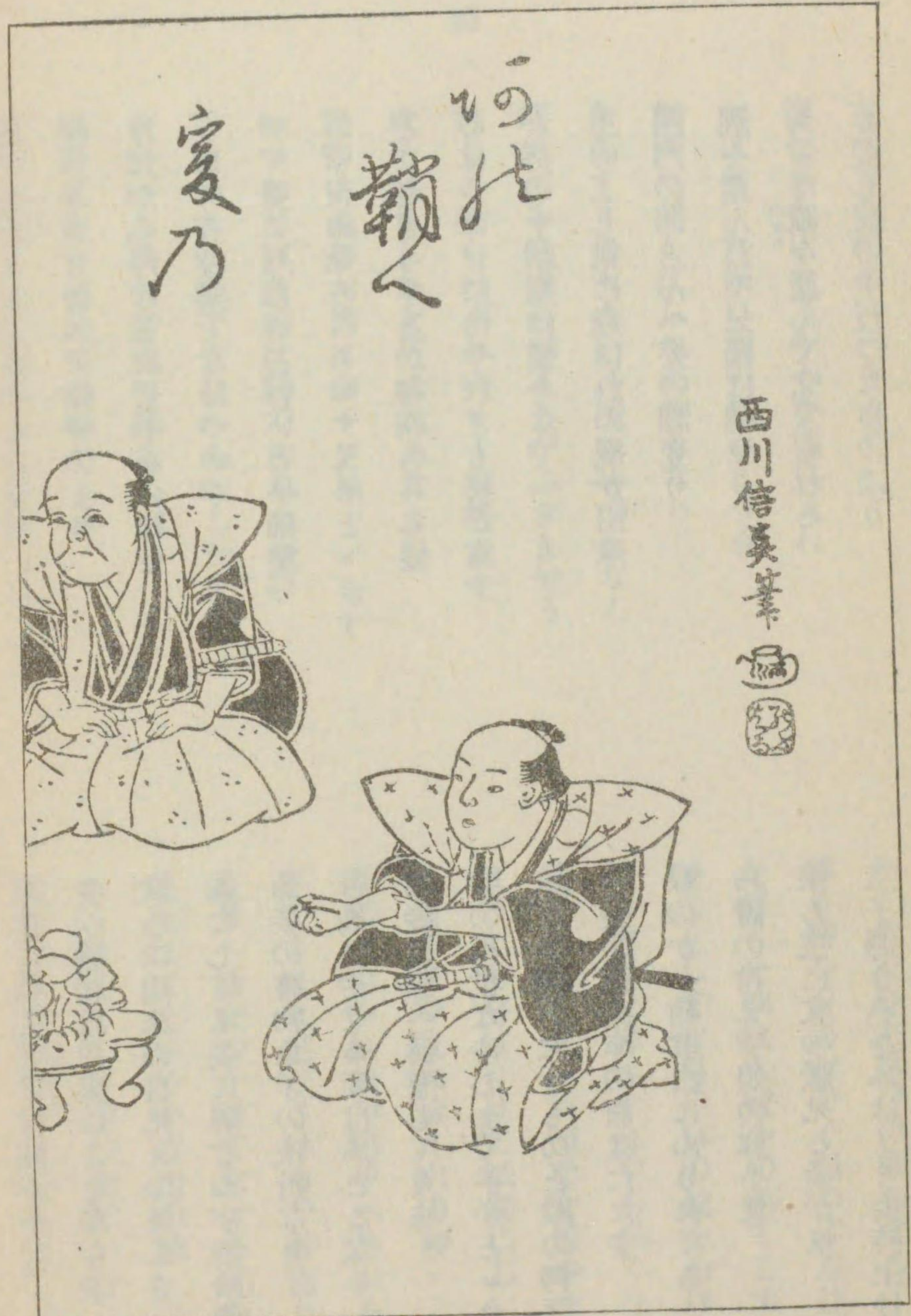
わが内で亭主忍びの術をする
 移り香を女房むごく引つぶるひ
 女房も今朝は火熨斗のあてこすり
 ぴんとして女房戸口の錠をあけ
 やき餅で女房ふくれてあつくなり
 鐘から出たといふ面で女房やき
 里の文女房目付けて紙燭にし
 社領持參で荒れ給ふ山の神
 りんきのそれ矢戸障子へあたるなり
 手がさはり足がさはりで仲直り
 長刀へ槍突つかけてむすと組み
 朝見れば枕へひかる指の跡
 かうかえ／＼と○○上でいひ
 扱その次の輕業は○○上

妾

内でした、か○ながらと女房いひ
 生水をとり合ふ夫婦仲のよさ
 月だから拜むと女房手を合はせ
 女房の夜泣薬でなほつりの
 ナア鼻ア死ぬほどいと早桶屋
 いく夜寐覺めにアレサ又ほとゝぎす
 どこをどうするか毎朝ちらし髪
 心はやたけにはやれども坊が寐す
 女房の千秋樂は髪をなで
 玉のこし親に逢はれぬ疵が出来
 龍門のふとんへ妾の瀧登り
 鯉を産んだで兄様は瀧登り
 お妾は幟のぼりを産んで立てられる
 お妾も尻のすわつた初のほり

草餅を産んだ妾は胸がやけ
 妾が雛相馬内裏にことならず
 試みの出来ぬ目見えの美しさ
 茶にしても妾に解せぬ宇治拾遺
 お妾の書物象牙の技折なり
 百姓はやせる妾はふとるなり
 お妾は腹へ鉢巻して力味
 妾の出世なけしまで手がとゞき
 一妾は得がたきものと殿の御意
 一妾の權萬卒の齒はたたず
 殿のかへ鞘眞白にぬりたてる
 内證の冷えて娘の寐小便
 來る度に文の脈見る妾が里
 玉子酒きみをふは／＼妾持上げ

西川信英筆



これも一藝夜軍に泣き妾

御感な、めならず妾の○○けやう

圍はれの針は世間の口を縫ひ

別儀ある圍ひ旦那を茶にしている

水牛紅圍と御局ひとり笑み

引出しに夫もこもれり長局

紛失の品はいはれぬ長つほね

鼈甲の切れ味も湯にかけんあり

中のイー角つき合ひは長局

お局のあしは○○○○夜の友

一生奉公かゝとに蛸が出来

かゝとも談合局うさはらし

あつかんでぐつとのほせる長局

毒と氣の付いたが年のより始め

長局

老人

後家

どの貌もうるさがられる尙齒會

新造ばなし聞きあきる尙齒會

玉子でもいけぬと隠居爪をとり

茶屋へ来て○○たと隠居くやしがり

隠居のは逆さに讀むと同い年

チト押しがつよし梅干水を揚げ

張合ひもなく提灯の肥後はぬけ

梅干は新造の咳にはき出され

人がらもたぎつた後家の茶せん髪

茶を立てるほども残さず思ひきり

幟竿後家は杖とも柱とも

只酒でくゝと後家は思へども

譯ありて後家朝早く雪をはき

寺參り道をわすれて後家迷ひ

孝行な養子は後家を高枕

持佛の障子立てこめて後家○知

やにつこいやつ後家張つて大はたき

魂棚の鼠若後家飛び上り

佛より後家には施主がたと付き

若後家の便りになつてやりたがり

君ならば手鍋も上げる筑摩後家

若後家のむじつ喰つたが病なり

後家おもへらく香奠のよこしやう

後家の腰あんま氣ばかりもんでゐる

かたい後家だと馬鹿和尚土砂をかけ

解せぬこと若後家指を五ツ折り

釜を買ふ茶筌茶臼で水こほし

密筒を握つて後家の思ひきや

乳母

承知院ともいひさうな仇な後家

そんなら出る迄後家を口説きつけ

ナニ○すぶんさと後家の太つ腹

人の己を知らざるを後家うれひ

得手勝手後生の爲と後家○○る

あの後家めイヤぬつたとはくゝ

今は心もみだれ候後家つくり

下る乳母晝寐の貌へいとまごひ

若殿の駕籠に御乳母は重い事

乳母が色豆でつばうでうたれてる

子供をば手に葉に遣ふ乳母が戀

濱松の生まれで乳母は賞美され

大風の噂女護の乳母は待ち

三世相見ればお乳母は穴の熊

下女

物喰ひも我が爲ならぬ御乳の人
 乳母晝寐山伏ほらの貝を出し
 張飛が欠伸したやうに乳母〇〇し
 鏡山下女が忠義の天下一
 天に口あり鳥鳴き悟る下女
 段々と葛籠の孕むかたい下女
 天杯を下女もいたゞく宵節句
 下女が戀いまだ定まる殿もなし
 もむ足を躑にして下女は船を漕ぎ
 下女が文おらんだ文字を豎に書き
 蜘蛛が下りたら讀めようか下女が文
 皿を割り下女早まつて欠落し
 焼芋を温石にする下女が癩
 雪の朝雀のやうに下女ふくれ

下女のはれ奈良から墨の肌がすき
 ハイと下女たすきをくゞりゝ出る
 茶や辻はどの横丁ととんだ下女
 前垂は下女がおいどの化粧がは
 下皿の九年酒で下女夜なべなり
 下女そさう南無阿みだ佛鍋の尻
 どの位から美人だと下女まじめ
 満面に笑みをふくんで下女承知
 荒神がたゞり三ツ子を下女孕み
 をかしさは下女も情を賣る氣なり
 御二男に下女初物を奉り
 夜泣きする下女〇〇が〇の餅
 おきあがれ下女ちり紙を〇でとり
 下女は袋に納まつてア、あつい

どろぼうを又ござつたと下女思ひ
 木挽の腰に餘念なく下女みとれ
 地にあらば家鴨の鳥と下女誓ひ
 張〇紛失下女を呼び内吟味
 子〇〇いが承知ならばと下女ぬかし
 厭ならばいやといやれに下女へ、
 下女腹へ鉢巻をして大頭痛
 どうしたか下女〇〇〇〇を鹽みがき
 傍若無人日這ひ来る下女が室
 鮫肌の下女替鞆に用ゐられ
 そつた胡瓜をつくゞくと下女眺め
 下女が智慧絲ごんにやくを〇へまき
 下女が文返すゝもはつて來な
 女房はふさがり下女へ方をかへ

村の戀

口説かれて唯々諾々と唐の下女
 白酒といつて是非なく下女はなめ
 旦那に紛れ無御座と下女が宿
 上を學んで後家の下女所化に〇〇
 御内儀の夜食すこぶる下女かばひ
 何よりもつて安う候下女承知
 下女きいてゐて川柳はにくいねえ
 麥の青葉に風あふる村出合ひ
 村出合ひ小山田太郎見付け出し
 猪小屋へ間夫を引込み村のぬれ
 草刈笛で呼び出す村の色
 畑の中で種を蒔く村出合ひ
 麥の陰などといろりへ書いて見せ
 簀の子の〇〇にこりはてて麥畑

野の出合ひ鴻鴈つらを見だすなり

野の出合ひ芋がり行きて蛸をしめ

まぢく馬の見てゐる麥畑

麥畑そば切り色を〇〇〇あひ

麥畑手杵と臼とちくるひ

見付けられ麥へ〇〇〇をかけて逃げ

麥畑のし、武者に荒される

迷ふほどだがひに闇のみそか事

間男と知つて合點の旅がへり

彼の人と亭主は夢にだも知らず

間若衆は尻が割れても高が知れ

〇〇て逃げぬいて亭主が追ひかくる

金五兩取るべらほうに出すたはけ

五兩戸棚へ寐かしく馬鹿亭主

密夫

去狀

音高しおさわぎあるなハイ五兩
押入できけば亭主と又〇〇め
一分だめしのやつなれど五兩とり
其の五兩にて前さしも〇〇いやつ
亭主となれ合ひは百で五兩とり
もやくの關を通して五兩とり
間男も忌がかゝると悪くしやれ
門の井を外から汲んで内がもめ
唐やうの三行半は盆の水
一も二もないと三行半を書き
去狀のそばでにこく數珠をくり
去狀をいたゞいてとるにくらしさ
癡病の藥馬にも乗つて見る
ゑんこうへ手を出し亭主ひつかゝれ

月の障

月流

仲條は月を流して日を送り

穴釣のやうに療治のさし藥

中條で鼻をならして吐られる

中條のはれにふんどし下女ねだり

鳳凰は首大尾は夜鷹なり

位には松姿には柳なり

籠を出る鳳凰桐の光なり

親のため我落ちにきと女郎花

良雄と祐成忠孝の女郎買

道哲にきけば極樂西の方

りんきする腕に煙の伊吹山

待人にこんの卦狐ふさいでる

帶をときなんしこいつはめたもの

北國の阿彌陀御光を質に置き

君君たらず新造も間夫狂ひ

船底の枕で客の楫をとり

寶の山をふりむかぬ郭の張

もてた報いで身上がもてぬなり

早い事みどりが松の太夫職

どうしても目の寄る店の玉ぞろひ

こんな腰ありと出口に植ゑてあり

彼の面此の面に氣の迷ふ格子先

吉原の松は荒神さまぎらひ

千人の枕にくい一字命

命へ灸は蟲の根を切る仕かけ

爪の火はしめしなくん

祇園町でも御祭に鉾を立て

比丘尼でも居さう墨染撞木町

賣色

總體勤めの奉公は尿瓶しびんの氣

川竹の藪にも孝のものがあ

かんざしの足くたびれる紋日前

ほれやうの振袖をする姉女郎

父母はたゞ病を患ふ安遊び

色客の翌日おはぐろが舌へしみ

曾根崎新地天神の流れも出

巻紙も瘦せる苦界の紋日前

傾城は佛と見ると拜みんす

物くるはしく候ぞ紋日前

一札で借さんしんで金が出来

證文で借りては文へ金を借し

女房はお釜とおもふ染の介

漂泊の女房を寄せる帆立貝

いたくない腹さぐられる面白さ

どの謔が本の亭主になるだらう

分散のものは四角な玉子より

ひまな事茶挽の貌も極揃ひ

しやちこばる傾城佐渡の土砂を掛け

茶を二ツ持つて寐に来るむまいやつ

年明けはうしと見し世を戀しがり

寐て果報松の位に新造なり

水にする起請もかたい紙へ書き

別れの背中約束を叩き込み

席正しからず引け四ツを近き店

江戸ッ子の膽鳳凰のゑじきなり

暮の文ほしくと留めぬばかりなり

齒を染めてやるは實盛ほどの客

身替りのちつとも似ぬは女房なり

年明けはだしがらをくふやうなもの

七重八重著るはつ花の郭なり

片腕になる客人は手なしなり

にくうざんすとつめられる面白さ

只一人茶と三味せんを引いてゐる

主わの子でざんすが産ませなんすかえ

硝子を買つてほこんと穴があき

新造のりんき片鬢引きへがし

新造はしびり薬を呑んだやう

新造のわる留め入齒引つたくり

丸山の新子唐饅頭のやう

丸山へから撫子の種をまき

飯盛も陣屋位はかたむける

藝者

喰ひかねる親で娘がめしを盛り

京は君嫁は大坂に江戸は鷹

龍宮の夜鷹は昆布をかへて出

夜鷹のしれ者鼻塚を築く處

夜鷹の尻と白玉は寒ざらし

こぶしほどあるで夜鷹をのり出させ

安いもの四はいの蛸に買ひ當り

黒鴨に羽合をする夜の鷹

ころび疵乳が紫色になり

安藝者撥まで悪くすれたやつ

足本を弱く藝者の母そだて

ぬからぬ藝者足本を見てころび

藝等御覽に入れまして扱ころび

轉んだかしてぺんくの音がやみ

禿

世を捨てた如くに藝者世帯持ち
 ころぶのは蜜事ひくのは四ッ乳なり
 客よりは先へ來てるる安藝者
 孝行にしなと新造いやがらせ
 寐小便禿布とんの堺論
 サア寐やといはれて禿よみがへり
 禿が返事筆策の調子なり
 はき寄せるやうに禿を寐せて置き
 早打の禿アノねで息をきり
 ア、イイといい細殿を女の童
 くすぐると禿丸めたやうになり
 なきにしもあらず禿にしてそだて
 あたらようがましく禿耳に口
 せめてもと禿を寐かす精進日

牽頭

旅賣色
 四筋をかじり給ひねと下の關
 割牀を几帳で仕切る下の關
 下の關刀自に恐れる女の童
 下の關癩癩で呑む冷九獻
 むくつけき男はいやと下の關
 催馬樂で格子をそゝる下の關
 平の飯盛といひさうな下の關
 新渡の蝨丸山で背負つて來る
 通辭兼帶丸山の若いもの
 細い音は絲ふとい音はねだりの事
 あの藝者人魚を喰つたかも知れず
 丸山の藝者ラツバもすこかじり
 山明きは花の王さと太鼓持
 くれるかと思へば鼻をちんとかみ

遣手

脈のある内は大鼓も見放さず
 何處となくにくい姿を遣手もち
 きせる片手に膝立てて遣手にじ
 鳳凰の羽蟲を遣手とつて捨て
 月の郭一步はにくい姥へ捨て
 籠よりも槍の一步は高いもの
 子のうちは遣手も親の祕藏なり
 四會目は遣手やつぱりこはい貌
 遣手とは假の名實はもらひてえ
 人品骨柄あつばれな夜具の番
 コヤ喜介身は頼兼に似てをるか
 孤燈に向ひ沉吟す淺葱裏
 御用狀相濟むまでは身ども寐ぬ
 似けなきは武士の弓手にかくし銘

朝歸り

尻を抱き身が武士道が立つべきか
 癩を押せとは過言なり身共武士
 をれる許りに女郎花まだうせす
 思へばあの鐘うらめしやまだうせす
 振袖の宅番の來るけちなばん
 死相をさとり名代もより付かず
 名代よ我もさびしいかどつか行き
 時は今一步すてたか牀の番
 狛犬をかんだやうなけちな晩
 朝がへり先は珍重親父留守
 朝がへり段々内が近くなり
 我が内へ聞者を入れる朝がへり
 朝がへりたのみに思ふ母は癩
 母も味方に付き兼ねる晝歸り

朝がへり親仁閻魔にカ、ア鬼
我が内へ傍若無人四ツ手駕籠
コハ不埒麻上下で朝歸り

素見

十五城ものだと素見學者なり
油へらしがまだ居ると素見イヒ
ふら／＼とへうたん町へ素見來る

中宿

男色

文使

謹をたばねて背負つて行く文使
鬼こもる郭から千の矢文なり
文使腮の下からちらつかせ

船駕籠

御先眞白土手を行く雪の駕籠
石川流にかつぎ行く戻り駕籠
雨中の鬻ねだりごと法に過ぎ
尋ねてるだらうと駕籠や舞を吸ひ
女房のおこつた夢を猪牙で見る

夜這

猪牙船は行方も知れた戀の道
何處へ碇をおろさうと猪牙でいひ
行く者は晝夜を捨てず船と駕籠
中宿の火のしは化の皮へあて
中宿の鼻アおどけて脈を見せ
菊座とは慈童の時に言ひはじめ
あんまりな謹はかけまのよがりやう
ひり／＼とするは小姓の新まくら
地釜すき尿のにえたも知らぬやつ
かけまと逃けて尻を喰ふ尿たはけ
尻のつまらぬ年明けは野郎なり
ふり付けたかけま後は見せぬなり
後家出家かけま前後に敵をうけ
そも／＼夜這ひの始まりは三輪の神

大和巡りの留守へ來る三輪の神

二の膝をふんで夜這ひはにえきらす

背蟲の夜這ひ睡み合ふ猫のやう

三聲おこして身退き下女へ這ひ

〇〇かして居たで戸まどひに立たず

だんまりの幕は三助下女旦那

〇〇〇

浮橋は日本國をよせはじめ

眉墨の皺御喜悅の最中なり

蚊の焼打が合戦のきざしなり

〇〇〇〇〇〇牛の角もじゆがみもじ

四百餘州がよりますと貴妃喜悅

茶の時は亭主の〇へにえこほれ

〇くぞ〇きますと呂の音律の音

宇田源氏奇々妙々の藥なり

き〇〇へはめて見たいは肥後ふくべ

戦のために毛蟲放火され

よつぴと夜片寐してゐる面白さ

女によれる黒髪は味が妙

そのため曲どり明日芝居なり

其の時は鳩胸口がとゞきかね

その時佐々木大音を女郎上げ

おれを〇たからうと思ふイイ女

なめくぢ二本もて〇〇す聞のわるさ

カノ蛸に越中肥後を吸ひとられ

ヨクイキヤスは四ツ目やの符帳なり

頼まれて來たといはねば買ひにくし

何につけかにつけひまな臍の穴

彼の藥女房九層倍〇〇〇

狐火を見ようか獅子に化けようか

伊勢

かななく國に白木の宮ばしら

牡丹餅も鯁もひだるきまぎれ喰ひ

人間の洗濯をする五十鈴川

山伏をいぢらせもつこ握らせる

天下晴れての欠落は神路山

足の指一束にをる氣味のよさ

坊主化して本田と成る神路山

藥研形しても藥な物でなし

大々の鱧二見のやふる盛り

數の子もはらゝ子もあるなまくさみ

辨當は先へ二見へやてかんせ

なでて見る綿に〇〇ある肉蒲團

日光

玉くしけふたあら山の神の號

初陣はたゝかふまへに武者ぶるひ

有り難さうらみるものは瀧ばかり

身ふたつを骨もひとつに鴨の味

住む鳥も神慮に叶ふ慈悲の聲

女人成佛するきの涙こほして

下野に日の山出羽に月の山

浮橋にア、またいくよふたばしら

唐がらしさへも紫衣著る御靈山

太平さこのよろひがた兜形

住吉

漁父木樵深き神慮の底筒雄

置く霜の神はおとしもつもり浦

神詠はいはほ樂天齒もたたず

神祇部

四角な文字を削らるゝかななもじ

浮橋

一鳥の傳が神代の祭りぞめ

住吉で音にきこえた太鼓橋

あれさ〇〇〇も鶴鶴と〇〇

和歌神

浦浪の左右夜の歌朝の歌

神樂

女神にをしへ申したは土龍

和歌の神山といふ字の御姿

笛の音に松風さそふ宮神樂

末世まで消えぬは和歌の霜と霧

とんつくな奴が神樂の太鼓持

眞中は若め左右はほし大根

折節は神馬も神樂太鼓打ち

左右が提灯眞中がすきとほり

かぐら堂一寸一ぬれ十二文

菅廟

非情すら君へ誠をつくし瀉

神祇雜

貌ばかり心に見ゆる梓弓

天神へ先づ備へたき自在餅

梓弓書置出して引きくらべ

やどり木のやうに自在の御誕生

神道者身にほろくの不淨を著

知らぬ火の配處わびしき自在鍵

屁をひりに家根からおりる宮普請

都の空に墨を引く御神恨

筑紫でも梅干親仁御氣に入り

釋教部

臍塚を築くべきほどの御鬱憤

釋尊

釋尊は絞りはなしの置頭巾

大佛

木やりにて蓮の葉へのる大佛

十悪も五逆もすくふイイ釋氏

初釋迦といひたき時分御誕生

二王

蜂が巢をかける二王の鼻の下

摩耶夫人

御名が摩耶ゆる謔つきを産み給ひ

まや夫人ソリヤ御蟲氣と茶をわかし

鬼子母神

子許りで亭主の知れぬ鬼子母神

身柱で蟲のかぶり出す摩耶夫人

びんづる

びんづるは煩惱盡きて木目が出

耶輸陀羅女

〇〇〇〇〇涅槃に入ると耶輸陀羅女

阿彌陀如來

彌陀如來額へさぐり附き給ひ

達磨

サア悟りぬいたと達磨るざり出し

守屋には餅をつかせて臼の上

難波池闇浮たごんの如左衛門

六祖

米よりも胸をしらけて智識なり

觀世音

御詠歌を琵琶に合はせる竹生鳥

如意輪は蟲齒の痛いやうに見え

聖德太子

廐から和に佛道をつなぎとめ

地藏尊

びんづるの氣はもてないと地藏尊

無理な願地藏はしぼりからけられ

弘法

芋と石字はやはらかに書き残し

良辨

渡天から空海とんだ處を掘り

善智識普く諸經良く辨じ

一休

家の棟の繩西行の氣にくはす

性空

硯から悟つて書寫を御建立

老僧も戀慕に志賀をかくし兼ね

兼好

とんだ坊主だと地藏洗つてる

兆殿司

佛畫師の名譽を残す繪の具谷

松にしぐれのうたがひは雪で解ケ

兼好

兼て好きゆる色文も上手なり

慈鎮

落馬にもこりす少女をとめたがり

腰折歌を詠ませては女郎花

澤庵

兼好が新道ひらくしのぶ山

能因

名歌ゆる一戒やぶる秋の風

白河の關を窗から覗いてる

刈萱

其の後は淺漬和尚許り出來

文覺

盛遠が煩惱は是即菩提

戀で世を捨て荒行で世にひき

天王寺

佛法の棟梁株は天王寺

西行

北面を捨てててに葉を拾ふなり

天王寺

未來記は現世に深きはかり事

増上寺

眞黒になつて佛も御味方

釣鐘のあつさに扇つかはれる

東叡山

實に花も吉祥閣を仰ぎ咲く

花見つれ文殊樓から智慧を出し

門徒宗

御再建他力は彌陀の本願寺

東西の外は一向かたむかず

イイ宗旨酒と肴で穴かしこ

片々はねはん門徒の長まくら

法華宗

祖師の徳波にも残る筆の跡

時計かとおもへば法華坊主なり

かむるとは筑摩祭のやうな僧

僧

ありなしの苦を離れ家の墨衣

墨染の行脚筆まで坊主なり

座禪の膝をおつ崩す蚊の力

賀の祝ひ目出たく無いと寺で言ひ

掃溜で和尚のあらを見付けられ

女にはきはらはれ衿は早くきれ

醫者も古句と宗匠に化けて行く

一戒はどうもと所化の正直さ

眞言も圍つて置けば祕密なり

折ふしは疊をたゝく常念佛

坊主の鼻血ヤレ毛抜く

和尚小聲で此の返吐は御内々

茅町の釜へぶち込む御鉢米

一月寺小僧尺七ほどは吹き

還俗に九族天を追ひ出され

南無佛と異香薫ずる佛の屁

殊勝けに見ゆる和尚の皮かむり

尼

假名美しき尼寺の法度書き

假名書きの經も尼寺讀誦する

數珠袋昔引かれた袖の端

おはづかしさうに尼寺入院なり

笑ふ齒にむかしの残る俄尼

二人組許り尼寺頼んでる

願人

柄の長い傘住吉の坊主持ち

破れ衣でけさほどのはつしもの

順禮

負ひずるを蜜柑で著そめ柿でぬぎ

御詠歌で子を寐せ付ける木賃宿

六部

そもく六部の始まりは本田氏

負佛は六十四筋跡しざり

六部の笠は肩入れのまはりむく

血氣の六部ふせ鉦をはね返し

佛罰を恐れて六部屁をひらす

元祖柄井川柳翁辭世

風のあとで芽をふく川柳

追加

八重がきの外に繁りし川柳

祝言

邯鄲は物かは御代の高枕

東都四代目川柳翁風梳庵社中

素行堂松鱸漫撰

花笠外史雙枕閣

古今夷曲集

古今夷曲集序

四角柱やかどらしや、角のないこそそひよけれ。むかしくいふにいへぬ物のなかより、丸きもの一つおひて二つになり、三ツになりし時より、夷曲歌は始まれりけり。今狂歌といふ歌は人の心を種として、言の葉しけりそふものなれば、只情の丸いがよとなり、先づ天照大神の御宮居は、丸木をもて造れり。諸々の御社にも鏡をかけるは、丸うて、空しうて、よろづ直に寫るを見せしめ給ふなるべし。我が國は國津神の御國なれば、春の神をむかふるにも、鏡餅とて、第一丸きをぞ用ゐるなる。草の餅、粽などいふは、有爲の色相を顯はすならん。任他花の香に、馴れし衣を返し、單も裕のうら盆になれば、をのこ童は、山寺の御兒縮、折から攝待の茶筌髪にゆひなし、ともどちこよとて小手招く。しかも明衣の廣袖を著、未通女らは鬢の髪を經ぬの島田わけ、夕風の吹きかへしにゆひて、いざをどろといふより、手拍子とり、足どりする十五夜の月の、輪の如くにこそはをどれ。小夜風に行きかふ袖の移り香は、浮きたる戀のしるべにて、しのの小篠のしのびくにいひより、いつしか睦まじき中となり、末の松山さゝら波はこすともと、誓ひ戯る、餘りに、あの御のさへ、女かゆくゆくお目もとの入はしやうや、それをそちが報うてなにせうぞなど、左禮が實になり、あは緒も今

は片絲の、此方彼方に引き別る、を、妹脊山の中に、芳野の川のよしやといへど、印南野のいなといふ諫むるに、猶口舌たらくなりければ、そちも理、こちも然なりと、蟻虎の皮のやうにもてなすを、諸共にそとほ、ゑめば、さればこそ、思ふ中の小鬪諍、詞の花をちらすのみ、根葉はあらじ、先づ杯を、さすが石木にあられ酒、心弱くもの跡をば、え申すまい、しやんとささせられよと、女かたへ戻させ、これより五百八十年と祝ふを、丸うなつたといひ、一國一家のわけて齊ふるも、又々かくいふべし。まいて佛の道には、丸の中に心といふ文字を書きて、身の大事を觀じ知るとなれど、こちや知らぬ、生死山の蛇が知つた生死、抑心を丸うするには、和歌に如くはなし。其のさま優ならんとすれば心たらず、艶なるは獺のたはれをのたはれ過ぎ、つよきは片田舎の者のものいふに似てなつかしけなく、鑽れば石よりかたく、頭をふりあふぎみれば、須彌の山より高しとなれば、くれだる我等の學ばんには、水の月を望める獸に異ならざるべし。さらば鉈をもてやまはさん、小刀にてや削りなさん、あらず、形なき心なれば、さは徒らなるべし。いなかにも狂歌をもてあそびね。此の歌久堅の天にしては、下照姫に生まれりしを、荒磯の地にしては、すさのをの尊、三十文字あまり一文字によみ給ひてぞ、和歌となれりける。しかはあれども、人の代となりても、聖徳太子、此の様を捨て給はざりけらし、いはく、釋氏に西方の教へをのべ、聖の道に不屑のいさめあるが如くなるべし。それ

より後は、文字の數、和歌を移すものから、猶しれたる事のみもてつゞくるとはいへど、折にふれ事に望みて、まれ／＼よめりしを、きぶき數寄者ら出で來て、近き代よりぞ百首二百首數百首に及びてはよみける。それが中その外、こゝらの人のよめるにもあまたの病を除かず、上下かけあはざる多かり。狂歌とて詞こそまけてもいはめ、心は正しう、身を修め國を治め、爰を得彼所をしる業なれば、いかで、妄りがはしきをよしとせん。思ふに心正しからぬは、他を損ひ身を亡ふ佞人にひとしく、病あり上下かけあはざるは、盲聾、腰曲み、足たたすなどやうの片輪者に同じかるべけれど、和歌のためしをもて四病八病を禁むる中に、一際いひかなへたらん歌に、輕き病はゆるす方もぞ有りける。又昔今に、落書といふには勝れたる作もあれど、彼は世を諷し人を誘り、あるまじき物なれば、是に載する事なし。古く聞き今見る歌にも事的情齊り笑種ならんを選び集むとはすれど、末の卷に至りては、尺八竹の一よのみならず、三世の佛の理もあれば、巫の謾言ならねど、詞強く、和歌にはいかにぞ聞ゆるを混ふる事になりぬ。是れ大人びたる人の爲にはあらず、童への殿のお尻からぎよの口遊を、狂歌にいひかふるたよりにもとて、千歌十卷、なづけて古今夷曲集といふ、物みな其の本に還る業なれば、むかしをたてる名なりけらし。かくてよい春や若うならせられたと、詞に花を飾りいふより、本尊かけたかの鳥の聲をまち、紅葉を折りて簪にもし、酒の爛をもし、雪女ふらい／＼ふる妻

いとしななどはむれ、春夏秋冬に、いらぬ草木のえもえしらぬたはごといひてあそぶも、かしこき君の御恵み、八島の外までの家々の諺、或は頤臍の下にさがり、肩は頂の上に上りたるやうの、唐の大和の異様なる詞、をさあいをあひや手打川水の阿籍、いな舟の掉頭々々、土佐の手々甲、大和の元興寺に隠期など様の事を、もてつらね書い散らすを、見る人間く人、刮ぐるよりも可笑しがり、咄と笑ふに罪をうしなへば、自ら情の丸うなるべきよすがなるべし。莊周がいへる、菓三つ四つの跡先を諍ひ、狼のおそろしき頬をなし、羊の歩みの近づくをもしらぬたぐひの人は、己が迷ひに情を奪はれ、求むとも笑ふに由なかるべし。あめにます大黒の能をきくに、一に俵をふまへ、二ににこと笑ひ、三に三界の福珠を、袋いつばいに入れ、お顔の色黒うなるまでもてありき、笑ふ家には必ず来りて福をあたへ給ふ。是れにも三郎惠美須殿、お前の海の鹽のめをし、常にめでたいを抱いて信ある者には給はんとなり。是れを見、彼をきくに、機嫌よう笑ふが、即ち福德なり、菩提なる事をしれと、寛文五年十月一日に、しるし終りぬる行風が、身のおろかなるをも忘れ、後の嘲りを顧みずといへども、これを好まん者の爲には、いさゝかのたづきともなるべければ、なにはのよしあしのふしぶし、眞薦草のかりにも翫び、猶形にそへる影法師の如く、身をはなたすなれ行かば、をかしき色の情にそみつゝ、夷歌ときくに笑ふなだちともなれとなり。梅といへば口に酢たまり、苦參の話

には、顔をしかむるなれば、十王の口澄んだ貌、天狗のはなたかう慢するものも、此の歌を聞きもしよみもせば、阿々々とこそあらずとも、屈々とは云ふべし。現在の果にて、きし方ゆくするをしようとせば、此のわざを忘れず、今より終の夕までも、腹たてずの正直坊、笑ふのみならば、情の角菱の病ひしくと癒え、眞丸になりなん後、人仁といふころを持薬に用るば、彼の笑ひ佛とやらんならざらめかも。

古今夷曲集卷第一

春歌

ふる年に春立ちける日詠める

年の内の春の小袖は一しほの浅葱とやせん濃染とやせん

源重秀朝臣

春たちける日よみ侍りし

山眉にかすみをひきて腰すそも優なる春の立ちすがたかな

行風

立ちそむる霞の衣のはつれ雪春のきにける紋所かも

義綱

たばこのむ内より春は來にけらし煙もかすむはなのさきかな

正長

春のはじめの歌

春たつといふばかりにや大ぶくの水氣も霞んで今朝は見ゆらん

哥慶

ちはやぶる茶筌もけさは改まりたつ大ぶくの神のはるかな

満永

春くれば色も花香も別儀にて宿の大ぶくたつかすみかな

入安

釣棹のたけ高からん一節をこゝろにねがふ和歌夷振り
 餅つかずしめかざりせず松たてずかかゝる家にも正月はきつ
 きのふまで以ての外にさぶ六の十八公の門のはるけさ
 去年までの貧乏かみこぬぎ捨てて春きにけりなふくの上
 目出度いといへばめでたいと言ふこそ口真似こまね正月のれい
 臙太に雑糞をくらふ人はたゞ腹のはるにや春をしるらん
 もろ人もけふ赤子にやなりぬらんむつきをしきの始めと祝へば
 年こえて花のかゞみとなる餅は黴かゝるをや曇るといふらん
 誰をかも仕手脇にせん高砂の松囃子する友あまたなり

元日の霞をよめる

九重もはるの霞のあみの目に風たまりてやけふ長閑なり

酉年の元日によめる

水は本へ返辨申し酒の字の作りをとりの年ぞきにける

百首歌の中に子日

春

一

行

由

宜

次

燕

保

頼

如

行

房

尙

安

貞

齋

良

石

友

智

尼

風

景

女松をば子日の友にひかれなば陰囊なしとて笑はれやせん

霞

膩さうで綺麗なものは歌人の口にかゝれる山のは霞

題しらす

足なくて雲のはしるもあやしきに何をふまへてかすみ立つらん

百首歌の中に鶯

法華經ぞ小鳥の中でうぐひすは最第一のはつ音なりけり
 錢かねでねをさすならば鶯のほふ法華經も一ぶ八くわん
 ほそくと鳴く鶯の初音には朝たうまるも及ばざりけり
 梅がえはそなたのえてん樂さうに口笛なるかややうぐひす

若菜のうた

籠を手に提げつかへつ名にめでて鶯菜をやつみて入らん

百首歌の中に

よもすがら叩くは唐土の鳥ならで日本の人のくひななりけり

古今夷曲集卷第一

立

貞

法

心

上

人

立

貞

行

宗

來

入

康

德

人

法

心

上

立

貞

行

宗

來

入

安

懸想文をよめる

いふ事をきけば腹いたむくく、と臍の下までけさう文かな

貞

徳

萬歳をよめる

萬歳の祝ひとならば錢の數八百八十四文やれかし

不

白

百首歌の中に残雪

年男あうて日數もたたざるにはやくもとける雪女かな

貞

徳

いたゞきに尾にまた雪のむら消えは絞毛のやうな生駒山かな

宣

相

ちよこくと澤邊に残る雪はたゞまつしら鷺がすくんだと見る

來

焉

春日野は今日もな焼きそ嫁がはぎまだ雪しるの妻にこもれる

満

永

題しらず

春の日にかしらの雪け落ちはてて只はけ山となるうたてさよ

忠

精

梅花をよみ侍りし

色に出て見ゆる女の智慧のみか梅も諸木のはなのさきなり

行

風

百首歌の中に梅をよめる

主殿の祕藏の梅をかいたらば氣條の先ではなやつくべき

宗

恆

祕藏せし花を一枝こうばいの色にあか手の皮もするなり

宗

老

柳のもとに梅の咲けるを見て

春の日のたきものらしう梅が香を柳の髪にとむる風の手

行

風

百首歌の中に柳

櫻にはあらぬはるべをこきまぜて枝をたれたるはこ柳かな

雄

老

俄にもあち東風と吹く風の手にひきとつらるゝ柳髪かな

満

永

題しらず

春の日に蔓る木々の枝ごとに目鼻はあれど耳なしの山

久

清

百首歌の中に早蕨

山際に左義長をせし跡とめてわらびそろく、萌え出でにけり

淡

路守宗増

春月

朧なは猶もあぢよきもち月とおもひつかするうす霞かな

一

圃

照る影も朧ほろく、ふる雨に笠をめしぬる春の月かな

久

清

百首歌の中に春雨

なになりとこのめ春雨つれづれとと振舞はたゞにもかくにも
春雨の風にしたがふかいだうのしるくなれども早かわきけり

入 安
雄 長 老

足にあかじりといふ物ありて春もいえざりければよめる

あかゞりも春は越路へかへれかし冬こそ足のうらにありとも

或人のいはく猿丸太夫が歌なり

春草

蒲公英の花のちゝつと咲く頃の野山はやしはおもしろいなう

行 順

小米花

それは杵是れは木の根にこほれけり小米の花の風にくだけて

未 得

沉丁花

竹垣を霞のきぬのふせごにて勻ひをとむる沉丁花かな

花見の袖のつどふを見て

見渡せば柳櫻にみやこ衆だてこきまぜて行く東やま

保 友

題しらず

立ちよらば大木の陰の花見せん咲きちる程に餘計ありやと

教 二

見花

兒櫻や立ちて見居てみ寝て見ても猶愛らしき花のかほばせ
をだ巻のくるりく〜とくりかへしみめぐりめぐる花車かな

一 春 圃 清

本願寺二所の庭の花を見てよめる

六條の染物ならぬ櫻にもおもてうらある花のいろく〜

宗 恆

芳野の花見に出でたつ道にてよめる

晝食はくはずとゆかんみ吉野の花のしたにてうゑ死ぬるとも

教 二

名所花

櫻花見るめについてはなれぬは芳野うるしのあればなりけり
こつきよし色は猶よし勻ひよし已上みよしの花の勘定
葛城や天狗のはなのそれならでによつと高間の嶺に見えたり
いつとてもよう来たとだに仰らぬはをしほのはなで人や待ふ

保 友 風 明 安
行 道 行 安

絲櫻

わけもなく只わく／＼と結ほれし氣も打ちとくる絲櫻かな

一 圃

姥櫻

見ほれてはたちもえさらず花故に腰ぬけとなる姥ざくらかな
白壁をつけたる宿の庭にさく花は豆腐のうば櫻かな

貞 徳

楊貴妃の名ある櫻を見て

楊貴妃の花のかほよしさぞなく／＼天のなしたるさくら色なり
一面に咲きつゞきは春の日の長屋づくりの家ざくらなり
せはしくも小枝かさなる軒口はめとはなつきな家ざくらかな

貞 清 親 王
満 永

花下の酒宴によめる

鹽竈の花見の酒のさかなには櫻鯛をや濱やきにせん

三 哲

ちひさき花の木の枝を折れるを見てよめる

兒櫻のよろひはあれど頬當をもたでやはなのさきを切らるゝ

古 生

依花恨風

ともすれば花の顔さへ打ちちらす風の手癖を直してしがな

行 風

題しらず

さかな舞の扇子の風もいやで候今をさかりの花見酒には

宗 恆

落花をよめる

櫻ばな散りしく庭をはきありく雪踏の皮に波ぞかゝれる

忠 精

題しらず

櫃川のはたに生ひたるかば櫻ちるもぞ花のとぢめなりける

よみ人しらす

岡部氏内膳正館にて鯛の料理ありけるに

鴈の汁きくの酒のむ秋はあれど春の海邊に濱やきの鯛

重 頼

櫻鯛

上下にもてはやしつゝあぢはふや花も實もあるさくら鯛とて

藤原言總卿

近江鮒

さゝ波やしがからし酢でくふ時はたれが口にもあふみ鮒かな

正 繼

題しらず

丹波山毬栗にじる秋はあれど住吉うらの春のはまぐり

歸鴈

たはけともなか／＼いはじ明くる夜の花を見捨てて歸る鴈かりがね
名残をしく思ひまるらせ候べくをかなに書きても歸るかりがね
歸るまに古郷の花のちりたらば彼方此方ですつかりぞせん

百首歌の中に春駒

乗りとめてすそもしてまし春駒のへうたんからや井手の玉川

苗代

みな口をよくく／＼まつれ秋くれば人の命をつなぐ苗代

蛙

水にすむ蛙がうたをよくきけばとかく卑下なり愚意々々と言ふ
くちなはの追手からめて取りまけばかはづ軍のにけ道もなし
苗代をおとせる水に落ちゆくは軍に下手のかはづなるべし

百首歌の中に杜若

浄久

宗明

行安

教二

貞徳

立康

未得

遠江守源經行

水でとくにかはの菖蒲杜若にたりや似たりとにためきにけり

躑躅

咲く花の顔は上戸の色ながら名は下戸のすくもち躑躅かな

歎冬

咲き出でし八重山吹のまつ黄なる色も甲州一步なりけり

題しらず

やかすとも草の餅をば春日野の春なぐさみにもたせたらなん

三月三日

白に粉も蓬も入つて杵をとりつく音も先づがたひしの餅
御祝ひに與力家の子集まりてつくや喰ふなりどさくさの餅
酌人のこほるゝばかりもるにこそはや置きたまへもゝ桃の酒

題しらず

鮎の子のわきてながるゝ泉川いづみ酢にての料理ゆかしき

百首歌の中に藤花

古今夷曲集卷第一

雄長老

未得

藤原秀直朝臣

重安

一行

一行

宗恆

大臣のゆかりの色かむらさきの藤浪ながき花のふさざき
 入 安
 纏ひつゝ藤にしたゝか締められて難儀さうなる松ふぐりかな
 雄 長 老
 紫のふどしに似たりふぢのはな松のふぐりを咲きてつゝめば
 貞 徳
 見るに日は西へねぢれど藤の花じきになるやらひだるさもなし
 淨 久
 池邊の藤を月出づるまでながめをりて

暮春

池水にひかめく月はしら藤の棚から落ちてぬれ鼠かな
 友 以
 春は猶ゆるりくわんすの煎じ茶のにえ花をのみあそび暮せり
 重 故

百首歌の中に三月盡

三春しゆんの約束よとて來りしも今日つきてこそ歸るなりけれ
 立 康
 春の日は長槍ながらさゝのはの一よばかりになれる石築
 雄 長 老
 くどくゝとするまに春はつき弓の矢を射る様に日は立ちにけり
 淡路守宗増

古今夷曲集 卷第二

夏歌

百首歌の中に更衣

ぬぎて今日かへすくも恥かしや花みるほどの借衣かりぎぬのそで
 入 安
 夫婦めをと中に只二つもつころもをばかへあひて今日の管くだやあはせん
 雄 長 老
 卯花
 月出づるその方角も卯の花の東しらみに夜は明けにけり
 貞 徳
 卯の花はどこからふれる白雪と空に不審ふしんの雲や立つらん

待郭公

ふかくと葵の上に置く露や御息所のなみだなるらん
 葵

古今夷曲集卷第二

明暮やあら遅しとてまつの戸に郭公にてすねてこぬかも
郭公えきかやあらうの花のしらりと夜をぞ待ちあかしぬる
時鳥口なしはらの名におひてなかねやじやうのこはた山の邊

開子規

淡路守宗増
保友
休和

ひとり居によつほとゝぎす音信の聲聞くとときぞ氣は散じける
やるまいぞやるまいものを時鳥聞いたかく今の一と聲
時鳥管根うつぎになく聲を聞いてわすれぬ地獄耳かな

愛宕の坂にて馬の杓を見れば福なるよし人の語る折しも時鳥の鳴きければ

耳のびくよきはあたごのひと聲を聞きぬる馬の杓手鳥かな

稍に蟬の鳴く折しも時鳥を開きて

蜀魂空に本尊をかけたれば蟬の經をもなほたかうよめ

百首歌の中に盧橘

禁庭の花さへ木さへみえねども風薫り來るたちばなの圖司
陳皮にはならぬさきより立花のほひをきくぞ氣の藥なる

満永
一幸
浄治
宗鋪
淨久
雄長
貞老
徳

早苗

早乙女の骨を折りつゝうへくの地頭へ米はとるさなへかな

宗

増

五月五日珍客來れるに粽を出して挨拶に

今日ことに聞食されよ御壽命の數もやちたびもちまきをば
印地にし深入りしつゝ深手をば負ふはふかくな深草の者

久行

清安

五月五日雨降りければ

風の手の礫のやうにうち散らす雨こそ今日のそら印地なれ

左衛門督藤原義景

箒をよめる

竹の子や疱瘡するとかろからん絶えず雀の羽風あつれば

久

清

五月雨

五月雨に降りこめられてきがかさりかしらいたやの煩ひとなる

満

永

照射

的よりも照射の影にとんで行く鹿の子の星やいにくかるらん

貞

徳

百首の歌の中に螢

古今夷曲集卷第二

童日遊詞

猿の尻はまつかいなれば螢火も昔よりかうありぞしつらん

玄

康

若衆を思ひのたまかほたる火のむねはこがれで尻ぞこがるゝ

入

安

白露の玉藻の前が亡魂か螢も身よりひかりはなてり

宗

増

やどをかといはぬばかりぞ飛ぶ螢よるにしなければ是れも火尻ひじりは

法

己

高野にてよめる

火で候かいや火にあらず高野山谷三つこえて螢とぶなり

成

安

蟬

帆柱にこれも見よとや船岡の山の梢にせみがとりつく

春

房

鮎

鮎料理の座にてかかる鮎もがなといふ人のあるを聞きて

満

永

鮎

鮎料の座にてかかる鮎もがなといふ人のあるを聞きて

是

急

鮎

鮎料の座にてかかる鮎もがなといふ人のあるを聞きて

教

二

鮎

鮎料の座にてかかる鮎もがなといふ人のあるを聞きて

是

急

鮎

鮎料の座にてかかる鮎もがなといふ人のあるを聞きて

教

二

鮎

鮎料の座にてかかる鮎もがなといふ人のあるを聞きて

教

二

鮎

鮎料の座にてかかる鮎もがなといふ人のあるを聞きて

教

二

鮎

鮎料の座にてかかる鮎もがなといふ人のあるを聞きて

教

二

鮎

鮎料の座にてかかる鮎もがなといふ人のあるを聞きて

教

二

鮎

鮎料の座にてかかる鮎もがなといふ人のあるを聞きて

教

二

鮎

鮎料の座にてかかる鮎もがなといふ人のあるを聞きて

教

二

鮎

鮎料の座にてかかる鮎もがなといふ人のあるを聞きて

教

二

鮎

鮎料の座にてかかる鮎もがなといふ人のあるを聞きて

教

二

鮎

鮎料の座にてかかる鮎もがなといふ人のあるを聞きて

教

二

鮎

鮎料の座にてかかる鮎もがなといふ人のあるを聞きて

教

二

鮎

鮎料の座にてかかる鮎もがなといふ人のあるを聞きて

教

二

鮎

鮎料の座にてかかる鮎もがなといふ人のあるを聞きて

教

二

鮎

鮎料の座にてかかる鮎もがなといふ人のあるを聞きて

教

二

鮎

鮎料の座にてかかる鮎もがなといふ人のあるを聞きて

教

二

鮎

鮎料の座にてかかる鮎もがなといふ人のあるを聞きて

教

二

鮎

鮎料の座にてかかる鮎もがなといふ人のあるを聞きて

教

二

鮎

鮎料の座にてかかる鮎もがなといふ人のあるを聞きて

教

二

鮎

鮎料の座にてかかる鮎もがなといふ人のあるを聞きて

教

二

鮎

鮎料の座にてかかる鮎もがなといふ人のあるを聞きて

教

二

鮎

鮎料の座にてかかる鮎もがなといふ人のあるを聞きて

教

二

鮎

鮎料の座にてかかる鮎もがなといふ人のあるを聞きて

教

二

鮎

鮎料の座にてかかる鮎もがなといふ人のあるを聞きて

教

二

鮎

鮎料の座にてかかる鮎もがなといふ人のあるを聞きて

教

二

鮎

鮎料の座にてかかる鮎もがなといふ人のあるを聞きて

教

二

鮎

鮎料の座にてかかる鮎もがなといふ人のあるを聞きて

教

二

鮎

鮎料の座にてかかる鮎もがなといふ人のあるを聞きて

教

二

鮎

鮎料の座にてかかる鮎もがなといふ人のあるを聞きて

教

二

鮎

鮎料の座にてかかる鮎もがなといふ人のあるを聞きて

教

二

鮎

鮎料の座にてかかる鮎もがなといふ人のあるを聞きて

教

二

夏草花

結句そちに人くさいとや嗅ぎぬらん香をかぎよりし鬼百合の花

淨

治

名にめでて折らぬばかりぞ鬼あざみ我おちにきと人にかたるな

行

風

野にたてり夜風ひきてや撫子のはなたれたりと見ゆる朝露

正

信

枯れさうな富士撫子を育てんと水汲みかくるたごのうらが身

知

度

風の手もさへなおそろし處がらあたをなすのの石の竹にや

西

人

撫子のませにぞはえるあこだふり同じつらなる名をしたひつゝ

高

壽

瓜作れる人の挨拶に

未

得

名をしたひこんせつぶりの雨露か梵天瓜ぞようそだつなる

未

得

ねぢつけていざや契らん己とはまた落ちさうもなき小姫瓜

未

得

題しらず

未

得

題しらず

未

得

題しらず

未

得

題しらず

未

得

題しらず

未

得

題しらず

未

得

題しらず

未

得

題しらず

未

得

題しらず

未

得

題しらず

未

得

題しらず

未

得

題しらず

未

得

あさ瓜をはやしてくへば喉笛もひやりくとなりけるかな

宗

鋪

茄子

おのづから茄子の色を紫のふくさにつむ茶入とぞ見る

み

と

く

などてかく早年よりになりにつけん水なすびぞとむしりしものを

讀

人

し

長らへて何をなすびの畑に生ふる若きをこそは人もちぎらめ

政

也

津國今宮わたりに干瓢といへるものを老若わかたずこしらへけるを見て

春植ゑて夏むきけらし白妙のかんべう干すなり尼もかゝらも

利

忠

蚤

身の皮もほりぬくやうに痛むるは是れや大苦ののみの蟲なる

道

明

題しらず

蚤よりも蚊こそうたてく思ほゆれたれが破りし此の紙帳ぞも

宗

恆

蚊

罪あるもあらぬ人をもいきながら鬼はかほどによもや喰ふべき

宗

朋

題しらず

我がきても久しく破れぬ帷子は姫がよみをや多くいれけん

一

根

こい捨てふ我が帷子の水いろはひとしほとこそ思ひそめしに

久

清

津國福島に雀鮎といふ其處の名物なりけるをよめる

數おほふ江鮎のうろこ福しまの人は仕馴れてよいすゞめ鮎

親

之

青たでもそへてはなさん羽なくて飛ぶほどうまき雀すしとは

宗

鋪

祇園會

精舎には諸行無常となるかねのしやぎりしきりに替る祇園會

未

得

ひいてくると見れば過ぎ行く山鉾よ是れや祇園の會者定離なる

行

風

炎天

寒よりも百倍あつき炎天は身にきるものわたくしで無し

是

急

泉

夏の日の暑氣をはらふいづみこそ手にむすぶてふ水の印なれ

み

と

く

賣りためて錢口おほく結ぶべし是れほど酒がいづみなりせば

貞

徳

題しらず

座頭衆すゞみとなれば酒盛のてうしを請けて平家かたれり

淡路守宗増

百首の歌の中に

しづの女も大路井筒に夕涼ふるかたびらの汗洗ひして

前大僧正慈圓

蓮

花瓶にもさすてふ花と聞きしよりはちすを見れば謹ぞふかるゝ
雨がへる蓮華にひよつと乗りたれば生佛とや是れもいはまし

種好
むねます

荒和祓

貧乏の神もなごむや借錢は今日みな月の晦日ばらひに
来る秋と夏は過ぎ行きさかひめのまん中臣のはらひするなり

未得
淡路守宗増

古今夷曲集 卷第三

秋 歌

百首歌の中に秋たつ心を

涼しさを巻き籠めて来る文づきは一葉の風のちらし書なり
秋きぬとめには見えねどひく風のしはぶく聲におどろかれぬる

貞徳
入安

七夕

盆またで聖靈まつるたなばたにむくる時宗の尼の川水

雄老

初秋月

御簾ごしにながめまるらせ候はたゞ文月の透きうつしなり

行風

猫のため孟蘭盆會まうける人を見てよめる

猫脚のほんだてにする功德茶の哀れになぐるくび玉まつり

休甫

踊

両の手をふりつゝ拍子打つ時はあふぎを腰にさしをどりかな
出でたちはどれもあさ衣あさくゝと淺葱にそめてきそ踊かな
見るに聞くに程拍子よや振りのよや歌も上手や小町をどりの
かけられてあふむ返しに来るこそ小町をどりの歌のさまなれ
はやしぬる踊の庭に燈籠をともして持つもこきり子ぞかし
をどりの拍子揃はずして見る人わろ口いふによめる

わる口を悪きをどりにいふことは先づ笛吹におひやひつこめ

津國福島といふ處にて踊にをのこも女も羣集するを見て

秋風のふく鳥人のをどるとてすゝめ鯨ほどあつまりにけり

相撲

笑種ことばにかゝるまけ相撲たまゝ出ては手をもえ取らず

相撲にまけぬる方いなびけるを見てよめる

かつにのり手とるに足を取られつゝ負けぬる方や休まうといふ

百首歌の中に女郎花

久清

行風

源雅純朝臣

未得

近吉

ていとく

行安

器音

みつなか

清

風

臣

得

吉

く

安

音

か

秋の野に露おもくさの女郎花色はにきびか粟のむせるか
色をみなへしてとはねど飯にむす粟つぶほども替らざりけり

百首歌のなかに薄

招きよせて化さんとてや秋の野にふれる狐の尾花なるらん
落武者のおつるも道理薄の穂いり日を招く鉾に似たれば

薄を吃詞にてよめる

秋の野にかゝ風ふけるたゝたびにたゝたれまねくはゝ初尾花

百首歌の中に蘭

くさきほど勻へば是れや申すらんしまにんにくの蘭とも
藤袴もゝだち活とりもせで裾野をくだり露にぬれつゝ

あさかほ
藎

花の露も日影うつれば蛭に鹽ひるはしをくゝとなれる朝貌
朝酒をおほく呑みなばくるゝまで只是れ藎花一日の酔ひ

色鳥

古今夷曲集卷第三

入安

休甫

雄長老

ていとく

よみ人しらず

貞徳

雄長老

立康

渡り来る數も限らず一つれに二十三十四十からかな

少將藤原秀宗

題しらず

よりあひて山がら日がら四十からからくくと笑ふみづく

保友

夜更けて鶉の鳴けるを聞きてよめる

秋の夜のくわいと更けつゝ更けりしは夢か現かうづらにて候

權大僧都心敬

鳴

羽がきの數を所作にやむば鳴の看經をするあかつきの聲

未得

百首歌の中に松

墓原に人まつ蟲のこゑすなり我かと行きてとふこともいや

法橋由己

たぎらす茶の湯のろちの下草にりんくと鳴く松蟲の聲

ていとく

草むらにむざとな鳴きそくつわ蟲野飼の馬のはむこともあり

淨治

鷹犬の鈴蟲馬のくつわむし鳴く野や殿の狩場なるらん

やすとも

月

月にあそべ五尺にあまる身なりとも一寸先はやみの浮世ぞ

行風

腰もとへ似たり金鐔さし出して山のはすはに見ゆる月かな

よみ人しらず

大空を夜ありきしつゝあかせるは月のかつらの男ざかりか

友知

まばらなる軒の穴より眺むれば月の鼠も桁はしるなり

未得

三味線の音をおもへとや風の手にくもはちりてれてれる月影

長尊

月のもとの酒宴

世捨人かいや夜は捨てず月の本の酒にころがうき藏司なり

三政

對月明莫往事思といふ詩の心をよめる

ながむれば顔のゑくほぞ皺となる月の鼠がしほを引くかよ

藤原氏成卿

月の夜目醫師のもとにてよめる

ねぶたけも遺にさめてよしみねや只目ぐすりはあきのよの月

元安

月を奴子詞にてよめる

片脇へつとそびけらうみたく無いに邪魔入り申す月のむら雲

よみ人しらず

名所芋

山城の美豆野の里の芋をほりて幾たび淀に賣りありくらん

貞清親王

あまたともなひて或寺にまかりけるに手作りなりとて山芋料理せられけるによめる

くてのみや人に語らん山のいも手毎にほりて家土産にせん

宗順法師

駒迎

信濃より木曾踊して引く駒のまきぬる髪も茶筌やこのさ

未得

相坂の關の清水をかひすぎば風をやひかむ望月の駒

参議大江秀元

題しらす

そひあきし妹とはかはり見る度にもものくさからぬこもち月かな

貞因

望月を汝が箸にかけんとやほつかり口をあきの夜の空

淨久

八月十五夜

村雲のたちまちきれてさやかなる秋の中ごのめいよなる月

元安

詠めやる三五の月の光には二千里慾も忘れ果てたり

行安

名月の夜畑なる芋ぬすめるをとらへければ盗人のよめる

月見よといもが子供のねいりたを起しにきたは何かくるしき

河内國壺井といふ處にて月を詠めをりてよめる

唐臼や壺井の中へかきいれてたれ水とりの望月の影

元安

八月十七夜八宮御所にて當座に月の和歌よまさせ給ひみきたまふ折から今宵の月を題にえびす歌をと仰せけれはよみて奉り侍りし

望月の鼠がわれとかぶるやらよべからちとはたのへり行く

行風

二十日月

詠むれば二十日鼠のおのづから今宵の月のなりぞちひさき

未得

百首歌の中に霧

朝霧のきりの籬のかきのもとを通り行く人まるぬれにして

雄長老

秋田

秋の田をかるこにてもつ稻を重み我がきる物は汗にぬれつ

利忠

刈る稻を菩薩といへばそれを負ふ牛も大日如來なるべし

久清

百姓の稻こなすとてする白の音聞く時ぞ秋はかしまし

一幸

百首歌の中に擣衣

露木の葉きぬたの音もはらくと誰秋風におびえうつらん

入安

槌の柄をしと、握りてふるさとに擣つは男をこひごろもかな
寺のうちいきぬたの音の聞ゆるは彼の大黒のうつ槌やらん

百首歌の中に菊

壁に耳岩の物いふ事あれば何をかきかん我もはづかし
翁草花咲くころは露はらひたえずたうたり常にたうたり

菊を愛する人のもとにて

家主のよはひの程はちとせとの菊の籬をゆいて見ませよ

九月九日に

君が代にすんでとくりの菊の酒くめば珍重陽てうれしき
いにしへのならのみやけの菊の酒けふ九日のいはひにぞのむ
ひらかざる菊の心も節供ぞといはんしたばのつほみ口かな

十三夜

めのさやも大豆の莢をも外しつゝ見くふぞ月を賞翫のかけ

同じ夜曇りければ

揃大豆のさやけき月のかけをとて人の口べにかゝるむら雲

紅葉

立田山横すぢかへもおしなべて只一しきにもみぢしてけり

東福寺にて

通天のもみぢの色を兆殿司書き移しぬる繪の具とやみん
やよ時雨猶うはぬりをたのむぞやまだ色薄きうるしもみぢに

百首歌の中に

朱をまぜて漆ぬるでの紅葉ばも先づあき風にまけて散るらん

葉

けあけたる鞠の如くにぶらめきて庭の梢にありやありのみ

梢の柿人のとり喰らふを見て

ほのくゝとあかみのついた筆柿をもつ人丸でかぶりこそすれ

九月盡

長月もつまりくゝて一寸の光陰をしき今日の晦日

貞 徳

淡路守宗増 安

元 安

種 好 正 定 二 笑

白譽上人

立 貞

三 政

保 友

み と 雄 長 老

未 得

元 安

未 得

花をみて他念なければ積善の餘慶の秋もつくる菊月

淡路守宗増

古今夷曲集 卷第四

冬 歌

百首歌の中に初冬

昨日今日あら寒やとて重ね著る小袖ぞ冬の始めなりける
冬籠る垣ゆひつけん高擗の蛛手かくなは十月になる

淡路守宗増
貞 徳

題しらず

貧乏の神も出雲へ行くならば十月ごとに我は福人
村雨も時雨もいたくもる屋根はしたや残らず水つきにけり

雄 長 老
常 林

口切の茶の湯をよめる

霰釜しかくる爐にはおのづから置きぬる炭も冬のいろかな

久 清

題しらず

名において數寄する人は無地ならぬかたつきの茶の小袖きにけり

亥の子餅に砂糖かけたるを見て詠める

るのこにし鹿子まだらのあかの餅白きをみれば砂糖なりけり

勝

可

冬柳

朽葉さへちつとも見えぬ姥柳楊枝にせずと杖にきれかし

淨

治

寒蘆

人ならば脚氣といはん霜枯にをれふすあしの節もかなはず

未

得

題しらず

身を盡し浪花の事もはたらけば足もとさむくひゞにあれ行く

入

安

寒夜によめる

寒き夜はいかなる歌もよみつべしあまりかゞめば人丸になる

宗

也

氷

今朝最早とづ坂本のあつごほり山のひえたる夜風ゆゑかも

忠

昌

河水

わすれては白き氷を砂糖かと思ひて口になめり川かな

久

清

百首歌の中に

水うみの上ことくく張りにけり是れや近江の二十四こほり

入

安

千鳥

風次第あなたこなたに立ちさわぎ波の音さへちどりがけかな

て

いとく

餌さしめがちやくとさすべき棹河の不用心にもなくちどりかな

雄

長老

ちりくくやちりくくにもや飛んで行くはんま千鳥の友をよぶ聲

む

ねます

鷹狩

攝家まで供奉する君が御狩場にすゑて出でたる鷹司殿

雄

長老

鷹の鈴からりともいふ音きかば鷺のみの毛もよだつなるらん

一

頼

名のみして膳にはすゑぬ箸鷹のとりえぬるよりはや掴み喰ひ

み

とく

或館にて鷹の鳥の料理給ひけるによめる

鷹にとられ殿の御汁になる時はたうべる人の身もぬくめ鳥

正

信

百首歌の中に夜霞

さらくにあられん物か霞ふる笹のひとよもさゝを吞まずば

入

安

山雪

雪になる雲をばうしに打ちかぶり頭もさぞな大ひえの山
北山のかしらにかぶる雪綿や寒もて寒をふせくなるべし
草木も成佛せんとふすまゆきかぶる座禪の牀の山かな

淡路守宗増
尊純法親王
藤原親綱卿

奈良にて雪の降りける日よめる

舍利ならぬ雪佛もぞはくしきにひからかすがの御作なるべし
春日野の帷子雪はところがらならざりしとも言ふべかりけり

行風
法印玄以

松雪を見て

松がえのかたびら雪のましろさは十八このさらしなりけり

智仁親王

百首歌の中に

天神の御自愛なれば松にふる雪のしら太夫と是れも言ふべし

玄康

題しらず

三密の月くらきよは十丈もつもれ九識の窗の白雪

來焉

百首歌の中に炭竈

小野の奥雪ふみわけてかまもとの炭をねぎれば結句これたか

入安

百姓の身におはざるおごりをなし公納米不足してけるを見てよめる

秋の田のかり米をなし奢りなし年貢にわらや出す百姓

中納言大江輝元

圍爐裏ぬりを見てよめる

田樂をあぶらん爲のいろりとて先づなまかべを附けにけるかな

貞徳

火桶

抱いて寐て寒さをふせぐ火桶こそかさねぬ夜著の妻とそふらめ
あたるまの久しき程に炭の火もどうとなりてや足のひゆらん

未得
光知

冬梅

雪の中にまづぬけ出でて咲く花は梅のこだちや鞘はしるらん

みとく

西京八宮御所にて年のうちに春立ちて又の日大雪降りければ當座の和歌詠みて奉りしに四方を詞に雪の狂歌

一本よめ
をもと仰せければかく申し上げ侍りし

東より春はきたのに西の京奥ある今日のゆきぞみなみよ
東より春きたのちも西の京狂歌に今日の雪の色そふ

行風
元行

百首歌の中に歳暮

借りちらす木葉にあらぬ錢米の未進も今日はくる、年かな

入 安

歳暮

臆病と人はいふとも求めたしおいくる年に逃げん脇道
酒のます餅をもつかぬみどもには年の一つも御免あれかし
いにさまに置きみやけとて眉の霜かしらの雪をくる、年かな
年の矢のかぶらもたけて春はたゞ障子一重のへだてなりけり
今日毎に嘉例はづさで一つ宛老をもてきてくる、年かな

一本節分坂東の俗除夜にいり大豆こしらへる時やらくさやふんといへる言葉をもてよめる

恆 貞
讀 人 し ら ず
長 嘯 子
尊 朝 法 親 王
南 歌

鬼は外福は内へとうつ大豆の當りてひるかやらくさやふん

ト 養

百首歌の中に除夜

鬼は内へ福をば外へいだすとも年のひとつもよらせずもがな

雄 長 老

古今夷曲集 卷第五

賀 付 神 祇

元日祝

二本づゝ日本の門のまつたけは千年を千代の證據にやたつ
書初をすゝりの水に鳩の海はつかひほすとも君が代の春

行 風
應 其 上 人

正月三日祝の心をよめる

三日月の影ますやうに明日よりは猶よからうといはふ春かな

貞 徳

祝のうた

幾秋もかさね土器手にとりて汲めどもつきじ菊の酒壺

利 清

節分によめる

君が代に上下萬民もてはやす大豆や千年の數に節分

道 僖

祝 歌